
暗殺者とお嬢様

汐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗殺者とお嬢様

【Nコード】

N2779N

【作者名】

汐

【あらすじ】

とある世界にテンプレで転生した主人公。その世界は死亡率高めの世界で、彼は生き残るためにかなり努力する。でも、年を経るごとに調子に乗って、ついには中二としての才覚を表す。その主人公はある世界のある出来事をきっかけにあの世界に転生もしくは憑依または移動するはず。

第一話 生まれた先は……（前書き）

どうも、汐です。

この小説はキーワードがカオスになっていますが、要するにすずかメインの方で告知したように作者の暇つぶしに作られています。

なので完成度の高さを求められたりするとすごく困ります。

だから温かく見守っててください。

それから、ギャグセンス皆無の作者ですが、この作品はラブコメを目指しております。

主人公は最強だけど、バカで、しかもリリカルな世界では念能力を使うことがないかもしれない。

でも、万が一のために主人公には強くなってもらいます。

最初の方はひたすらH×Hの世界。

多分、GIのところでこの世界に来るはず。

第一話 生まれた先は……

「知らない天井だ」

それもそのはず。

何だかテンプレ的体验——いまどき転生トラック——をしてから、神だとか名乗る気ちがい転生とやらをさせてもらったはずなのだから。

もしも奴の言っていた事が真実なら、俺はどこぞの漫画或いはアニメの世界に転生を……アレ？

このお方は……

「キキヨウ良くやった」

ああ……これは不味いかもしれない。

どこかで見た事のある御顔だと思ったらどこぞの暗殺一家の方ではないですか。

確かごく少量でも鯨が死んでしまうような毒を喰らって問題ないと言つてのけた御方。

シルバ・ゾルディック

うん。

どう見てもその人にしか見えません。

よくよく話を聞いてみたらどうやらこの体は二男のミルキのものらしいです。

よりにもよつてこんなにも死亡率の高い世界に転生してしまうとは……運が悪い。

だがまあ、豚と呼ばれていたミルキの体だとしても、真面目に訓

練していれば念を習得して生き残れるはず。

それにいざとなったらゾルディック家に引きこもっておけば、例えあの蟻がやってきたとしても、我らが主人公ゴンとキルアか、或いはこのオッサン、又は祖父のゼノが何とかしてくれるはず。

というか、彼らに何とかできなかつたらホントに逃げ場がない。

まあ、そこまで先のことは考えずとも、当面の目標はこの家の訓練で生き残る事だろうか。

だってこの暗殺一家、拷問とか、毒とかの訓練をやらされるんだろ？

原作でもキルアが電撃を喰らって少し痛いとか言ってたし。

というか、それはキルアの場合だったからであって、全く才能皆無であるうミルキならとんでもない痛みになるはず。

というか、訓練という名の拷問に耐えられないだろう。

あ、でも俺という存在によってミルキ自身ではなくなってるから別になる？

まあ難しいことは考えなくても良いか。

とりあえず第一の目標は生き残り、そして念能力を習得する事。

オッサン、もとい父のシルバ。

見ている。

俺はやればできる子だ。

五年後。

え、早い？

まあ最近の二次創作にありがちなことだからそういう描写は控え
たつてことで。

だって聞きたくもないだろ？

24時間拷問の耐久レースとか。

まあ、産まれてからは何もすることが無い……とか思ってたら産
まれた次の日から超絶英才暗殺教育。

何だか話を聞いていたら、どうやら離乳食の段階から少しずつ
食事には毒を混ぜて耐性を付けるらしく、焦ってありました。

だけどそこは暗殺一家の腕の見せ所ということで、赤ん坊でも食
べられるように、且つ分らないように毒が混ぜてありました。

三歳からは漸く拷問に耐える訓練のスタート。

正直言って何回か逃げようと思いました。

でも、その度にお優しい兄上に連れ戻される始末。

多分、頭に針は刺されていないと信じたい。

俺はキルアと違って才能の欠片もないはずだから。

「親父、入るよ」

良く分からないけど、呼び出しをされています。

ということで長い長い石壁の廊下を進んでから親父の所に向かったら、そこにはじいちゃんもいました。

何だか微妙な雰囲気。

まあ、何で呼ばれたかは分かってるんだけど。

「ミルクか。そこに座れ」

ということで親父とじいちゃんと対面して座ることに。

正直威圧感が半端ないです。

威圧感というか、これ思いつきり念だよね？

入った瞬間に当てられたから瞬間的に“練”をして防御のつもり。別に“纏”の状態だったら何とかなるんだろうけど、この二人の威圧感に対してはとっさに“堅”をしてしまう訳ですよ。

「今日お前を呼んだのは他でもない。お前が念に目覚めたからだ」

ですよー。

だってあまりにも拷問がつらいから早くに念を習得してそこから離れようと思って。

でも強引に精孔を開くにしても親父に念を使いたいから開いてつて頼む訳にも行かないから、しょうがなく一カ月“点”及び“燃”をして自分で開きました。

まあ教えてもないのに息子が念を使ったらそりゃ教えない訳にはいかないですよ。

ということで親父から念のなんたるかを説明してもらって、これからは基礎体力を伸ばすと同時に念についても訓練するとの事。

え……？

これからは念だけじゃないの？　って聞いたら、身体が出来てなかったら話しにならないとの事。

ということでこれから五年間もひたすら身体を鍛える事が決定いたしました。

めでたしめでたし。

いや、別に全くもってめでたく無いけど。

ちなみに、未だ弟君のキルアは産まれてません。

俺が産まれたのは1980年ちようど。

つまり、キルアとは8歳違い。

ちなみに兄貴とは2歳違い。

あと三年経たないと天才が産まれてこないから俺の拷問は酷くなるんだよね！。

ということとで五年後。

え？　又早い？

文句言っなって。

どうせ原作で言っただ念能力の訓練しかしてないんだから。未だ俺の“発”も作ってないの。

って言うか、ひたすら天空闘技場にいました。

今日はやっと200階まで到達したから家に戻ってきた所。

ついでに言えば、途中でヒソカと思わしき人物に喧嘩を売られました。

案の定あの変態ピエロで、何とか退けることはできました。

しかも、何でなのかは知らないけど、天空闘技場へは実力試しというか、血沸き肉躍るような相手を求めてきていたらしいです。

そしてそこで目を付けられたのが俺。

ヒソカは闘技場には参加していなかったけど、とりあえず狙われたので何とか撃退しました。

まあ念能力を持つてなかったから勝てただけだ……。

アレであの二つの能力を持つてたら確実に勝てなかった。

ちなみに、俺はひそかの念の師匠ということになっています。

いつかやられるのではないかと内心ではびくつく毎日です。

でも、家に戻ってみて兄貴だとか、親父、ジジイを相手にしていたらヒソカって実はそんなに強く無いんじゃないかね？

みたいに思ってきました。

ちなみに、俺の潜在オーラと顕在オーラは半端ないらしいです。

ゾルディック家始まって以来の天才だとか、じいちゃんが喜んでました。

オーラ量だけは。

そう、オーラ量だけなんですよ。

だって五歳から天空闘技場に通いつめて、200階までかかった時間が五年間だよ？

才能なさすぎでしょ。

まあ、そのおかげで通帳には見た事もないような金額が溜まっているんだけど。

しかも、幾ら才能が無いといっても五年間ひたすら実戦訓練だったから、少しはマシになったんだよ。

でも、あのくそ親父とくそジジイ、ひどいっただらありやしない。俺が闘技場に放り込まれる前に念に目覚めたからってどこから取り寄せたのか、或いはゾルディック家に伝わっているものなのか、腕輪をはめ込まれた。

それがやばいのなんのって。

強制的にオーラが垂れ流し状態になるわ、どういう理由か知らないけど身体が重たくなったりだとか。

まあそのおかげで筋トレという筋トレをしないで済んでひたすら武術の練習をしてただけ。

家に帰ってみて、試しの門を開こうと思ったら余裕で全部開けました。

流石ゾルディック家の肉体。

というか、どこぞのアイテムの真似をしたような変な腕輪。

くそ親父によれば、俺のオーラ量はあり得ないの一言らしい。

それは俺も分かる。

試しに“堅”の状態を何分出来るかやってみたら、一週間そのままだったから。

しかも途絶える気配が全くないし。

ということでお次に“円”。

こいつはゾルディック家の敷地全てが範囲内だった。

うん。

テラチート。

でもね、凄いチートだと思つてると足元すくわれる訳よ。

家に帰ってさっそく腕を上げたからくそ親父に復讐しに行ったら

ものの三分で返り討ちにされました。

つつか何あのチート！？

何で俺の“硬”で殴ってもビクともしない訳？

ああ、あのくそ親父は強化系だったか。

そりゃ特質系の俺が殴ってもビクともしない訳だよ。

しかも殴るのはまだしも、“周”で纏った刃物でも切れなかったからねー。

いやもう。

ということで御次はくそジジイに復讐をしに行ったら、こちらは五秒で終わりました。

後ろから“絶”で近付いて一気に切りつける！

とか思ってたらいきなり振り返って「甘いわッ！」とか言いながら龍が襲ってきました。

あれやばいって。

身内に向ける業じゃない。

そう、技でもなく、業でもなかった。

多分、俺じゃなかったら死んでた。

うん。

バカみたいに量の多いオーラの俺じゃなかったら死んでたって。

というか今更ながらに気がついたけど、俺ってキメラアントの所だと一番狙われる対象じゃね？

バカみたいに量の多いオーラで戦闘力がくそ親父に届かないって。

やばい……例え“発”を作ったとしても生き残れる気がしない。

というか俺の考えてる能力、完璧にネタでしかも厨二病の奴なん

ですけど……。

しかも戦闘向きじゃないし……いや、少しは戦闘向きか？
でも結局は自分が強くなきゃ役に立たないという……。

いや、逆に考えるんだ！

強くなれる能力を他にも作る。

そう、そうすれば生き残れるはずだ。

そう考えていた時期が俺にもありました。

“発”を作ってヤッホーい、とかやってるはずが、何の因果か、
ジジイのジジイ、つまりはネテロ会長と同年だとか、いやそれよ
りかは年下だとか、まあ確かめるすべもない噂のあるあの超ジジイ、
マハ・ゾルディックと暗殺家業をしている訳です。

最初は人を殺すことに何らかの抵抗があると思ってたけど、流石
に暗殺一家に生まれて英才教育ならぬ洗脳を受けているから精神的
なダメージは無し。

むしろ殺らなきゃ後ろで控えている超ジジイに殺られる。

ちなみに、その超ジジイには、才能が無いと断言され、ひたすら
実戦訓練を付けられています。

俺が考えていた“発”は、どこぞの盗賊団の頭のように相手の念能力を盗むものだったり、若しくは某弓兵のように色々と武器を作る能力。

多分両方を作ろうと思ったらメモリが足りなくなるのは必至。

というか、俺は強化系からは一番遠い特質系であって、格闘とか剣を使つての戦闘はまずもって避けたい所。

でも、エクス。リバーだとか、エヌマ・リシュだとか、ゲイボ。グだとかはやってみたい。

厨二病だというのは認めるが、それでもこの世界に來たのだから、そう言う能力が欲しいのもまた事実。

んでもってもう一つ考えたのが、かの有名な写。眼を念能力で作れないかという事。

もしもそれが作れたら、相手の念能力を盗むでもなしにコピーできるかもしれないし、何よりも戦闘の才能が無いこの身としては、相手の動きを先読み出来る力はぜひとも欲しい。

念で予言が出来るなら、相手の動きの先読みも可能はずというのが俺の持論。

というかできなかつたら困る。

そもそも、先読みが出来るという前提で俺は武器開発の能力を作ろうと思っていたのだから。

欲を言えば、写輪眼もどきで——あ、。にしてい——相手の念能力のコピーもしたい所。

クロコと違って相手の能力を盗む訳じゃないから制約と条件は少なくて済むだろうし、何よりも俺の潜在オーラはゾルディック家でも類をみないほどに多い。

ならば、メモリもそれなりに多いはず。

というか、せっかくゾルディック家で英才教育を受けているのに、

戦闘の才能が無くて、それを補う念能力もできなかったら話にならない。

ちなみに、我が弟のキルア君は、二歳にして早くも天才の片鱗をみせている。

なのでくそ親父はキルアの教育という名の拷問に付きつきり。

ジジイはジジイで依頼をこなしたりしているから、結局は俺の教育係は超ジジイに回されたのだ。

兄貴は兄貴で暗殺を確実にこなしていて、キルアの教育を手伝っている。

もしかしたら、今はキルアに針を埋め込んでいるかもしれない。まあ別にキルアから針を取り除いてやろうとは思わない。

兄貴のゆがんだ愛情だとしても、結局はそれのおかげで死ななかった訳だし、あの針はキルアが自分で抜くだろう。

いざとなったら俺がメラアントの直前までキルアに付き合っやって、その間に針を抜いてやつても良い。

兄貴よりは強いから、何とかなるだろう。

そんな事よりも問題は、俺の念能力をどうするかということである。

一応超ジジイに相談してみたら、多分出来るとお墨付きだったので写輪眼と無限の剣製は出来るだろう。

というか、超ジジイには俺は才能はないくせに念能力だけは面白いと言われた。

まあ一族の中でもあり得ないほどのオーラ量だし、念能力は厨二だから考え付いたことだ。

まあ念能力については今後も詰めていつて考えてからということ、それよりもさらに問題がある。

暗殺一家ゾルディック家において、俺の癒しがキルアだけだということである。

まだ二歳だから膝の上において遊ばせてやっている。

原作で執事長のゴトーがやっていたようにコイントスをやっているのだが、この弟、チートにも程がある。

二歳にして俺の手さばきを看破するとは……。

流石にくそ親父と兄貴が惚れこむだけのことはある。

才能が皆無だと言われた俺だが、オーラ量はあり得ないほどに多かったので、キルアが産まれるまでは後継者として育てられていた。まあ産まれるまでだが。

そしてキルアが産まれた瞬間に母親は俺の事など産まれていなかったかのように扱う。

まあキルアが可愛いから仕方ない。

ちなみに、これが一番大事なことだが、キルアに最も懷かれてるのは俺である。

まあ他の誰かと違って痛めつけたりといった愛の鞭をしていないからだが。

あ、そう言えばこの間漸くミケが侵入者排除の役割を担うことになりました。

何と云うか可愛い奴です。

キルアについてももしかしたら俺の癒しになるかもしれない。

あの子みてたら念獣が欲しくなりました。

まあメモリが足りなくなる事必死だからできれば念獣持つてる奴の能力をコピーしたいけど。

第一話 生まれた先は……（後書き）

ということ、まさかのミルキに憑依。

原作と違ってミルキは特質系、そして痩せています。

つまり、あのシルバの遺伝子を受け継いでいるがために、かなりのイケメンなはず。

というかそう信じたい。

念能力はひたすらチートにする設定。

それがいやだったらお読みにならないように。

感想は随時お待ちしております。

これからよろしく。

第二話 念能力

さてさて、三年をかけて開発した念能力をご紹介します。

まず一つ目はご存知、『写輪眼』。

ちなみに万華鏡ではないのでそれぞれの目に特殊能力が宿っているということはないのであしからず。

そして気になる能力のほどはこちら！

まずは相手の念能力のコピー。

そして相手の動作の先読み。

ちなみに制約を付けたので念能力のコピーは可能になりました。

そんでもってその制約はこちら！

まずコピーについては、相手の念能力を“凝”で見る事。

まあこれは写輪眼の特性をそのままにしてみたので何ら不利になる制約じゃないし、そもそも見なければ相手の念能力がどう言ったものであるかは分からないから問題なし。

そんでもって、能力名を知る事。

これは結構難題かもしれない。

相手が自分の能力について語ってくれなくてはいけないのだから。ぺらぺらと自分の能力について語ってくれる奴はどう考えても一流の使い手じゃないから、もしかしたらコピーできる能力は使えないやつかもしれない。

そしてその三、実際に念能力を身をもって経験する事。

ちなみに、喰らう事が出来ない能力もあるので、そう言った場合の事も考えて、能力の発動中に相手の念に触れる事が出来れば良いものとなっている。

これがコピーできるに相応しい代償となったのだらうと考えてい

る。

だって念能力を身をもって喰らうということはそれだけで死のリスクが伴うのだから。

だが、俺がこれを制約に入れる事が出来たのは俺の多大なる念能力の恩恵がある為。

つまり、俺は“堅”の状態でさえいればジジイの能力を喰らっても死ななくて済むので、大抵の能力では物理的には死なないと見たのだ。

まあ、毒とかそう言うやつは一応ゾルディック家として耐性があるし、欲しい能力はそう言うやつじゃないので考えなくても良いだろう。

そして、俺と似た能力を持つ旅団の団長さんは能力を盗む段階でかなりのリスクを背負っていた訳だが、俺は盗むのではなくコピーだから制約が少なくてすんだのだと思う。

そして、最後の制約が、コピーした能力は特質系が100、具現化系、操作系が80、変化系、放出系が60、強化系が40%しか扱えないということ。

団長がどうだったかは知らないが、これもコピーするにおいて結構なポイントとなっているだろう。

名前を忘れたが、旅団の能力者で腕をぐるぐると回す強化系だろう能力者の能力は、俺は同じ威力を出す為には2・5倍の回数が必要だということだ。

ちなみに実験第一号となった超ジジイの能力はこちら。

“絶”で居た時間の分だけ、自身の念能力の効果を上げる事が出来るというなんとも卑怯業であるものだ。

能力名は『絶対時間』。

そこ、そのまんまだとか言わないように。

ゾルディック家の超ジジイに狙われたくないのなら。

ちなみに、『写輪眼』を開発してから漸く超ジジイには勝てるようになった。

まあ暗殺家業を終えた後、つまりは超ジジイが能力を使えない状態でだけど。

そしてここでもう一つの能力をご紹介します。

その名も！！『無限の剣製』。

はいそこ！！

またしてもそのままだと言わないように。

何か文句のある奴はゾルディック家まで。

今ならくそ親父とジジイ、超ジジイの三人を暗殺に向かわせます。

とまあ冗談はそこまで、実はこの能力は作っていません。

何故なら、写輪眼だけでメモリが足りなくなったから。

それは、思ったよりも写輪眼の能力に対するリスクが少ない事に関係があるのだと思う。

本当は作りたかったんだけどしょうがない。

ここは誰かの能力をコピーすることで我慢するでしょう。

ちなみに、今現在俺がコピーしている能力は超ジジイ、ジジイ、くそ親父、兄貴の四人分。

他の家族が持っている能力は正直どうでもいいのばかりだったんで。

ということで今現在、俺がコピーしなければいけない能力は念獣を作る能力、道具を作る能力の二つ。

もしかしたら、兄貴について行く過程で旅団と接触できるかもしれないから、その時に物をコピーする奴が居たと思うからその能力をコピーしたいものだ。

そして二年後……

だから早いと言わないの。

だってひたすら人を殺してるだけだし。

ちなみに、俺が特質系の能力者であることに関係があるのかどうかは知らないけど、一年前から家を飛び出して放浪しています。

流石は個人主義。

あ、暗殺は一年前に止めました。

ジジイと同じで仕事でもなければ好き勝手に人を殺したりはしないって。

タダ働きは絶対にダメ。

ということ、今は来たる時の為にグリードアイランドを手に入るべく金稼ぎをするため、会社経営をしています。

そして今更ながらに気がついたけど、もしかしたらこの世界って俺以外にも転生者とか居るんじゃない？

なら、もしも現実世界に一刻でも早く帰ろうかと思っている奴は、間違いなくG Iに参加しようとするはず。

或いは、念能力を得てからキルアと同じ年のハンター試験に参加

するはずだ。

ということで、俺もその年のハンター試験に参加しようとは思っているのだが、もしも、もしもだ、その年のハンター試験に転生者が集まるのだとしたら、念能力者が沢山いることになる。

そこで俺が沢山コピーできるかもしれないという可能性がある訳だ。

まあ、ヒソカが暴走するという可能性もない訳ではないが。

そんなことはその時になったら考えればいいことだから、それよりも今考えなければいけないのは個人資産をどうにかして最低でも200億あたりにまでは増やさなければいけない事。

幸いにして、俺は天空闘技場で五年間居座っていたから、70億ほどの個人資産はある。

それに、暗殺家業でかなりの大金を稼いだのだ。

今ではその70億にプラスして20億ということで、約90億が自分勝手に使える金額だ。

このまま順調にいけば、その時期になったころには個人資産も200億は突破している筈だ。

何せ、屋敷に仕えていた執事の中から優秀な奴を集めてやらせている。

勿論、軌道に乗るまでは全て俺がやっていたが、今では俺は全くの無着手。

勝手に金が入って来るようにしかっていない。

今は1996年。

会社経営もせずは何をしているのかと言えば、勿論この世界を旅している訳だ。

そしてこの年でピンとくる人もいるのだろうが、俺はそれに気がついたのは新聞を読んでから。

ということでは今は旅を切り上げてクルタ族のいた場所に向かっている。

ちなみに、今更ながらにご紹介するが、この二年間で俺がコピーした能力の内に、念獣を作る能力もある。

名付けて、『愛玩動物^{ペット}』。

酷え名前だと思ふことなかれ。

この能力、実に驚異的なのだ。

その名の通り、癒しの能力が半端ないのである。

見た目はちびライオン。

目に入れても痛く無い可愛らしさである。

しかも、戦闘能力ではなしに、ただ単に癒しの事だけを考えて作られているから究極の癒しを体現しているのである。

ちなみに、戦闘能力は皆無だが、このちびライオン——というかぬこ——は癒しそのままに、怪我を治す力を持っているのだ。

しかも怪我だけではない。

毒すらも解毒してしまう。

何と言うスーパーなぬこだらうか。

名前も知らない念能力者、ありがとう。

ちなみにこのぬこ、名前は未だつけていない。

多分、自己紹介の時には毎回こう言っているのだらう。

吾輩はぬこである、名前はまだない。

話せるようにした方が良さのだらうか……。

いや、でも……話せるよりも鳴き声の方が可愛い気がする。

うん、そうだらう。

まあそれはおいておいて……先ほどから付けられているのである。味気のない旅に飽きてぬこを出したあたりから。

実力的には大したことのない輩であることは間違いない。

何せ、“円”をしていないのに気付いたのである。

まあ相手が“絶”をしているので俺に気付かれないと思って
いるのかもしれない。

だが、相手が悪かった。

こちらは小さい頃から英才教育を施された暗殺者なのだ。

気配には敏感だし、というかそうでなければあの家では生き残れない。

ちなみに先ほどから俺の頭の上に鎮座しているぬこは、全く気付いていないご様子。

癒しのぬこだから仕方が無いが、もう少し警戒心を持って
くれても……いや、それを求めるのが無理か。

何せ俺は修行の末に超ジジイにも勝利できるようになったのだ。

俺の頭の上はこれ以上ない安全地帯だと言える。

「……いい加減に出てきてくれるとありがたい」

無視するのも疲れてきた。

というか今までは暗殺をしていた訳で、付け回されるのではなく
付け回していたのだ。

やられるのは精神的にダメ。

今までなすすべもなく俺に殺されていったモブキャラ達はい
う心境を味わっていたのだと思うといたたまれないものがある。

「……」

うーん……出てきたのは出てきたんだけど……。
どう見ても10歳くらいのガキ……いや、少女？
どっちでも良いけど来ている服は薄汚れているし、何と言っか今にも死にそう。

というか、こんな子供が“絶”をしてたのね。
一人でこんな所にいるってことは……独学か？
だとしたら計り知れないほどの才を秘めている。

「で？ 何か用？」

とりあえず何かあつてからでは遅いので、“凝”。

「……念を教えて欲しい」

いや、さっきまで“絶”使ってただろ……。

「さっきの“絶”は？」

「……自力」

ああ、つまり四体行はやったのか？

って言うか“絶”って言葉は知ってるんじゃないの？

……ああ、何か考えてたら頭痛くなってきた。

って言うか俺もまだ12歳じゃん。

今更ながらに気がついたけど。

だから難しい事考えてたって分からないんだって。

「自力でやったのに念と絶って言葉は知ってるのか？」

考えるよりも聞く方が得策、って言うか面倒だから聞いた方が早

い。

「貴方と同じ……転生」

あ、そう言う事ですか。

うーん……ここで俺が念を教えるメリットは？

まあ念が使えるっていうだけで心強い仲間であることに変わりはないが、裏切るという可能性が無い訳でもない。

その時はその時で不味いよなあ。

流石の俺も後ろから不意打ちとかされたらさばき切れる自信はないし。

というか格闘センスが皆無なので某弓兵のように二流を極めた訳だから、直接戦闘は避けたいところだ。

まあ暗殺一家に生まれたから少しはマシだと思うが。

「メリットは？」

まあ念を覚えたいのはこの世界に来たからだろう。

念でも覚えなければ流石に空気にプロテインが入っているとわれているこの世界でも生き残れないだろう。

「……貴方は元の世界に帰りたいと思わないの？」

「正直どっちでも良い」

別にこの世界で生き残れないとは思わないし、何よりもこの世界は念とかがあって面白いし。

「私は何が何でも帰りたいの。……協力して欲しい」

いや、だから俺のメリットが無いと思うんですけど……。

「メリットならある。……元の世界に生きて帰れるなら私の事を好きにしてい」

「……ハ？」

いや、思わずカタカナになってしまった。
何を言ってるのだろうかこの子は。

あ、好きにしていということは俺が男だと分かった上で女であることなのか。

「何なら今ここで服を脱いでも良い」

「いやいや！ そんなことしないでいいから！」

今この現場を誰かに見られたら確実に俺が犯罪者になる。

あれ？ でも同年くらいだから犯罪にはならない？

いやいや、そんな事考えるのも止めた方が良いな。

「なら、教えて欲しい」

「……分かったよ。俺の負けで良い」

まあ能力の如何によつては役に立つ事があるかもしれないし。

何よりも俺がG Iを手に入れたらクリアするのに役立つというか

……まあ難しい事を考えるのは……アレ？

そう言えばG Iって……もしかしてアレ？

「あ……」

「どうかしたの？」

「い、いや、何でもない」

い、言えない。

そう言えばどっかのおっさんの手伝いをした事があったなんて。そういやよくよく考えてみたら俺が能力を一つしか作れないのってアレのせいなんじゃないの？

何というか……まあ考えないようにしておこう。

第二話 念能力（後書き）

二日連続投稿。

快挙！ でもないけど

ちなみに後五日は頑張れるはず。

そんでもって感想お待ちしています。

あ、念能力だとか、世界観だとかかなり無視している部分がありますが気にしないでください。

この世界はリリカルに渡るまで、主人公が力をつけるためだけに用意したので。

第三話 弟子（前書き）

感想でボコボコに叩かれている……

念の設定とか、世界設定とか、色々と適當になっています。
だから極力突っ込まないで下さい。

第三話 弟子

「そう、んでそのまま」

とりあえず四大行を一通り見てから練を維持させる。
自力でと言っていた割りにはだいぶ完成されている。

まあオーラ量は俺と比べるべくもないし、念能力者としてどうであるかはともかく、身体の方はこの年にしては結構鍛えてある。
多分ハンター試験を受けに来た時のゴンくらいの身体能力はあるだろう。

「ッ、ハア……」

「うーん。まあそんなものだろうな」

“堅”は十分に届くか届かないかといったところ。

念に関して言えばこれから精進しましょうとしか言えない。

オーラ量が少ないということはそれだけで念を使つての戦闘に関して言えば不利にしかない。

まあオーラ量はこれから修行して増やしていけばいいとして、それよりも問題は身体能力の方だろう。

ゴンみたいな運動神経があるとは言つても、力はまだまだ。

ゾルディック家の試しの門を一つも開けないだろう。

それだとこれから先では生き残れない。

というか、ハンター試験も危ないのではないのだろうか。

変態ピエロとか、兄貴とか、天才弟とか居るし。

ああ、後何人が転生者もいるだろう。

そんな中で生き残るにはそれなりの実力が居る。

「じゃあまずは身体能力の向上を目指そうか」

「……ゾルディック家で？」

「そりゃ無いな。あそこには戻りたくないし」

第一に、そこまでの環境が無くても筋力は付く。

“絶”の状態で筋トレを繰り返すだけで筋トレは通常以上の効力を持つことになるのだ。

まあ筋トレの道具が無くてもそこらへんの岩を砕いて背負ったりすればそれで筋トレになるだろう。

とりあえず試しの門を一つだけ開けるようにさえなれば、後は念能力の習得に励んで大丈夫だろう。

「とりあえずこれ付けて」

「……これは？」

「俺が修行で使ってた腕輪。まさか役に立つとは思ってなかったけど」

そう、天空闘技場で使っていた腕輪だ。

筋トレを終えるころにはオーラ量も少しは上がっているだろう。

あ、ていうかこれって筋トレの効力もあつたんだっけ。

じゃあ筋トレの練習はしなくても良いか。

「その前に水見式……ってそう言えば名前聞いてなかった」

「……キョウカ」

「そう。俺はさっきも言ったけどミルキ。よろしく。じゃ、水見式ね」

「……」

「具現化系、ね。原作組で言えばクラピカと同じか」

最も特質系に近い能力者。

というか、今更ながらに思ったけど具現化系なら元の世界に戻る念能力を作るんじゃないだろうか。

まあそれほどの念能力を作るだけの能力者に成長出来るには何十年かかるだろう。

「……それは私もクルタ族だから」

「これはまた……」

それなら納得もいく……のか？

まあどちらにしてもクルタ族の生き残りが居たとは驚きだ。それなら……。

「キョウカとクラピカ以外にもクルタ族の生き残りは？」

「……居るかもしれない。旅団が来る前に出て行った奴もいるから」

ということとはクルタ族の中にも転生者は居たのか。

この分だとこの世界に何人くらいの転生者が居るのやら。本当にハンター試験で転生者が集合する事になりそうだ。

「どうやって元の世界に戻るかは考えてある？」

「……グリードアイランド」

だよなあ。

あそここのカードで元の世界にいる人の名前で戻れるはずだもんなあ。

まあそれなりの修行を積んだら具現化系で……何とかできそうな気もするけど。

「念能力で元の世界に戻るつもりは？」

「……出来るの？」

「正直微妙かな？ それなりの使い手だったら出来るだろうけど、念を習得して数年だったらずでできない。というか、念がどの程度の効力を持っているのかは理解不能だから」

念で予言は出来るけど、世界を飛び越える事が出来るのかは不明だ。

G Iを作った能力者は一流ばかりが集められているからできるだろう。

実際、ジンはネテロ会長によれば世界でも五本の指に入る能力者だっというし。

というか、具現化系でそう言う能力を作るとしたら……扉みたいな形になるのだろうか。

特質系だったら問題なく作れるだろうが、具現化系だったら半々だろう。

まあ俺も能力者になってから十年近くしか経ってないから確信できるかは微妙な所だ。

「ま、GIは确实だと思うよ。それにいざとなったら転生者たちが集まる所、つまりはハンター試験を受けてみれば良いと思うし」

何よりも、念というのは自分で身につけるか、ハンターになるかしかない。

それなら我慢の出来なかった転生者ならまず確実にハンターになると思うだろう。

それに、ゴンとキルアが受ける年のハンター試験だったら内容も分かっているから皆がそれを狙うはずだ。

その中に特質系の能力者が居れば、万が一の時にもそう言った能力を作ろうとする奴が現れるかもしれない。

まあ元の世界に戻りたいという奴が居ればの話だか。

「じゃ、行こうか」

「……ちょっと待って。もう一人仲間が居る」

「聞いてないっす」

「……言っただけ」

「まさかもう一人も転生者でクルタ族だったり……」

「……転生者ではある。でもクルタ族ではない」

「そう、で今はどこにいるの？」

「……食料調達」

ということとで時間関係とか何とか色々と重要なことをすっ飛ばして……今はあれから何年だっけ？

まあ年とか色々細かい事を考えるのは止めて、今はとりあえず天空闘技場に向かっていている所だ。

何でかと言えば、漸くヒソカが天空闘技場に参加したから。

ということで、ヒソカが200階に到達する前に間に合うようにと、自家用ジェットを飛ばしている訳だが、キョウカとクリスの二人にはどこに行くかは伝えていない。

ちなみにクリスというのはキョウカの仲間で、共に元の世界に帰る事を目標としている転生者。

キョウカと知り合ってから俺が鍛え上げている訳だが、何の因果があつたのか、かなりバランスの良いチームになっている。

キョウカが具現化系で、クリスが強化系。

ちなみにクリスはキョウカと同一年の女の子。

キョウカの方が背は小さくて、髪の毛はというか顔立ちはクラブピカに似ている。

クリスの方は髪をポニーテールにっていて、どこかで見た事のあるような顔立ちだと思ったら、どこぞの神鳴流の剣士に似ている。

まあ本人もそれを分かっているらしく、強化系だからということ
で刀を使っている。

実力のほどはどうかかわらないが、少なくとも二人とも試しの門
を最初の奴だけは開けるし、堅も一時間は維持できるようになった。

そして何よりも凄いのは、キョウカの能力、『スペシャル スパイス我儘な調味料』。

これは具現化系の彼女が念能力を込めたスパイスを料理に振りか
けることで、他者の能力を上げることが目的としたものだ。

本人にはもう少し戦闘よりの能力を作らなくても良いのか聞いた
ところ、戦闘は最初からクリスに任せることにしていたらしい。

だから、補助の能力を作ったのだとか。

実際、この能力でクリスは格段に強くなっている。

多分、今では天空闘技場で問題なく全勝出来るだろう。

ヒソカがいなければ。

それはともかく、ここ数年で俺も漸く個人資産が200億を突破
した。

これで晴れてヨークシンの時にはオークションでG.I.をゲットす
る事が出来るだろう。

さらにさらに、キョウカの能力のおかげで完全癒しだったはずの
ぬこも進化した。

主に、念能力を扱えるようになってしまったのだ。

まあ具現化系の能力で作られた念獣だし、最初から念能力を使え
るだろうとは思っていたが、『我儘な調味料』のおかげで予想だに
しない力がある。

男一人に女二人という良く分からないチームになっているが、彼
女達と出会って以降であったことのある転生者は、アーチャーとギ
ルガメッシュと名乗る二人だけだ。

しかも予想通りというか何と言うか、その名前にふさわしい念能

力を持っていた。

ちなみに少し予想と違っていたのは、この二人が既にハンターで、しかもブラックリストハンターとかではなく美食ハンターだった事だ。

今はキメラアントを求めて旅しているらしい。

何でも珍味何だとか。

まあ、欲しかった能力が得られたから彼らについては文句も何も言っまい。

びつくりしたのは彼らの師匠があのだビスケだということだろう。

そして、クリスの刀はそのアーチャーに作ってもらった。

しかも、神字が彫られている。

くそ親父のように「俺の肌に傷を付けるとは……」とか言わないが、少なくとも“周”をせずに俺の肌に傷を付けた時には驚いた。一応暗殺一家で鍛え上げられて、そしてそれ以降も修行を続けているから並みの刃物では傷がつかないようになっていた。

それなのに“堅”をしている俺に対して傷を付けるというのは流石にどういうチートなのかと呆れたほどだ。

まあ、あの二人組は三ツ星ハンターらしいし、考えるだけ無駄なのかもしれないが。

それよりも問題なのは、キョウカとクリスの二人が目の前で出しているオーラである。

いや、間違えても念の事ではない。

百合の花が咲いているのだ。

しかも俺など同じ場所に存在していないかのように。

まあキョウカ的能力からしてお互いがお互いの事を大事に思っているとは分かっていたが、まさか同性愛者だったとは……。

まあ二人とも超がつくほどの美人だし、目の保養になることは確かだが。

目の保養にはなるが、やはり俺の癒しはぬこ一人だけだ。

ああ、可愛いよぬこ。

そんなに俺の顔をペロペロしなくても構ってやるから。

ということをやってきました天空闘技場。

「一応二人にも参加してもらおうと思ってる」

「……」

「あの、その露骨にいやな顔を止めてもらえないでしょうか。確かに二人の空気を邪魔したことは謝るけど、俺も二人の事を思っ提案してるんだけど」

「はあ……。しょうがない……。クリス行く」

「うむ。わしはキョウカの言うことなら喜んで従おう」

確か200階までは武器の使用は不可能だけど、まあ二人の筋力なら大した問題ではない。

それよりも、200階まで行った時に念能力者相手にどれだけの戦いをできるかだ。

クリスは大きく心配をしていない。

俺と違って戦闘のセンスもあるし、何よりもキョウカの能力で確実に強くなっている。

問題はキョウカだ。

あの能力は自分の事を強くすることが出来るものの、好戦的な性格でもないし、戦闘は全てクリス任せだ。

流石に護身術程度には武術をかじったが、もしかしたら一人で相手に対峙する事が無いとも言えないから、多少なりとも戦闘の経験を積んでおいた方が良く。

どうせなら命をかけた戦闘が一番成長するのだが、いかんせん死んでしまつては元も子もない。

まあ天空闘技場で勝てるレベルにまで成長したら護身としては申し分ないだろう。

「じゃ、今日はヒソカの戦いを見てくるように。俺はちょっと仕事が入ったから。数日したら戻ってくる」

仕事、とは言っても個人資産を増やす方ではない。
暗殺家業の方だ。

何でも、このくそ忙しい時期に厄介な仕事が舞い込んできたから俺も手伝えとの事。

ジジイ、超ジジイ、兄貴はそれぞれ仕事で出払っているらしく、キラアや他の弟達に任せるには無理だとか。

そんでもつてくそ親父が行けば済む話だろ、と言いついたら以外にもくそ親父自ら、失敗するかもしれないとぬかしやがった。

お前が失敗するなら俺が言っても足手まといだろ、とか思ったけど何でも超ジジイの推薦らしい。

全くあの人も厄介なことをしてくれたものだ。

第三話 弟子（後書き）

すこしガールズラブみたいになってる……キーワードに入れるべきなのだろうか。

第四話 幻影旅団（前書き）

もはやほとんど適當。

何を書きたいのか分からない。

そして感想で相変わらずボコボコに叩かれている。

鬱だ……

第四話 幻影旅団

「おいおい……冗談きついつてマジで」

くそ親父が失敗するかもしれないと言っほどの相手だからどれほどの使い手なのかと思っていたら、相手はまさかの旅団。

背中番号は8番。

そう言えば原作では確かにくそ親父が旅団の一人を仕事でやっていた。

今までクリスとキョウカに修行を付けていたから俺も本気での戦闘は久しぶりだ。

自分の力がどれほど上がったのか、試してみたい。

そんなにも戦闘狂ではなかったはずだが、やはりゾルディックの血が俺のにも流れているのかもしれない。

ジジイは殺しとかは仕事じゃないとやらないと言っていたが、殺しと戦闘は話が別だ。

「親父、俺がやる」

——能力発動

言うが早い、自身の能力を発動させる。

この場に居るのは俺と親父と旅団の8番、そして団長。

依頼は8番だけだし、下手な手を打たなければ確実にやれる。

そして見るからに相手は強化系だ。

こちらは特質だけど、暗殺一家ゾルディック家で鍛えられ、なおかつ反則な念能力者。

いざとなったら親父にバトンを渡せばいいから、負ける要素はどこにもない。

団長が手を出さなければと言う前提条件だが。

『龍頭戯画』

ジジイの使う念能力でまずは様子見。

強化系の能力者相手にいきなり接近するのは悪手だ。

遠距離で様子を見てから、必要なら近距離の戦闘に切り替えて一気に決める。

特質系の俺にとって、変化系のこの能力はジジイが使うよりも40%程の力しか発揮できない。

だけど、この能力はオーラを物理的攻撃力を持つほどに圧縮する能力だ。

オーラ量が半端ない俺なら過分にオーラを使うことでジジイの威力そのままに能力を使う事が出来る。

「そこっ！」

右に、左にと左右に揺さぶってから上に飛んで交わした所で龍を敵の体に巻きつける。

この戦闘の間に相手は一言も発していない。

逆にそれが不気味だ。

もしかしたら、言葉を失うことで何らかの強力な念能力の代償としているのかもしれない。

強化系だろうが、もしも代償を必要とする能力だったらその一撃は計り知れないものになることは間違いない。

油断は禁物だ。

「ッ！！ 危な！！！」

案の定、せっかく捉えたのに瞬間的にそれを解かれ、さらには俺との距離を詰めてきた。
迫りくる拳に対して過剰とも思えるほどのオーラを使った“堅”で防御する。

——ドガッ！！

想像以上の破壊力。

ジジイの能力でやられた時よりも威力はある。

流石に強化系。

だが、特質系相手に一撃で決められなかったのは悪手そのものだ。

『無限の剣製』

かのアーチャーからコピーした念能力で数十の剣軍を自身の周りに展開させて、その威圧感で敵を一度退ける。

そしてそれをそのまま——

「発射」

流石に、旅団。

タイミングをずらして発車させたのに、一本も当たらずに避けられてしまった。

土ぼこりがたち、それが風で晴れると男の周りに剣が突き刺さっている光景が目に見えかぶ。

そして、そこにとどまるのも悪手。

——ドゴオオオオン

轟音を立てて、剣が一斉に爆発してもう一度土煙を起こす。

今の衝撃で地面が若干凹んでいる。

恐らくは今ので死んだか、或いはかなりのダメージを与えている筈――

「と思つてただけどなあ」

まさかの無傷。

いや、服に若干の汚れが目立つから喰らったことは喰らったのだろうが、恐らくはオーラを防御に全て回したか。

流石は強化系。

単純な攻撃力と防御力では他の系統の追隨を許さない。

そして特質系はその正反対だ。

具現化系の能力は80パーセントの力で扱えるとは言え、この技は燃費が悪い。

流石の俺でも一日に十回も使ったらオーラを全て持って行かれてしまう。

大体今ので残っているオーラが7割強。

恐らくは今の衝撃を喰らわなかったために、相手もオーラの殆どを防御に回したはず。

ならば、相手の残りオーラ量もわずかだろう。

強化系相手に近距離戦闘は避けたい。

何しろ、旅団クラスの間相手に近距離線をやつてのけるほどの力量は持っていない。

一撃貫つ事前提で確実に当てるか、それともジジイの能力を使つてじわじわと追い詰めるか。

「いや、やっぱここはアレか」

後ろでド派手な音が聞こえる。

恐らくは親父と団長が戦闘しているのだろうが、音からして小技を出し合っているという所。

こちらを早めに決めないと形成がどう転ぶかわからない。

「ほんじゃ、まあ」

『絶対時間』

ちなみにこれはどこかの地方に住んでいて目が赤くなる民族の生き残りの彼が使う能力とは違うものなのであしからず。

これで“絶”になる。

親父でも難しいという仕事だったからこの能力を使う事も考えて、連絡を貰ってから今の戦闘に突入するまでにずっと“絶”を使っていたが、流石に旅団相手にいきなりこの能力は使えなかった。

だから、今からまた時間を少し使って威力を溜めなければならぬい。

幸いにも、戦闘中にいきなり俺が“絶”の状態になったから、相手は疑心暗鬼になって近づいて来ない。

この最中にも念能力が発動しているとも思っているのだろう。

戦闘中に“絶”をすることなど、正気の沙汰ではない。

だが、俺がゾルディック家、暗殺のプロだと言う事がその認識すらを邪魔している。

念能力者同士の戦闘で“絶”をするなど前代未聞の行為だ。

実際に、親父ですら一瞬ぎよつとなった。

だが、俺が相手の能力をコピーできる事と、超ジジイの能力を思い出したのだろう。

すぐに自分の戦闘に意識を割いていた。

——ヒュッ！！

最初に小石を投げられたのでそれを避けると、何もしていないと思っただのか8番が俺に近づいて蹴りを放ってきた。

「ガッ！！……捉えた」

当たる寸前に“堅”をしてガード。

俺は格闘センスはないと分かっている。

ましてや相手は旅団の強化系。

普通に拳を叩きこむのは不可能。

だから、最初から相手の攻撃を喰らうつもりだった。

そしてそのまま蹴り足を掴んで地面に相手を打ち付ける。

衝撃は確実に伝わっているのに、それで悲鳴すらも敵はあげない。

「終わりだ」

左手で相手の足を捉えたまま、右足で背中を踏みつけて逃れられないようにして、右手に“硬”でオーラの全てを集めて振り下ろす！！

かくして俺の拳がヒットして、確実に相手の命を絶った。

「ふうー。あーしんどかった」

さっき相手の蹴りをガードした左腕の骨がいかれてしまっている。俺の“堅”でもやられたのだ。流石に旅団を甘く見ていた。

「親父は、っと」

団長と遠くの方で睨みあっていた。
まさしく一触即発と言ったところ。

そこへ瞬動の要領で足の裏からオーラを放出させて一瞬で近づく。
残り少ないメモリで作ったこの能力、以外に重宝している。
ちなみに能力名はそのまま『瞬動』。

「親父、こっちは終わった」

「そうか……なら依頼は終了だ。帰るぞ」

思ったよりも、団長は俺に対して恨みだとか怒りの視線をぶつけていない。

ひと悶着あるくらいの事を想定していたが、旅団が生き残る事を考えたのか、以外にも冷静だ。

そのまま団長に背を向けて足早に立ち去る。

俺は“円”を展開したままで、警戒心を残しておく。

だが、俺と親父が飛行場につくまで、結局何も起きなかった。

「左腕を、やられたのか」

「ああ。マジで強かった。正直幻影旅団が全員相手だったら勝てない」

それは親父も痛感しているだろう。

顔からも、割に合わない仕事だったというのが窺える。

多分、今まで旅団の暗殺の依頼はなかったから、恐らくは一級犯罪者と同じくらいの値段で暗殺を請け負ったに違いない。

「親父の方はどうだった？」

「奴は俺の能力を盗もうとしていた。だが……本気でやっていたら分からなかったな」

親父にここまで言わせるとか……やはりクロロはかなりの使い手だ。

俺も同レベルの使い手との命がけの戦闘を初めて経験したが、正直ここまで苦戦を強いられるとは思っていなかった。

何よりも、親父に傷がついていると言うのが信じられない。

今までに仕事で傷を負った事など、俺の記憶の限りではない。

とりあえずぬこを出して傷の治療。

「親父、傷を治療するから」

それだけ伝えてぬこになめさせる。

最初は怪訝な目をしていたものの、ぬこに舐められた傷が見る見るうちに塞がっていくのを見てから、俺が見た事もないような優しい目で親父がぬこを撫でる。

流石は癒しの権化。

ゾルディック家の当主ですらもこんな表情にさせてしまうとは。

「という訳で以上が今回の俺の仕事」

帰ってきて、何故か一人一部屋取っていたキヨウカとクリスに今回の仕事の内容を伝えた。

「……バカ？」

「じゃな。お主は阿呆であろう」

「いや、こうして無事に帰ってきたじゃん。それに親父もいたから死ぬことは万が一にもあり得ないって」

心配してくれているだろう。

少なくとも、念の師匠が居なくなってしまうとか、そう信じたい。決して、良い雰囲気になっていた二人の空気をぶち壊して部屋に入ったからだとか、そう言うことは考えたくない。

「……台無し」

「そ、そうじゃ！　今からわしはキヨウカとイチヤイチヤする所であったのに」

はい、決して俺の事を心配したとかそう言うことではなかったようです。

うん、何故か二人で一部屋ではなく、一人一部屋取っていて、しかもその内の人一屋には荷物すら置かれていないからまさか俺ようだとか考えたくもなかったけど、そう言うことだったらいい。

「うつ……少しは心配してくれてもいいんじゃないの？」

せめて「ばっく」とか言いながら涙目に俺を叩くくらいはして欲しかった。

それがラブコメの王道と言うものであろう。

全然意識していなかったのに、離れることで俺を意識するようになるとか……あり得ないか。

この二人誰がどう見ても入り込める隙間すらないし。

というか、そろそろキョウカにはツツコミを入れない。

「何で下着姿？」

いや、正直俺としては眼福物だからそのままでも良いんだけど。

「……これからクリスとヤル所」

そこ、頬を染めないように。

貴方は無表情だから恥ずかしがっているのが分かりやすいし、何よりもその表情は独り身の男にとってはつらいです。

「ってそういうことを聞いてるんじゃないんで、俺が居るのに服を着なくていいのかってこと」

いや、視線をそむけようとしてない俺が言うのも何か変だけど。

「……特別サービス。命の恩人だからこのくらいはしてあげても良

い。別に減るものではない。大事なものはクリスの為に取ってある」

世界中の女の子に聞かせてあげたい言葉だ。

ちなみにお相手のクリスは先ほどから隣で悶絶している。

「ま、良いけどさ。キョウカが気にしてないなら」

「……それに貴方のことは嫌いではない。むしろ、クリスが居なかったら一番好き」

「あ、それは……有難う」

何で俺が赤面しなきゃいけないの？

しかもクリスに睨まれてるし。

「……でもクリスとは比べ物にもならない」

うん、まあそうだろうね。

そんなの数年間も一緒にいたら分かるって。

「じゃ、やる事やったら隣の部屋まで」

「……明日でも良い？ 今日にはクリスを寝かせない予定」

「……良いよ。別に」

第四話 幻影旅団（後書き）

早くにハンターを終わると言っておきながらグダグダやっている…。

ちなみに次回からハンター試験をやる予定。

漫画を持っていないので、アニメに準拠している部分が多数ありますが、まあ気にしないでください。

というか、もう一度言っておきますが設定は適当です。

正直見返してもあり得ないだろ、というのが多数。

第五話 一次試験（前書き）

すいません。

昨日は家に帰るのが遅れてそのまま寝てしまいました。
ということでは今日は二話か三話、更新します。

第五話 一次試験

「あー……焼肉定食」

そう言えばオークシンの前にオークションでG Iが出るじゃんと思いだし、結構溜まっていた個人資産を使って一本競り落とす。

ちなみにオークションとかそう言うのは良く分からなかったので、デキル部下について行って彼に競り落として貰いました。

でも結局のところ一本しか取れなかった。

まあそんなことはともかく、今はハンター試験が行われるザバンの市の某定食屋、つまりはステーキ定食を頼むと会場に連れて行って貰える所である。

元の世界には帰りたいけど、やっぱり日本人としてはこの世界に來たんだから原作組を覗いてみたいという二人の希望があったので今日は一緒に来ている。

ちなみに二人はもう会場内に入っていて、多分楽しくやっている筈。

ナビゲーターがついていなくても良いらしく、でも俺はせっかくだからということで、ここで焼肉定食を頼んでみた。

そうしたら普通に出てくる焼肉定食。

ちなみにカウンターで食べているので、ハンター試験を受ける奴が來るとしたら俺の後ろを通って別に部屋に案内されるはずだ。

「ご主人、中々の出来だな」

「ありがとございやす」

おっさんにしてみれば、俺もハンター試験を受けに来る奴だと思

つていたのに注文した者が焼肉定食と言われて焦っただろう。
まあ、焼肉定食が無いと言われたらあるものを作ってくれと頼む
だけだが。

それにしても、流石はハンター協会。

いい材料を使っている店を本試験の会場への入り口に選んだもの
だ。

この腕ならお抱えの料理人にしてやっても良い。

多分、肉はA4ランク。

どこの産地かはこの世界に来てから気にしないようになったが、
毒入りの食事を取っていたと言ってもゾルディック家の食事はそれ
なりのものしか出てこない。

その俺が上手いというのだから大した腕だ。

「次は……ハンバーグを」

「へ、へい……」

これから何時間も走るのだ。

スタミナを必要とするのだから食事はしっかりと取っておいた方
が良い。

それに何時に締め切るのかは知らないが、多分まだ百番にも至っ
ていないはず。

朝早くにこの店に到着したから。

そう言えば水を持ってくるのを忘れていた。

あ、できたらこの店で水とかも貰って行こう。

マラソンの途中で水分補給もしたいし。

まあ別に無くても六時間くらいは走り続けられるが、あつた方が
楽なことは楽だ。

「それから焼肉弁当を」

「あのー……うちは弁当はやってないんですが」

「大丈夫だ。そう言う時の事を考えて箱を持ってきてある。詰めてくれるだけで良い」

しっかりと、代金の分も考えて小切手を切ってきたのだ。

というか、考えてみたら今はまだ7時くらいなのに朝から焼肉だとかステーキだとかを食べている方がおかしい。

二次試験では豚の丸焼きが試験だったはず。

それが12時スタートで、二次試験まで三時間かかるとしたら、試験開始は9時。

あと二時間近くあるが、今は何人くらいが会場にいるのだろうか。というか、今までに一人も現れていないのはなんで……？

「主人、それからこれに水を入れてもらえると助かる」

つつかハンバーグもうめえ。

女の子の手料理も良かったけど、やっぱりたまに外食はするべきだ。

衣と住はどうでも良いけど、食だけは充実させたい。

「……あちゃーこの感じはヒソカか」

ってことは、俺は43番にでもなるのだろうか。

まあ世界の強制力が働いているかは知らないが、ヒソカが44番でなかったら改変されているし、44番だったら強制力が働いているのだろう。

その場合、念能力で異世界にわたる能力を作ること、世界を構成している要件に反するのだろうか……。

考えていたら頭が痛くなってきた。

やはり難しいことは俺には分らない。

「や」

「よ」

真似してみたけど、なんだかはずい。
止めよう。

「君もハンター試験を受けに？」

「そんな所」

そこで主人が俺に向かって目を見開いた。
ハンター試験を受けに来たのに何で何時までも違う物を注文しているのかとでも疑問に思ったか？

「一緒に行くかい？」

「そうだな。ハンバーグも食べ終わったし」

「ステーキ定食、弱火でじっくり」

「奥の部屋へどうぞー」

そう言えばこの店員さん、中々の美人さんだ。
今までキョウカとクリスが相手だったから俺も美意識とかおかし

くなっているのかもしれない。

それにしてもステーキも美味い。

肉質といい、焼き方といい、どれをとってもピカ一だ。

やっぱりハンター協会って儲かってるんだなあとしみじみ思おう。

「……君凄いな」

「何が？」

「さっきまで別のも食べていたじゃないか それなのにステーキも食べるのかい？」

「ま、朝食ってないから」

そうなのだ。

ステーキを食べると分かっていたから朝ご飯を食べていない。

というか、いらないでしょ、と言われてキョウカもクリスも作ってくれなかった。

あの二人の作る食事は美味しいのに。

特に、『我儘な調味料』は強くするだけでなく、味も一段と美味しいものにするから病みつきになる。

そう言えば、俺とヒソカの関係ってどうなるのだろうか。

一応戦いを挑まれて返り討ちにして、それで念の事を教えてあげたから師匠？

でも師匠ってがらでもないしなあ。

天空闘技場ではヒソカに頼んでキョウカとクリスの相手をして貰ったりもした。

まあ殺さないように頼んでからだけど。

女の子には興味が無いと願いたい。

……アレ？ そうしたら俺がやばい？

ま、まあ難しいことは(r y

「44番か ゾクゾクするね」

俺は43番。

どうやら世界はヒソカに44番を持たせることを選んだらしい。
というか、世界はヒソカに試験官ごっこをやらせることを願った
ようだ。

もう既に興奮している。

俺は喰われることはないと思うけど一応用心しておいた方が良い
のかもしれない。

43番ということは、既に中には42人いると言う事。
ということ……“凝”。

「目を凝らしているのかい？」

1,2……もう一人で三人。

勿論その内の二人はキョウカとクリス。

もう一人は誰か知らないけど、オーラの流れが酷いから、念だけ
目覚めさせて基本の四五行を怠っている人間だろう。

転生者にしても、そうでないとしても、別段意識する必要はない。

「ヒソカ、去年は何人だった？」

「去年かい？ そうだね…… 二人かな」

と、考えると豊作というか何と言うか。

44番までで既に念能力者が五人もいるのだから。

「とりあえずその殺気をどうにかしろ」

俺達三人には手を出さないようにあらかじめ釘をさしておいた方が良いでしょうか。

まあ逆効果になるかもしれないから下手な手は打たないが。

ヒソカ相手だと、勝てるか勝てないか微妙なラインだ。

まあやらないで逃げるけど。

「んじゃな。俺は行くから」

何時までもヒソカと同じ所にいるとばつちりを喰らいそうだ。

そんなことは避けたい所。

ただでさえ三時間近く走ると言う精神的に来るものをしなければならぬのに、ヒソカとバトル何て御免だ。

それにキルアと久しぶりに会えるのに、ヒソカが傍にいたんじゃ近づいて来ないかもしれない。

あ、でもその前にイルミの事も考えなくちゃいけないのか……メンドい。

まあ、どっちにしても頭を使うのは苦手だし、何よりも今回試験を受けるような奴の中でヒソカよりも強い奴はいないと踏んだ。

ならば、今から“絶”をして超ジジイの能力を使わなくても大丈夫だろう。

それにヌメーレ湿原だったっけか？

あそこを走ると言うのは流石に遠慮したい所だ。

足が汚れる。

それを防ぐためにはジジイの能力で空に行くのが一番いいだろう。
というか、そう言う作戦的なことを考えるのはキョウカの役割だ。
俺は頭が悪いし。

「あ、居た」

「……ミルキ」

二人は42、41番。

どうやら思っていたよりも早く来た訳ではないらしい。

「そのリュックは？」

「これ？ 飲み物と弁当」

小切手はちゃんとあげてきたから大丈夫。

個人資産はG Iのおかげで大分減ってしまっているが、まあそれでも十分に富豪のレベルだ。

いざとなったらハンターのライセンスカードを売っても良いし。

「あ、そうだ二人とも一次試験が始まるまではヒソカに近づかないように。今あいつ興奮してるから」

一人殺さないと普通に戻らないだろう。

今もトランプタワーを作っては壊して遊んでるし。

「それからキョウカはこれに腐らないやつお願い」

キョウカ的能力はこういう時に本当に便利だ。

これで何時でも食べられるようになった。

まあ俺がやつても良いんだけど、そうすると俺が食べても効果を発揮しないから、散文には俺がやったけど、残りはキョウカに任せ二人に渡した。

これで四次試験も何とか持ちこたえるだろう。

三次試験で同じ所を通るとは限らないし、何よりも俺は崖から飛び降りる予定だ。

「じゃ、寝るから試験が始まったら起こして」

「う……キョウカ、始ま……アレ？」

周りを見回す。

誰もいない。

“円”を使ってみる。

上に食堂の主人と店員の二人が居る。
後はいない。

「試験始まつてる？」

携帯は……っと。

キョウカ……は俺を放っておいた疑いがあるから止めておこう。
となると――

「あ、ヒソカ？ 今どこ？」

「今かい？ 丁度二次試験の会場 君は？」

やばい。

何がやばいつて二次試験が始まるのは確か12時から。

そして今は11時30分。

30分で目的地までたどり着かなくてはならない。

『龍頭戯画』

ジジイの能力を発動させてそれに飛び乗り、一番早い速度で飛ばす。

そして地下道を飛びながら思う。

何で起こしてくれなかったのかと。

途中まで行ってから、ショートカットもやむなしと判断して常時

“円”を展開する。

二分で引っかかり、そこに龍を突っ込ませて穴をあける。

空に出た所でもう一度ジジイの能力を発動させる。

それに飛び乗り、“凝”で周囲を見回す。

一番オーラが集中している所に向かって最高速度で龍を飛ばす。

ここまでで十分。

間に合うのだろうか。

果てしなく疑問だ。

「や 遅かったね」

「やっぱり凄い注目を浴びてるな」

空から飛び降りたらかなりの注目を浴びていた。

原作主人公組が居ない所を見ると、どうやら間に合ったらしい。というか、そんな事よりもキョウカを探さなければならぬ。

「おいキョウカ……何で起こさなかった」

見つけて、少しオーラを出しながら威嚇するように詰問する。

隣にいるクリスが若干目を細めてこちらを睨んでいるが気にしない。

「……起こすとは言っていない」

……そうだったけ？

あれ？

いや、確かにそんな感じもするが……。

「でもそこは起こすのが仲間ってものだろ」

「……仲間ではない。弟子と師匠。それにクリスも起こさなくていいって」

「クーリースー？」

「わ、わしは……ええい！ こうなったら証拠隠滅！ 死ねえ！！」

「うわっ、ちょっ！ それを振り回すな！！」

何で俺が逆切れされなきゃならない！？

というか何でその刀にオーラを纏わしている！？
それ喰らったら流石の俺でも切れて死ぬから！

「クリスちゃん 混ぜっても良いかい？」

「構わん！ むしろ殺れ！」

「クリスめえ！ あ！ っていうかヒソカはこっち来るな！ おい！！」

何でヒソカまで……。

つつかマジでやらないと本気で死ぬかも。

第五話 一次試験（後書き）

とりあえず一昨日と昨日、今日で本気でやってみたら十二話まで書き溜めすることができた。

そして、調子に乗ってたからまだリリカルに移行してない。むしろ、訳が分からなくなっている。

そこらへんで、あのキャラが暴走します。

正直性格が全く違う……

まあ、そんなことはともかく、一度に二話ずつ更新してもいいけど、誰か読む？

第六話 二次試験（前書き）

とりあえず今日はいつもの時間にあと一話更新する予定。

第六話 二次試験

「二次試験後半、あたしのメニューはスシよ！」

一瞬のどよめき。

知っていきそうな人間は……多分何人かいる。

俺とキヨウカ、クリス、ハンゾーは勿論の事、それ以外にも転生者が居るだろう。

彼らがどう動くのかは知らないが、少なくともこの試験で落ちることはまずないから心配しなくても大丈夫だろう。

というか、転生者は見た所十人ほど。

多すぎやしないだろうか。

その割に原作組はちゃんと番号が同じだし。

「君はスシが何か知っているのかい？」

そして何故かヒソカに話しかけられて、同じ試験を受けに来ている者からは危険視されている。

まあ俺も暗殺一家の出だから注意しておくことに問題はないのだろうが、それでも理由がヒソカと話しているからというのは中々に頂けない。

「知ってるが……というか兄貴の方は良いのか？」

「へえ 分かってたんだ」

いや、分かるでしょ。

だってあの念能力は俺も知ってるし。

まあ針をさす時に痛いからコピーはしたものの使ったことはない

けど。

「それよりも試験官ごっこでもしたのか？」

「うん 何人が活きのいいのが居たよ」

まあ十中八九ゴンの事だろう。

今も視線を送っているし。

というか、ハンゾーがばらしたおかげで皆が魚を取りに行っただけ、ヒソカは行かなくても良いのだろうか。

よくよく見てみたら兄貴とキョウカ、クリスも動いていないし。

「……何その手」

「スシ 知ってるんだろ？」

どうやら魚を取りに行つて調理するよりも俺からばくつた方が良
いと踏んだらしい。

「つつか何？ 兄貴も？」

こちらはこちらでカタカタしてばかりだが、とりあえず首を振
つたということは肯定の意味を指しているのだろう。

まあ一応は考えている。

それでも躊躇うのはここで俺が合格したとして、ゴンやキルアが
合格できないのではないかという心配。

まあクリスとキョウカはキョウカの能力さえあれば簡単に合格で
きるし、何よりも普通に作らせてもキョウカは合格できるだけの腕
前を持っている。

心配する必要はない。

それよりも、俺達以外の転生者がどうやるかというのが問題だが、まあこちらにも気にしなくていいだろう。

というか、頭で考えたって分からないんだから気にしたって仕方が無い。

「まあいいや。少し待ってて」

ここでヒソカに恩を売っておくのも悪くはない。

どちらにしても、ここで合格したとしてもクモワシの卵は鳥に行くことになるのだから。

ということで、俺の作れる寿司を作る。

この試験があると分かっていたから、この試験会場の近くの森に生息しているとか言われている熊の角についている苔を持ってきた。何でも一瓶で驚くほどの高値がつけくらしいが、まあ味は美味いと言っただけではない。

ただの珍味だ。

イクラとか、うにとかのスシと同じようにシャリを形作って、その上に持ってきている苔を乗せる。

これで一皿何十万ジェニーのスシが完成。

「はいこれ。兄貴の分も」

「何だい？ これ」

「知らね。何だか珍味らしいよ。まあ高いやつだから合格にはなるはず」

ということで俺が第一号として完成したスシを持って行く。

ハンゾーにつられてついて行った受験者たちは未だ帰ってきていない。

「あら、早いわね……ってこれは！ オオツノグマの角苔じゃないの！？」

「ああ、そんな名前だったかも」

確かにそんな名前だったような気がする。
まあ名前とか気にした事無いから知らないが。

「……もしかして取ってきたのかしら？」

「いや、持ってきた」

「そう……合格にしたい所だけど残念ね」

「な、何！？」

「どういことだい」

あ、ヒソカが殺気立ってる。

「私は握り寿司と言ったはずよ」

な、何！？

そんな事言ってたの？

「言ってたね」

「やり直し」

「じゃ、これは捨てるか」

「ちょ、あんた何してんのよ!」

「だってこれじゃ合格できないんだろ? ならいらないじゃん」

そう、合格できないならこれを提出する必要はない。

「っ……そ、そうね」

「じゃ、その二つはヒソカと兄貴、じゃなかった。ギタラクルにやるよ」

まあ、後はなるようになるだろう。

ということ、原作通りに試験官がお腹いっぱいになって全員不

合格になった。

転生者たちは何もしなかったらしい。
っていうか――

「ねえヒソカ、こいつ殺しても良いと思う?」

クモワシの卵を取りに行けばいいんだけど、何というか審査が理不尽すぎてむかむかしてきた。

「良いんじゃない」

とりあえず一発くらいは殴らないと気が済まない。
まあ何というか俺も随分と好戦的になったものだ。
これも旅団との戦闘を経験したからだろうか。

まあ、同レベルとは言わないけど、命がけの戦闘を経験したことは俺にとってもプラスには確実になっている。

ということだ“練”。

「クッ!」

俺のオーラに反応してか、メンチとブハラが警戒態勢を取る。
そして影で見守っていたであろうサトツも俺の前に立ちほかかる。
流石にハンター試験の試験官を受けているだけのことはある。
オーラの流れが綺麗だ。
だが……旅団やゾルディック家の比ではない。

「さて、試験官さん。おかしいよね? 勿論再試験だよな?」

「バカにするんじゃないわよ! あたしは天才美食ハンターなのよ

！ 妥協なんてする訳ないでしょ」

「兄さん、止める！！」

そこで何故かキルアが登場。

兄貴の針が刺さっているからか、かなりビクついているものの俺を止めようと頑張っている。

「や、キルア。久しぶり。でも止めるなよ？ 幾らキルアでも殺しかねない」

じゃっかん、オーラをキルアの方に威圧をかけて寄せる。

それだけでキルアは動きを止める。

そして兄貴とヒソカは傍観を決めたらしい。

もちろんキョウカとクリスも。

他の転生者たちも、同様だ。

まあ俺のオーラを見て止めようと思うやつはいないだろうし、何よりもこの中で俺と同等の戦いが出来るのはヒソカくらいだ。

「じゃ、そろそろ——！！」

足の裏からオーラを放出させてその場から三メートルほど後ろに下がる。

「そこまでっ！」

落ちてきたのはネテロ会長。

既に“纏”の状態。

オーラの流れは超ジジイに勝るとも劣らない。

このレベルの使い手を見るのは久しぶりだ。

確か……アーチャーとギルガメッシュの二人。

どこで戦闘狂に進化したのだろうか。

会長と戦ってみたいという欲望に支配されそうになる。

だが、ここで会長と戦ったらここら一体は墓場と化すだろう。

「これはこれは……ネテロ会長のお出ましですか」

「マハの所の若いのか……喧嘩っばいのお」

「血のせいだな……で、あんたが相手をしてくれるの？」

できるならここで『百式観音』もコピーしておきたい所。

あれはかなり強力な念能力だ。

発動までの時間が短いというのは先制攻撃にもカウンターにも強力な武器になる。

「ここで暴れるとハンター試験の受験資格を失うが良いかのぉ」

ふむ……キョウカとクリスに便乗して元の世界に戻るのも最近は悪く無いと思ってたからハンター試験の資格はいらないけど。

まあ何だか戦う気のないじいさんを見てたら戦う気が失せてきた。

「止めとくよ。その代わり後で俺と戦ってくれるか？」

「ふむ……試験に受かったら考えてやるかのぉ」

ラッキー。

これで会長の念能力もゲットできるだろう。

ふむ……訳が分からない。

三次試験は予定通りに、キョウカとクリスを連れて飛び降りたから二分で受かったけど、なんで未だ試験が続いてるんだろうか。

まあ、考えても分からんな。

とりあえず宝探しとか言う試験はどこぞの古代文字で書かれた石板を見つけて何とかクリアしたけど。

というか、宿泊費の1千万を払う代わりにお宝を持ってこいってことだったんだけど、こんな試験で1千万を払うのもばかしかつたから素直に宝探しに行った。

ちなみにどうやったのかは知らないけど、クリスとキョウカは同じ部屋だった。

そして俺はと言えばまあ“凝”でお宝を探していたから一番いい船室を手にすることが出来た。

まあ念を使える奴は皆“凝”を使ってやっていたから全員が一等船室だった。

ちなみに、ポンスとか言う女に部屋を取り替えて欲しいと言われたので取り替えたならヒソカと同じ部屋だった。

まあ美人の頼みごとを断る訳にはいかないし、何よりも別にヒソカと同じ部屋でも俺は息が詰まったりはしない。

それに美人とお近づきになったことはかなりの幸이었다。

キョウカとクリスは確かに美人だが、あれは男の事を男とってないからなあ。

「というか、飛行船が行ってしまった訳ですが、そのところどう思いますかヒソカさん」

「うーん…… 試験なんじゃないかい？」

あ、確かに。

その可能性もある。

一次試験はスタミナと精神力、二次試験はひらめき、想像力、三次試験では協調性を試された。

そしてもしも三次試験が終わっていないなら協調性を試す試験か。

俺の“円”に引つかからない所を見ると、どうやら試験官が“絶”をして見張っている訳ではないらしい。

とすると、飛行船が何かで上空から監視しているか、或いは念能力で俺やヒソカにすら感知されないのか、若しくは何か機械で監視しているのか。

まあ、生き残れば何とでもなるだろう。

「とりあえず何かやろうぜ？ ヒソカ、トランプ」

こういう時にヒソカがトランプを持ってきてくれているのは助かる。

それにヒソカと兄貴、キョウカとクリスが居るから大貧民くらいは出来る。

五人というのは中々に良い数字だ。

ナポレオンとか、トランプでやるカードゲームは五人がちょうどいい数字のことが多い。

まあハーツみたいに四人の奴とかもあるけど。

夜になった。

トランプにも飽きて俺とヒソカがトランプパワーを作ってたら海の様子が変わり始めた。

転生者が全員こちらに残っているから、どうやらこの船の残るのが試験としては正解だったらしい。

そして風が吹いてトランプパワーどころの話ではなくなる。

「……この嵐を乗り切るのが試験？」

「そうじゃろっな。出なければここに連れてきた意味がないじゃろっ」

キョウカとクリスは冷静に状況を判断している。

どうやら二人は転生者何人かに声をかけられてチームを組まないか誘われたらしい。

まあ二人のオーラの流れから相当の実力者だと判断して、誘ったのだろう。

ちなみに俺は二次試験の時に試験官を脅したから危険人物として見なされているようだ。

だからなのか、接触はなかった。

「あ……」

「……」

原作で四次試験の時にゴンの事を狙っていた奴が乗ったボートが流されていき、ゴンがそれを助けに飛び込んだ。

この状況で飛びこむことは自殺行為にも等しいが、何でか知らないけど俺達以外の転生者は助けようともしていない。

それどころか安心して見るようにすら見える。

アニメ、だろうか。

漫画の方しか呼んでいないからアニメの方にこういう流れがあったのかもしれない。

まあどちらにしてもこの世界でゴンとキルアが死ぬことはまずないから安心して見ていられる。

「……青春」

「じゃな」

助けに向かったキルア達を助ける為に、俺達を除いた是認がロー

プを引っ張っていた。

「……そう言えばこの船の天井に貝がくつついてた」

「なら、次の嵐がその位の高さまで来るのじゃろ……ってキョウカ！ それは不味いじゃろ！」

「……大丈夫。ミルキの能力で空を飛べばいい」

いや、確かに俺の能力で雲の上まで上がれば嵐の心配もないけど。

「でもこの試験は協調性を試す試験じゃないの？」

兄貴、それは無理だつて。

「ま、俺達は寝てても大丈夫だろ」

「そうだね 能力者も何人かいるみたいだし」

「何よりも俺達が手伝わない事が協調性の証だ」

うん、俺達が下手に手伝うよりもクラピカとハンゾー当たりに任せて、そのフォローを転生者たちに任せればいいだろう。

「……それは協調性が無いんじゃないかい」

「まあそつとも言える」

「そつとしか言えないよ」

ま、何にしてもここでゴン達が試験に落ちることはあり得ないし、嵐が来ていると分かった以上、試験官が観察しているということでもない。

第六話 二次試験（後書き）

色々感想で叩かれまくっているのだからこらへんで主人公についての説明を。

まず、主人公の最初の心情はとにかく生き残ること。

そして、念を覚えた際に中二病の才覚を見せ、オーラが半端ないことに気が付いてからは写輪眼でもってひたすらコピーし、強くなるうと。

本質としてはどうなのかは決めてないけど、今のところゾルディック家の教育によってバトルマニアみたいに。

ちなみに今のところ元の世界に戻ろうとは本気では思っていない。

そして、一応バカのつもりで書いているつもり。

でも、あまりにバカだと話が進まないから適度ということ。

目的意識はありませんが、一応「死にたくない」というのが根底にあり、その上で戦闘者という矛盾している人物。

そして最後に。

この小説は思い付きでやっているの——ここ重要——、話の進行によってところどころで矛盾が多々見られることがあります。百合はいらないとか、目的意識がないとか感想に書かれています、そのところを理解してやってください。

もともとずかメインの暇つぶしでやっているだけなので。

ということ、ころころ話が変わると思います。

作者の自己満足ですので、それが嫌な人は引き返してください。

最後にこういうことを書いて申し訳ない。

第七話 四次試験（前書き）

主人公は名前を覚えるのが苦手です。

第七話 四次試験

夕方になって、俺達を除いた殆どが作業に勤しんでいる中、気になる事が一つ。

「レオリオが沈んでるんだけど……」

砲弾を上げようとしていた所で、どうやら岩場が崩れて下敷きになっただけらしい。

そして潜水服はレオリオがきていたもの一つしかないのだろう。誰も助けに向かおうとは――

「お」

「ヒソカのお気に入りが飛び込んだね」

ゴンがレオリオを助けに飛び込んで、その直後にクラピカの指示が放送で流れる。

「というか兄貴、そろそろギタラクルに戻らなくて良いの？」

「そうだねそろそろ戻るか」

といいながら兄貴が自分の顔に針を刺して顔を変形させていく。いつみてもグロい。

そして痛そうだ。

転生者たちは安心しているけど……あれ？
どうやらそうでもないらしい。

何だかこちら——というよりはヒソカの事をちらちらと見ては心配そうにしている。

「うーん。さつきから彼らウザいね」

「ま、そんなに殺気立つなって」

「君がそう言うなら」

うーん……ヒソカの事を見ているということは、もしかしたらアニメではヒソカがゴンの事を救うのかな？

多分そうでもなければわざわざヒソカの関心を買うようなことはしないだろう。

「お、ゴンが上がって来る」

って上がってくる前に撃つのかよ。

ならゴンにわざわざバンジーガムを付ける必要もなかったか……って今の衝撃でゴンがまた沈んだ。

「ヒソカ、お気に入りか沈んだけど助けようか？」

「お願いするよ」

「ま、お前の能力なんだけだな」

って、クラピカも倒れてるじゃん。

今の衝撃で頭でも打ったか？

「兄貴は舵をお願い」

カタカタカタと兄貴が首を縦に振って降りて行く。

俺もその後について行って甲板まで降りて行ってからバンジーガムを縮めて、ゴンを船の一室においておく。

途中で、転生者と思わしき方々に睨まれたが、よく考えたら俺がヒソカと兄貴と一緒にいるから接触してこないだろう。

と思つたら話しかけられたけど、ゴンを彼らに投げてから無視して元の場所に戻った。

そして四次試験。

俺の引いた番号はまさかの41番。

とりあえず船で四次試験の会場に向かいながらどうしてこんなにも運が無いのかと考える。

残っていたのは40人近く。

その中でキョウカとクリス、兄貴のプレートを引いてしまう確率は何分の一だと言うのか。

まあ数学は苦手だから具体的な数値は分からないけど。

ヒソカはこの試験でゴンをプレートを取られて……あ、細かいところまでは覚えてないや。

ま、試験が始まって俺が一番最初に島に入る訳だし、とりあえず考えるのはキョウカとクリスと会ってからで良い。

「ということでクリス、どうすればいいと思う？」

島に入ってから“円”をしていて、二番手のクリスが入って来たからこっちに來てもらった。

「あー……わしのターゲットお主なんじゃが」

マジで？

というかそんな事確率的にあり得るの？

まさに天文学的確率なんじゃないの？

俺のターゲットがキョウカで、クリスのターゲットが俺とか。

「ちなみにキョウカのターゲットは？」

「……何とか三兄弟」

いつの間にか近づいてきていたキョウカに問う。

ま、三つ巴ってことにはならなかったけど。

「二人ともハンターになりたい？」

「……正直どうでも良い」

「わしはキョウカに従うぞい」

まあ、当初の予定である少し原作を除くって言う目標は達成したしなあ。

「じゃ、先に戻ってG Iでもやる?」

「……うん。そろそろ元の世界が恋しくなってきた」

「じゃな。わしもじゃ」

「……プレート」

ということで、二人からプレートを貰ってジジイの能力を使う。

『龍頭戯画』

「じゃ、行つてらっしゃい」

二人を龍に乗せて送る。

とりあえず個人資産で家を買っているし、そこにG Iも置いてあるから大丈夫だ。

今の二人は中堅クラスのハンターくらいには強いから、爆弾魔に引かかる事もないし、それなりにカードを集める事も出来るだろう。

もしかしたらゴン達が入る前にクリアしてしまうかもしれない。

まあ、そうしたらそうしたでゴン達がクリアした後にもう一度クリアすればいい。

というか、G Iの島まで船で行って、カードを手に入れば良い。

うーん……やっぱり思考が戦闘者みたいになってきてる。

ま、別に理性は効いてるし自分で変だって分かってる間は大丈夫だと思うけど。

「うーん……寝る場所を探しに來ただけなんだけど」

洞窟を見つけたから中がどうなっているのか“円”で探ってみたら、何と人間が一人に死体が一つ。

ここまで来るのに三日かけてじっくりと來たが、どうやらその間にキルアが接触してくることはなかった。

中は結構広くてしかも深い。

そして今は夜に近い夕方ということで、暗い。

まあ念を習得してるものなら多少は“凝”で緩和されるから問題ないし、俺の場合は鍛え上げられた五感で完璧に周囲の状態が分かる。

“円”を使うまでもない。

「誰？」

とりあえず中まで進んだら、生きている方が俺に気付いて声をかけてきた。

「4……3番のミルキ」

43という数字がとつさに出てこなかった。

まあ自分の番号とかに執着していなかったし、俺を狙うはずの狩人も俺のターゲットも分かっていたから仕方のないことか。

そしてポンズとは面識もあつたからなのか、まあ俺が試験官を殺そうとした時にも居たのだが……あ、でもあれは二次試験の事か。まあ、どちらにしてもそれほどまでにこわがられている訳ではないらしい。

今がどういふ状況なのかを説明された。

忘れていたが、どうやらここは蛇使いバーボンの罠だとか何だとか。

多分、後数日もしたらレオリオがやってきて蛇に刺されるのだろう。

「貴方も不運ね。ここから出ることは出来ないわ」

ま、出る方法が無い訳ではない。

“発”を使って天井に穴をあけるか、或いは蛇を全て始末するか。どちらにしてもここはバーボンのおかげで安全地帯となっている。安心して眠る事も出来るだろう。

「あ、そうだ。弁当食べる？」

「……貴方呑気ね」

と言いながらも俺から弁当を受け取ってパクパクと食べている。
うーん……やっぱり美人だ。

これがポックリ？　だかポックルだかの手に渡る事を考えると惜しい。

ま、四次試験の間にお近づきになるとしよう。

それに試験は後えつと……三日？

まあ細かいことは別にして、原作通りならレオリオがここに来た時に帰れば試験には間に合うはず。

「クラピカ！　ゴン！　来るな！」

とりあえずポンズと結構仲良くなった所で、何日か経過したらしく、レオリオが漸く洞窟内に入ってきた。

ま、最初は俺を見た時に目を見開いてギョツとしていたが、俺が寝ているとも思ったのか、ポンズの説明を聞いてから外にいます。あろうゴンとクラピカに声をかけていた。

ちなみにこの段階で俺は目を瞑って横になっていたりする。

そして俺がポンスに弁当を上げる代償として膝枕付きだ。
やーらかいです、うん。

「レオリオ！」

「レオリオ無事か！？」

「バカ、野郎……何で入ってきやがった……」

と、そこで二人は俺に気付いて注意を払いながらもレオリオに応急処置を施すべく二人して背負って入口に向かうが、それをポンスが制して止まる。

そしてそのままポンスが二人にバーボンの罠について説明する。

とりあえずこれだけは言っておこう。

ポンスの膝枕、最高です。

と、そんなことはどうでも良く無いがまあゴンとクラピカは思いついたようにバーボンの方を見る。

そしてまたポンスが自分がバーボンを殺した方法について説明した。

その後に思い出すのも困難になってきた、薄れてきた原作の記憶通りなら、ゴンが蛇にかまれながらも解毒薬を取り出して、レオリオとゴンはそれを打って助かる。

俺の予想だと念を習得している転生者がゴン達の補助をする為にこの洞窟に入ってきて来ると思っていたのだが、どうやら誰も接触していないのか、或いは外で待っているのか。

まあいずれにしても原作通りに進むと考えると手出し無用だと思ったのだろう。

というか、さっきからうるさいです。

「あつたら当然やってるわよ！　あたしが一体何日居ると思ってるの！？」

ポンスさん、叫ばないでください。

膝枕が揺れるのはあまり喜ばしく無いです。

そんでもってそのせいで蜂が出てきたらゴンとクラピカを助ける為に俺が動かないといけないじゃないですか。

「ねえ、ミルキさん……解毒薬持ってないの？」

そこでゴンが俺が狸寝入りをしていることに気がついたらしく、俺に話しかけてきた。

俺は上に向けていた顔をゴン達の方に向けて側頭部をポンスの太股に乗せる。

「持っていないよ。俺が持つてるのはプレートに後は水、食料」

そしてこのハンター試験の間は出していない癒しの権化、ぬこ。

「じゃあ……クラピカ、レオリオを頼むよ」

そう言いながらゴンがバーボンに近づいて行く。

そして蛇にかまれながらも必死にバーボンの中から解毒薬を探している。

同時にプレートも見つけたらしく、それを取って解毒薬をクラピカに投げてから倒れた。

というか、無茶するなあ。

見てるだけで痛い。

「アガッ！！」

ポンズがゴンを助けるべく急に立ち上がってゴンをクラピカの元まで運んで解毒薬を打つ。

というか、ポンズさん、急に立ち上がらないでほしいです。

動くのは分かったけどあまりの気持ちよさにそのまま居たから後頭部を打ちました。

「どうだ？」

「ああ、大丈夫だ。未だ少しピリピリするけどな」

クラピカが聞いて、レオリオが答える。

そしてポンズがゴンを開放していて、俺は放置プレイの真っ最中。

ゴンに感謝されて顔を紅くしているポンズ、かわゆす。

まさかこれがツンデレ？

まあ、それは放っておいて、どうやら話はクライマックスに向かっているようです。

「ポンズさん、催眠ガスって残ってる？」

どうやらこれからゴンの超人タイムが発動するらしい。

ガスが完全に効果を発揮するまでに約5分。

そして野性児ゴンは健康体なら約10分息を止めて居られるらしい。

そして問題は一つだけ。

お人よしゴンは息を長く止められるものの、四人を背負って出ることとは出来ないかもしれない。

まあ、ここら辺で助けてやっても良いだろう。

「俺は出られるから気にするな。それからポンズは俺が背負ってやる」

ま、背負うのではなくお姫様抱っこですが。

クラピカとレオリオは俺が息を止めていられるか心配だったらしいが、途中でゴンが俺がキルアの兄であることを思い出させたらその心配が無くなった。

俺がそこまで能力の低い人間だと思われていることに多少ショック。

というか、睡眠ガスくらいだったら俺は息を止めるまでもなく吸ったとしても眠らないんです。

これでも暗殺一家、ゾルディック家の者なので。

そしてミツシヨンスター。
以外にゴンも頑張る。

そして洞窟の外にやっこのこと出てから、ポンズを下ろす。

「ミルクさん凄いな。オレ、自分と同じくらい息を止められる人を初めて見たよ」

「まあな。これでも暗殺一家の出だから」

というか、息は止めておけるけど面倒だったので普通に呼吸しました。

俺としては野性児として生活しててそれほどの身体能力を手にするこのできたゴンの方がびっくり。

「所で、その……」

「ああ、ポンズのプレート？ やるよ」

「良いの？」

俺とポンズの顔を交互に見ながらゴンが俺に聞く。

「別に仲間とかじゃないし、俺はあそこで休憩してただけだから」

それに、ここ近辺に何人かいる。

そいつらからプレートを適当に奪えば良いだろう。

「ってことで俺はまた寝るから、御休みー」

寝ると言っても、俺に近づく気配があればすぐに起きれるし、ポ

ンズが起きたら最終試験に連れて行ってやろう。
美人は正義。

これはどこの世界でも一緒だ。

と、寝ているふりをしていたら早くもクラピカとレオリオが起きてポンスのプレートを手に行っている事を確認してから集合地点に向かって動いた。

そしてそのちょっと後でポンスも起きて俺をゆすつてくれる。
可愛いです。

キョウカやクリスと違って俺を無視したりしないできちんと起こしてくれる。

やはり女の子はこうでなくては。

「おはよう」

「おはよう、じゃないわよ！ 私のプレート知らない!？」

「レオリオが持って行った」

がーん、という文字がポンスの背後に見える。

何度も言うように、可愛いです。

というか、今ここに何だっけ……新人潰しのポンタ？ とか何とか云うのが近づいてきている。

まあ、そいつがプレートを持っている筈、と思いたい。

「どうして止めてくれなかったのよ!？」

「まあ慌てるな。……来た。どうも、新人潰しの……ポンタさん」

「トンパだ！ ってお前は……」

俺に見つかってこの世の最後とばかりに不幸な表情をしている。
まあ、仕方ない。

「ということでプレートをおいて行けば命だけは残してやる」

多少のオーラを出してポンタ——じゃなかったトンパにぶつける。
そしてそれを受けた新人潰しは尻もちをついてからプレートをおいて足早に逃げて行った。

「ということで、四次試験通過おめでとう」

「何だよ。これじゃ足りないじゃない」

「バーボンのプレート、さっきのプレート、これで4点。そして、俺が持っている関係のないプレートが二枚」

ちなみにこの一つはどこぞの転生者の者。

ついさっきまでそこで俺の事を監視していたからプレートにバンジーガムを付けて、“隠”を使ったまま引っ張ったら気付かれない内に取れた。

どこぞの転生者、四次試験失敗ドンマイ。

第七話 四次試験（後書き）

ハンターハンターの世界、書き終わりました。

ということで、明日にすべて投稿してしまっただけからリリカルに移りたいと思っています。

なんだかポンスさんがヒロインしてますが、ヒロインはアリサです。リリカルを待っていた人、お待たせしました。

転生者が意味ないとか、もうちょっと内容を濃くして欲しいとか言われましたが、すいませんとしか言えません。

内容を濃くするのはリリカルからです。

この世界をプロローグにすれば良かったのでは、ということも言われましたがその通りで。

まあ、書いている途中でプロローグになってしまうのもどうかと思ってしまったので。

叩かれるのも明日で終わりにしたいところ。

第八話 すなわち！ ペーパーテストッ！！（前書き）

さあ、ここから怒涛の更新ラッシュ行きますよ？

気合いの貯蔵は十分か？

第八話 すなわち！ ペーパーテストッ！！

ネテロ会長がきて、最終試験の受験者が集まった。

どうやら数の多かった転生者は何人かがやられたのか、三人しかない。

最終試験は三日後らしい。

そこまでこの船で向かうのだろう。

受験者は全部で13人。

ちなみに受験者は一つの部屋に集まって今はポドロとか言っおっさんが語っている。

「すなわち！ ペーパーテストッ！！！！」

全員がこの世の終わりみたいな表情になって、ヒソカのトランプタワーは崩れた。

ちなみに今も膝枕状態の俺は、ポンズを見上げている訳だが、不安げな表情のポンズ、かわゆす。

ついでにクラピカがおっさんの意見に同調し始めた。

そしてハゲがこの船には図書室があるなど言いだして、兄貴、ヒソカ、おっさん、ポンズを除いたメンバーが勉強しに走りに行った。

ちなみにポンズも立ち上がって勉強しに行こうとしたが、俺が頭で太股を押し付けて動かさなかった。

「……………など何の根拠もなく適当なことを言ってしまったが……………まあ良し！」

しかもおっさんは勝手に納得している。

「勝手なこと言わないでよ！ 焦ったじゃないの」

「なーんだ」

「カタカタカタ」

表情は全く分からないが、兄貴も安心していているようだ。

ま、最終試験は分かっているから全くもって心配する要素はない。

「とか言ってて本当に筆記試験だったりしてな」

「じよ、冗談よね……？」

不安そうに上から覗き込んでいるポンス、とてもかわゆす。

そして、ヒソカが不安そうにしている表情はめったに見られるものではないが、正直キモイだけです。

「でも三日の猶予があってホテルを予約してるんだぞ？」

「え……」

そしてヒソカが本気で心配し始めた。

それを見ないように気を付けてから不安そうにしているポンスを眺める。

とてもかわいいです、はい。

「入るが良い」

ネテロ会長に促されて応接室に入って座る。

「まず、何故ハンターになりたいと思ったのじゃ？」

ちなみに俺が最初に呼び出された。

最初はヒソカとかだと思ってたけど、もしかしたら三次試験の順番をそのままに使っているのかもしれない。

そして、よく考えてみたらハンターになりたい理由とかない。

別にゴンとキルアが受けるからそれを見に来ようと思っただけだし、元の世界に帰ろうかと考えている身としては別段ハンターになれなくても構わない。

あ、理由あった。

「二次試験の時に爺さんが戦ってくれて言うから」

「それは二次試験からじゃろ。ハンター試験を受けに来た理由は？」

「特になし。ただの暇つぶし」

「なるほどなるほど。ではこの中で一番注目しているのは？」

提示された写真を見て、考えるでもなく答える。

「キルア」

「なるほど、家族じゃからかの？」

「まあね」

ゴンもそうだが、やはりキルアは天才の中の天才だ。

あの年にしてあの身体能力。

それを突き詰める所までつきつめて、念能力を手にしたらどんな進化を遂げるのか。

自分の目で見て確かめたいという気持ちが無い訳でもない。

「では一番戦いたくないのは？」

それに対しては回答を用意してから来たので大丈夫。

「ポンズ。女の子をいじめるのは良く無いと思います」

「……う、うむ、よろしい。もう戻って良いぞ」

ふむ。

暗殺者らしからぬとも思っているのだろうか。

まあ、最初に会った時は完全に火がついていた状態だったし、しようがないかもしれない。

ほほー。

こいつはまさかの結果だ。

三日経ってホテルに入り、広間に案内されてから布がかけられたホワイトボードがあり、爺さんがそれをめくってからトーナメントが現れた。

俺はまさかの一番右のブロック。

ちなみにブロックは全部で三つ。

原作通りのブロックが二つに、一番右の俺が居るブロック。

そこには俺、ポンズ、そして転生者の三人組。

爺さんの頭の中は理解できないが、どうして念能力者四人の中に一般人のポンズを放り込んだのか。

まあ、原作通りに進むならキルアが誰だったかを殺して一人だけ不合格になるだろう。

というか、組み合わせからして考えるに俺のブロックはポンスが一番ハンターとしての素質があり、俺が最もハンターに向いていないと言う事。

「誰にでも——43番を除いて二回チャンスがある」

あそこで俺を特別視しているのは二次試験で暴れようとしたからだろうか。

まあ審査基準でいえば俺は最も高いはずだし、何よりもヒソカほど以上ではない上に三次試験は一位通過している。

あ、そう言えばポンスと戦いたくないって俺が言ったから一番下のブロックになったのかな？ ああ、後はポドロとか言う武道家も女子供とは戦いたくないとか言っ鷹もしれない。

ま、とりあえず俺が戦うことはないかもしれない。

「それでは第一試合——」

始まった。

とりあえず、ポンスはトーナメントを何回も見返しているが彼女にとつては最悪のトーナメントだろう。

戦う相手全てが念能力者なのだから。

「す、凄い……」

ああ、ヒソカとクラピカの戦闘ね。

まあ、ポンスにしてみればクラピカは十分に凄いのレベルに入るのだろう。

っていつかあいつセコい。

トランプに“周”を使っているからトランプでも剣を破壊するこ
とは出来る。

使って良いのかよ、と思ってジジイの方を見てみたらウインクさ
れた。

正直キシヨいです。

そしてこの少年漫画的な流れ。

正直飽きてきました。

そしてヒソカ遊びすぎ。

「興奮してきちゃったよ……」

あーあ。

やばいって……ヒソカが暴走しそう。

ま、原作通りに試合が進むのならヒソカが降参するから大丈夫だ
ろう。

それに転生者さん達が何とかしてくれるはず。

ずっと俺の方に注意しててウザいけど。

あ……もしかして俺が転生じゃなくて憑依だと思ってるのか？

名前もミルキだし、キルアも問題なく兄として呼んでたし。

それなら納得だ。

オーラもやばいし、あ、終わった。

「第二試合——」

そんでもって始まった。

これは長くなるよなー。

寝てよう。

「ポンス、膝枕してくんない？」

「あんだね……試合見てなさいよ」

「いや、この試合長いから」

「はあ？」

ま、そこで文句垂れながらも契約通りに膝枕をしてくれるポンス。とてもかわゆす。

ちなみに契約とは俺が洞窟内でのポンスの命を保証する代わりにいいなりに近い状態になる事。

命を保証といっても、別に脅した訳ではない。

突然のアクシデントに対しても対処する事と、食料を上げる事。

「うつ……」

いやー、酷いわ。

かれこれ三時間ほど拷問みたいにボコボコにされてる。

まあゾルディック家の拷問の比ではないけど。

あそこでは普通に一枚ずつ爪をはがされたり、電気を流されたり、まあ掛けないような事もしてたから。

「ハンターになりたいんなら目、逸らすなよ。こんなのざらだから」

「わ、分かってるわよ……」

そう言いながらも片方の目を閉じている。

そしてハンゾーが仕込みの剣をゴンの額につきつけている。

つと……。

「キルア、手をひっこめろ。お前が動く前に俺がお前を止める」

ポンズの膝枕から一瞬にしてヒソカの背後に移動して忠告しておく。

一応兄としてこういう風に動いておかないと兄貴の怒りを買うから、そして兄としての威厳をキルアにも見せておかなければならない。

何せミルキは原作ではキルアに半殺しにされた人物。

小さい頃に懷かれていたとしても今は時間が経っている。

「……」

それにしても、キルアが無意識にでもハンゾーに対して殺気を放っていたということは、やはりゴンの事を友達として無意識に認識しているのだろう。

というか、キルアを止めるのはゴンの為でもある。

一応この流れは覚えているが、まあキルアが動かないと言う理由にはならない。

キルアの友達というのは初めてだし、肉親だからその重要さも結構分かる。

まあ、暗殺一家の当主としてどうかはおいておくが。

あ、終わった。

ま、流れに流れてポonzと転生者との戦いは最初に俺がオーラで転生者その1を威嚇してただけど、爺さんに注意されて止めた。

ま、その後はオーラを使って転生者が文句を言わせる間もなくポonzに参ったを促してポonzがこれを飲む。

その後は原作通りに進んで、キルアが兄貴によってめちやくちやにされた後に、ポドロとかを殺して失格になった。

というか兄貴の無表情って怖いわ。

キルアにも針が刺してあるから可哀そう。

まあ、ここでオリ主ならキルアの友達だと言って針を抜いてやるんだろうが、生憎と俺はミルキだ。

そして兄貴と親父に喧嘩を売るほどのバカではない。

と、思ってたんだけど、やっぱり無理だった。

「兄貴、それ以上キルアの事苛めるんだったら俺も黙ってないよ」

爺さんには止められたけどオーラを展開する。

「ミルキ、父さんに言い付けるよ?」

「まあ俺も黙ってるつもりだったんだけど……キルア可哀そうだから。それに親父とジジイ、兄貴の三人だったら何とかできるよ」

死ぬ気でやれば何とか三人だったなら撃退できる……はず。

「うーん…… ボクもミルキの側に付こうかな」

「これは困った……ミルキとヒソカが邪魔するとなると家族全員で
ゴンを殺しに行かなくちゃ「参った!!」「キル?」

「ま、参った……俺の負けだよ」

と、以上の経緯を経て原作通りになった。
流石に世界の流れは止められなかったらしい。

そしてハンターになってからの講習会を受けている訳だが、ゴン
が登場して兄貴に喧嘩を吹っ掛けていた。
そして主人公かつこいいです。

「全て推測の域を出ておらんのお」

念という言葉は今使つてはいけならしい。

無駄にピンポイントな威圧感が爺さんから向けられている。

というかこういうどろどろが嫌で家を抜け出したのに、ハンター試験でこんなことになるとは。

とりあえず、眠いから寝る。

「お前を許さない!!」

とりあえずゴン君、うるさいです。

そしてそのお前達というのには俺も入っているのでしょうか？

俺としてはそこを聞きたい。

「兄貴、使つなよ」

とりあえず忠告。

爺さんが終わりを宣言してから、この後はゴンが兄貴に突っかかるはず。

と思つてたら、爺さんに残された。

そう言えば裏ハンター試験を受けなければならないんだっけか。

「ということで四五行をして貰えるかのぉ」

「はいはい」

手っ取り早く終わらせる。

そう言えばこの後爺さんとバトルの約束してたんだっけ。

「裏ハンター試験、合格おめでとう」

「それより爺さん、戦ってくれるんだろ？」

早くに『百式観音』をコピーしたい。

「あー、あれの……なしに出来ん？」

「てめえ……ふざけんや？ これ以上がたがた抜かしてるとゾルディック家に依頼してハンター協会を……無理か」

割に合わない仕事はしない主義だし。

何よりも親父からジジイまで、俺に依頼はしても俺の依頼は受けてくれないだろう。

「じゃあ、爺さんの能力をコピーさせてください」

「……急に低頭になったのお」

いや、世界最強の念能力者の能力は是非とも欲しいですから。まあ強者との戦闘はゾルディック家で我慢する。

「でも、コピーもさせてくれないならアーチャーとギルガメッシュからコピーした能力でハンター協会を襲う」

「お主あの二人の能力をコピーしたのか」

「快くコピーさせてくれました。ということで爺さんも」

「仕方ないのお」

え、良いの？

ラッキー！

第八話 すなわち！ ペーパーテストッ！！（後書き）

ポンズさんがヒロインしている件。

ちなみに気づいた人はいないと思うけど、今回の本文はぴったり444文字。

最後にそうなるように調整しました。

……結構つかれた。

第九話 お家にご招待（前書き）

やっぱり修行と言ったらゾルディック家

第九話 お家にご招待

オッス！

地球の皆、聞いてくれ。

オラ、友達が出来たかもしんねえ。

何とオラの事を待っててくれたんだ！

と、どこぞの宇宙人の真似はここまでにしておいて、ネテロから半ば脅すような――脅しにもならないが――形で念能力をコピーしてから、部屋から出てみて暫くぶらついていたらそこでハンター試験を制した新人ハンターのみなさんが俺を待っていてくれました。

ま、禿げとかポツクリ……？　だとかは挨拶をするだけに。

俺に怖がらずに近づく事が出来たのはゴン、ポンスの二名だけ。

レオリオとクラピカには相変わらず危険人物としてマークされているみたいです。

ちなみに転生者組は何を思ったのか、ゴン達に近づくなど意味もわからない脅迫メールを俺にくれました。

ま、俺はゴン達に近づくのではなく、自分の家に戻るだけだから彼らの言うことを無視してはいないはず。

そして携帯に新たにポンスの番号が入りました！！

女の子では三人目で、一般人は第一号です！！

だって俺の携帯に入ってる番号ってゾルディック家の面々に、ヒソカ、キョウカ、クリスの三人だけだし。

個人資産を増やす為の個人会社は今任せて切りだし、何よりも立ち上げる時点で執事を連れて行ったからゾルディック家の関係者

「ねえ！　ミルキさん！　キルアの所に辿り着けないってどういう

事！？」

ただいま絶賛ゴン君に詰問されています。

どうやら兄貴にそう言う類の事を言われたらしい。

ま、辿り着けないと言うよりは門前払いだろう。

試しの門を開けなきゃな。

「力が足りないと言う事だ。ま、ククルーマウンテンにゾルディツクの家がある。行ってみてると良いだろう」

あ、試しの門から入る事も言わないと……ってもういいえ。

流石野性児。

「で、ポonzはどうするの？」

「あ、あんたねえ……用があるから待ってろって言ったのはあんたでしょ！？」

そんな事言っただけ？

まあ、四次試験の時に言ったかもしれないが寝ぼけてるかもしれない。

「ま、良いや。そこでポonzはどんなハンターになりたいの？」

「幻獣ハンターよ！ 私は世界を旅しながら色々な生き物を見つけるの」

ああ、そう言えば原作ではポツクリ……あいや、ポツクルだったかについて行ってキメラアントに殺されてたか。

念能力は……何だっけ？

ポツクルは弓だったはずだけど……ポンスって念能力の紹介の前に死ぬんだっけ？

まあ、俺は女の子特に美人には優しいからキメラアントの強い奴ら以外だったら生き残れるだけの力は付けてやろう。

「おっけ。じゃあ力付けに行こうか。今のままじゃ弱すぎるから」

「ちょっと、弱すぎるってどういうことよ!」

うーん……怒っているポンスも可愛い。

「動ける?」

「ッ……」

ま、念を習得してなければ念に対しては無防備も良い所だ。そして怖がっている彼女も（ry

「ということで、今の俺の前から動けるようにならないと危険区域に言った所で死ぬよ?」

コクコクと頷く。

まあ、念の前に必要な力を鍛えるならやはりここは原作組に便乗してゾルディック家に行くのが良いだろう。

「ということで今からパドキア共和国に行きます」

「ッハア……パドキアってまさか!?!」

うーん……立ち直りが早い。

流石に蜂を使っているだけあって、そしてハンター試験を突破しただけのことはある。

ま、才能は多分キラアとゴンには及ばないだろうが、それなりにはあるだろう。

「おう。ゾルディック家」

「ムリムリ！ 未だ死にたくないわよ！」

いや、俺が本家の人間なんだから死ぬわけ無いでしょうに。

やっぱりゾルディック家の人間って外部からは異端の目で見られてるんだろうな。

「大丈夫。ということで飛行船を」

「ハンターライセンスで取るの？」

いやいや、ほんとに立ち直りが早いことで。

あ、俺がゾルディック家の人間であることを思い出したのか？

「まあせっかくだし、そうするか」

飛行船で三日、ハンターライセンスで一番良い席をとりました。
試験の時とは大違い。

ちなみに料理は中々に美味しかった事を此处に報告しておく。

「へえ。ハンターってやっぱり凄いのな」

「あなた知らなかったの？」

ま、適当に受けに来る事を決めただけだし。
というか本当にすごい。

二部屋しかない特等の部屋を優先的にハンターの為にとっている
とは。

今まで修行の毎日とハンター試験だったからこういう優雅な奴は
久しぶりだ。

「あ、見えた」

「あれが……ククルーマウンテン……」

いやー、ここからだ結構大きく見えるのね。

というか、家に帰るのも何年振りか……ああ、親父の仕事を手伝
った時以来か。

つてことは二年ぶり？

いやー、ホントに久々だわ。

「あ、時間あるからこれからの予定の説明」

「ええ」

「まずはゾルディック家の敷地で筋トレ、それなりに力が付いたら天空闘技場、そこで……この力を身につけてもらう」

一瞬だけオーラを出す。

そう言えば俺って裏ハンター試験の試験官にはなれるのだろうか？
まあ、心源流じゃないからダメか？

どっちにしても天空闘技場にはウイングが居るから大丈夫だろう。

「……その力を先に身につけることは出来ないの？」

「あー……身につけても死ぬだけだから先に筋トレ」

ポンスは元々毒で制するタイプだから、今ではゴンよりも力が無いだろう。

それでは天空闘技場で200階まで進めない。

そういうのは困る。

俺は女の子で特に美人の子には優しいですよ。

「ちなみに目標はゾルディック家の敷地に入る事」

「……どういう事？」

「ま、行けば分かるよ」

あ、そう言えば観光バスってもう出てるのか？

自分の家に行くのに観光バスとか使った事無いから時間知らないんだよねあ。

まあいざとなったら車を手配すれば良いから大丈夫か。
本当は公共機関を使っただけだ。ただ、たんだけだ。
せつかく原作組と一緒にポンスにも修行を付けさせてやる訳だし。

「あ、居た」

原作組発見。

今は守衛室で話を聞いている所か。

とりあえず——あ、電話し始めた。

そろそろ執事長に断られてゴンがキレるころかな？

「や、ゼプロさん」

「ミルキ坊ちゃん！ お帰りなさいませ」

「ゴンの説得、大変そうだね」

あ、釣り竿使って門を越えようとしてる。
あのまま越えるとミケの餌になるんだよねあ。
ま、ゼブロさんが説得してくれるだろう。

「キルアに友達はいないって言われた」

というか、俺は無視だろうか。

まあ、“絶”を使っているからだろう。
さてさて、ポンスは俺の気配が消えたことに気がついて……ない
な。

「ごめんなさい。ゼブロさんの事考えてなかった」

「ゴン君、ミケに会いたくありませんか」

「ねえ、ミケって？」

あ、“絶”を止めたら話しかけられた。

「うちで飼ってる番犬」

「ってうおあ！ 居たのかよー！」

流石レオリオ、ツッコミが……って今俺の事に気がついたの？
あ、俺の事じゃなくてポンス？

あ、そしてゼブロさんが試しの門を開けようとしている。

「ストップ。で、ポンス、押してみて。開かないだろうけど」

「え……？ この門開くの？」

といいながら挑戦してみるポンス。
頑張っている彼女も（ry

ま、全くもって開かないけど。

「この、門、カギが、かかっているんじゃないの？」

「押せば開く」

というか持ってきた車、どうしよう。
あ、入れれば良いか。

「ゼブロさん、車を中に入れて。これカギ」

ま、中に入れるくらいならまっすぐ進めるだけだから大丈夫だろう。

ということで、久しぶりにこの門にも挑戦だった。

「ふっ！！」

俺が門を押して開いてから、ゼブロさんが車を中に入れる。
というか――。

「お前ら早く中に入れ」

以外と重いんだから、この門。

一応7の門まで開いた事もあるけど、今は常に修行用の腕輪を付けてるんだ。

そんな時に試しの門は重すぎる。

「あー重かった」

全員が中に入ってから門にかけている手を離す。

というか、ゼブロさんに鍵を渡す必要はなかった。

あの人車をついで中に入った。

ま、俺が門を押している時には車を入れられないだろうけど。

あ、ミケが来た。

ということ、日にちは飛んで20日が経過。

レオリオはかなり早くに試しの門を開ける事が出来て、その後にクラピカ、ゴンと続いて扉を開く事が出来た。

本当に素晴らしい身体能力だ。

経った二十日の筋トレでここまで開けるようになるとは。

ちなみにポンスは三人に一步遅れてまだ開けていない。

一応色々なものを背負って使用人の家の門は開けられるようになったけど。

「じゃーなー」

とりあえず三人はキルアをゾルディック家から一刻も早く連れ出す為に本宅に向かった。

まあ、後はなるようになるだろう。

誰だっけ……執事見習いがゴンの事をボコボコにして……覚えてない。

「じゃ、ポンズは二の門を開けられるように特訓な」

「え……一の門だけじゃないの!？」

実は門を開こうと頑張っている時に俺が念でプレッシャーをかけていたと知ったらどんな表情をするだろうか。

一応、ポンズも今の段階で一の門を開けるくらいの力は付いている。

ま、ゴンと同じ時間で開けるようになったことは予想外だったが、よくよく考えたらゴンは最初の方に片腕を骨折しているから腕の筋力バランスがおかしくなっていたのだろう。

とりあえずはポンズもハンター試験に合格するあたり、それなりの才能を持っているのだと安心した。

レオリオが二の門まで開けたのは体格あつてのことだろう。

ポンズの年と体格から考えたら、後数日で二の門を開けても不思議ではない。

「ということですからそれを全部背負って腕立て、スクワット、腹筋、背筋を500回ずつ」

ちなみにこのメニューは朝飯前——じゃなかった、朝食前のものである。

その後で適当にシャワーを浴びてから、朝食を食べて午前のメニューに突入する。

「あなたって……やっぱり鬼よね。あの三人が居なくなった途端にメニュー変える？」

「ごちゃごちゃ言っていないでやる。これは愛の鞭なんだから」

そう、キメラアントに遭遇したとしても逃げ切れるくらいの力は付けておいてほしい。

何と言っても俺は女の子の味方のつもりである。
特に美人の。

ということでもこんなにも短い行間で時間は進む。

え？ メタ発言禁止？ 細かい事を気にするなって。

「ということでも午前中は組手。じゃ、死ぬなよー」

とりあえずポンスが反応できるギリギリの速度で拳を繰り出して行く。

時折、ナイフを持っている左手を反応できる速度で振るう。

やはり命の危険がある方が成長は早い。

この組み手の目的はゴンとキルアには劣っている動体視力を鍛えることにある。

反応速度が上がっていくとそれにつれて俺も自分の速度を上げる。

というか、最終試験の時にも思ったけど今までに戦闘訓練をして

こなかったのだろうか。

成長速度があり得ない。

まるでクリスの時を見ているようだ。

あいつもあいつで成長速度が恐ろしかったが、やはり一から教えると言うのも楽しいものだ。

「じゃ、組手は終了。午後は……」

はてさて、どうしたものか。

一応基礎能力はそれなりに上がった。

念能力は天空闘技場で習得するとして、あと生き残るのに必要な身体能力は……あ、あった。

「……ちょっと、その笑い、何？」

「それでは午後のメニューを発表する」

息が切れているポンズに発表する。

まあ、変な笑いにはなっているだろう。

それなりに面白いと思うメニューだ。

「午後は……ミケとの鬼ごっこ」

「……」

お、絶句してる。

まあ常識的に考えたら死ぬようなゲームだしな。

ま、キメラアントから生き残る事を考えたらミケから逃げる訓練は最適だろう……多分。

「あ、ゼブロさん、後でミケの餌持ってきて」

「畏まりました」

今日の餌が何かは知らないが、とりあえず餌を背負ってミケから逃げるのが訓練だ。

原作通りなら今日中にキルアが家を抜け出してくるはずだから、その時に会えればまあ良いだろ。

第九話 お家にご招待（後書き）

ミケとの鬼ごっこ……本気でやったら死ぬだろうなあ

第十話 天空闘技場（前書き）

主人公は名前を覚えるのが苦手です。

第十話 天空闘技場

お、キルアが家から出てきた。

うーん……“円”をしてなかったら見逃してたな。

でもって、今はゴトーがはしゃいでるんだろうなあ。

あいつのコインさばきはかなり上手いからなあ。

「おーい！ もっと早く逃げないとミケに喰われるぞー！」

いやー、必死に逃げているポンズもかわゆす。

っていうか本当に必死になってる。

この訓練、思ってるよりも効果あるかも。

あんなに重いのを背負ってるのにゴンと同じ速度で走ってるよ。

んでもって、悲鳴をあげたら蜂が飛び出すと言うことではかなわないので、今は蜂どもには虫かごの中でおとなしくして貰っている。筋トレの最中に、俺がナイフを投げて威嚇とかしていたら悲鳴を上げて、それで俺が蜂の対象になってしまったから仕方なしにその時には数匹殺してしまった。

ま、ポンズがすぐに命令して収めてくれたけど。

「ミケ、もう少しポンズの相手をよろしくな」

とりあえず、分かっているのか分かってないのかは分からないけど、ミケにはポンズの事を殺さないように言っておいたから大丈夫だろう。

いざとなったらミケの事を威嚇しても良い。

ま、俺の言うことを聞かなかったことはないから大丈夫だろう。

とりあえず、俺は一度本宅に戻ろう。

ということで本宅。

ちなみに俺の目の前にいるのは親父とジジイ。

「親父、よくキルアが行くことを認めたな」

原作では確かキルアが結局は戻って来るからって認めたんだっけか。

ま、あまり細かいことは覚えてないけど。

「あいつは俺の息子だ。ここに戻ってくる」

あ、そう。

大層な自信なことだ。

まあ俺がどうなるか知ってる訳じゃないんだけど。

「それから、親父はゴン——キルアの友達を見てないだろうけど、奴はキルアと同じ天才。一緒にいたらキルアにとっても良い刺激に

なると思うぞ?」

一応釘を刺しておく。

親父もジジイもキメラアントの時まではキルアに手出しはしなかったからこれも意味はあまり持っていないだろうが。

「それから、俺が良いと判断したら兄貴の針を抜いても良いか?」

その一言で親父からあり得ないほどの殺気が俺に向かって放たれる。

ゾクゾクする。

自分の命の危険が目の前に迫っているこの感覚。久方味わえなかったが、やはり良いものだ。

「……」

一応オーラの流れには注意しておくことにする。

親父の怒りを買った訳ではないと思う。

親父もジジイも、キメラアントの時にはキルアが自分で針を抜いていた事をほめていたくらいだし。

「キルアは、あんたの息子であると同時に俺の弟でもある」

それこそ、大事に思っているのだ。

転生したとしても、それに変わりはない。

「……良いだろう」

へー。

親父も意外と頭柔らかいんだな。

頑固だと思つてたけど。

ゾルディック家と対立する事覚悟でこの話をしに来たのに。

「カルト達にも会つてやれ」

ああ、そういやカルトとかが産まれる前に俺つてはこの家を出て行つたんだっけ。

ま、ミケとポンスの鬼ごっこも未だ終わらないだろうし少し話すくらいはやってやつても良いだろう。

あ、そういやカルトって操作系の能力者で紙を操るんだっけ？
能力もコピーさせて貰おうつと。

旅団のメンバーになれるくらいなんだし。

「ミケ！ お疲れさん。もう良いぞ」

とりあえず日も落ちてきて空が赤くなっているのでミケとポンスの鬼ごっこを中断させてミケを本来の仕事に戻した。

ポンズは午後全てを使った追いかけてここで体力的にも、精神的にもかなり疲労しているみたいだ。

服のあちこちが汚れているし、というか少し破けてる。餌の匂いが染みついたのかしらないが、少しばかり臭う。

「ということで早急にシャワーを浴びることをお勧めする」

「あんた……あんたがこれをやらせたんでしょうが！！！！」

あ、怒ってる。

ま、でも良い経験になったと思うんだけどなあ。

俺も小さい頃は自主的にやった遊び兼訓練だし。

それよりも、これからは天空闘技場に行かなければならない。

とりあえずゴンとキルアが行くのと合わせるとして、ここから飛行船で天空闘技場に向かうとしたら一週間はかかる。

ということは、ここでポンズを鍛えるのは後四日が限界。

まあ四日もあれば人間結構な所まで成長できる。

飛行船じゃなくてジェット機で飛べば、天空闘技場までは二日で行けるからそれまではひたすら修行漬けた。

俺は格闘技の師匠とかはできないから、そういうのは実戦で身につけてもらうでしょう。

とりあえず、ゴンとキルアが念を覚える時にそれに便乗してポンズにも覚えてもらう。

俺が強制的に目覚めさせるのはあまりにも危険だ。

俺のオーラ量でやるとどうなるか分からない。

細かい操作が未だ一流の域にまでは到達してないから。

そして待ちに待った天空闘技場。

え？ 早いつて？

まあ、作者の都合だ。

……何言ってんだ俺？

ま、まあそんなことはどうでも良い。

ちなみに今日は2月20日。

前の方ではゴンとキルアが登録しています。

ちなみにポンスも。

格闘技歴は詐称してもしなくても良い事にしました。

まあ、とにかく早く昇る事が目的ではないし、とりあえずここでは念を習得してもらえれば俺は言う事無しだ。

あ、あと念能力を俺にコピーさせてくれれば大丈夫。

ま、キルアとゴンの方は原作通りにウイング、そのあとG.Iでビスケに指導してもらえればかなり成長できるだろう。

「ゴン、お前試しの門をクリアしてきたんだろ？　なら大丈夫。ただ思いっきり――」

ふむ。

ポンスはどうしようか……ゴンが押し出すで、キルアが手刀、ズシが拳法なら。

「ポンス、難しいことは言わない。ただ蹴ってこい」

「蹴るだけで良いの？」

「ああ。決して思いっきり蹴るなよ？　相手が死ぬから」

うん。

今まで俺とミケしか相手にしてなかったから一般人相手をする時の感覚がマヒしているだろう。

一応試しの門は二の門まで開くことは出来たし、筋肉もミケとの鬼ごっこで良いものになっっている筈。

「し、死ぬって……」

「別に冗談じゃない。忘れてるみたいだが、一応俺はゾルディックだからな？」

そう、何だか最近俺が暗殺者だと言う事を忘れている雰囲気がある。

もしかしてお近づきになれた！？

んな訳ないか。

一応ポックリとのフラグは折ったはずだけど……あ、でも世界の修正力が……でも主人公組以外には関係ないか？

ま、いいや。

俺はG Iでおさらばするつもりだし。

「ちなみに今まで小石を蹴っていた時くらいの強さで相手を蹴ると良い。それで勝てるから」

ま、ゴンよりも力だけはあるだろうから、思いっきり蹴れというアドバイスは出来ない。

それで相手が死んでしまったら困る。

「それからキルア、ここではお前にアドバイスしたりしないからゴンと二人で頑張れよ」

「エ、ちょ、兄さん！」

ああ、キルアに兄さんって呼ばれたの何時振りだろうか。
結局ゾルディック家では会えなかったし。

「ほら、お前の番だぞ」

都合良くキルアの番号が呼ばれる。

ま、ポンスの番号が呼ばれたからすぐだって分かったんだけど。
とりあえず俺はウイングを見つけてキルアとゴンの事を任せない
といけない。

あいつらはノンストップで200階まで進むし。

「ということでその心源流師範代、すこしお話がある」

「……何でしょうか」

あれー、俺物凄く警戒されてるんだけど。

ま、しょうがないか見るからに危険人物だしな俺。

それでもハンター……って関係ないか。

「うちの三人について“念”の師匠になって欲しい」

「ちょ、ちょっと待って下さい！ 話は私の家でしましょう」

ということで、舞台は変わってズシとウイングの部屋へ。

俺が“念”ではなく“燃”の方を言っているとでも思ったのか、
あの掛け軸は隠してある。

「ということであの三人の“念”の師匠になってもらいたい。もち
ろん燃える方ではない。200階から必要になる方だ」

「……あなたも使えるのならあなたが教えばいいのでは？」

「ああ、それがあいつら200階までノンストップで行く上に俺が無理やりに起こすのは出来ないから」

まあ、自分でも念能力者としては一流のつもりだが、無理やり起こす時に“発”で細かい操作というのは難しい、というかやった事が無い。

ただでさえオーラが多いうえに、それを莫大なまま扱っているから怪我をさせないようにというのは難しい。

「……良いでしょう。ただしあの三人がそこまで早く200階に上がるとは私には思えない。折をみると言うことで構わないでしょうか？」

「ああ、助かる。そこから先は貴方にやってもらうなり、俺がやるなり決めてもらっても……いや、男二人は貴方に任せる。女の子だけ俺が教える事にしよう」

「それはどう言った理由で？」

「二人の方は天才——いや、神童。正規で教わった方が二人のようになる」

ポンスの方がどうかは分からないが、まあ主人公より才能があると言うことはないだろう。

「二人の方は私に全て任せていただけるのでしょうか？」

「ああ。それからゴン——黒髪の子の方はハンターだ。裏試験につ

いてもよろしく頼む」

これでとりあえず俺が居るから、ということウイングが教えるのを拒むことはないだろう。

一応俺が居ることでの弊害はなくなるように手は打った。

キルアの念能力をコピーできないのはかなりのマイナスだが、まあ仕方ない。

それよりもポンズがもしもG Iまでに念能力を開発する事が出来たらそれをコピーさせて貰おう。

原作ではキメラアントに何をするまでもなく殺されたけど、それなりに使える能力であった可能性も捨てがたい。

ま、いずれにしても他に欲しい能力はない。

本当だったらキルアのが一番だったか。

あ、でもキルアってG Iの時で既にオーラを電気に変化させるんだっけ？

それならその時にコピーするか。

ということで、キルアとゴンがウイングに念の何たるかを教えてもらっている間、無事に精孔を開いてもらったポンスは俺の下で修行。

俺は可愛い女の子の味方なのです。

ちなみに修行のスケジュールはいたって簡単。

朝早起きしてから“点”で心を静める、朝ご飯——ドーピング——を食べてからは森に行つて“纏”から“練”へ、それを昼まで繰り返してからお昼にはまたもや『我儘な調味料』でドーピング。

でもって午後には“練”から“凝”へ。

まだまだ粗削りだが、とりあえず天空闘技場だと言っても“堅”と“凝”が出来ない以上は話しにならない。

それさえできれば、レベルの低い天空闘技場の事、身体能力の高いポンスなら何とかやれるだろう。

にしても、ゴンやキルア、クラピカ程の才能は持っていないとしてもそれなりの才能はある。

オーラの流れは結構緩やかで力強くなっているし、“堅”も今は十分ほど維持できる。

今は、というのはゴンとキルアがウイングから“念”の修行禁止を言い渡されて、“点”だけをしている毎日にも、ポンスは俺の下で修業をしていたからだ。

そして今日は夕食の後に修行を続けると言う訳にはいかない。

「ポンス、行くぞ」

今日はヒソカとカストロの試合。

見ない訳にはいかない。

それこそ、グロイ系にそれなりの体勢が無いポンスに見れば、

ヒソカの腕がちぎれるくらいで悲鳴を上げてもらっては困るのだ。
まあ、毎日“点”をしているからそれくらいで驚くと言うことはないだろうが。

そして始まるヒソカとカストロの試合。

ポンスには、この試合が終わるまで常に“凝”で居るように指示してある。

ヒソカが何時バンジーガムを飛ばすのか、それと同時にその念能力がどういう効果を持っているのか。

戦闘時に常に“凝”でいなければいけない訳ではないが、初めて戦う相手に対して“凝”を使うと言うのは基本中の基本だ。

それが出来なければお話しにならないと言うビスケの言はまさしく的を得ている。

「あ、今の……」

流石に二カ月やそこらで試合中にずっと“凝”で居ると言うのはきついようだったが、それでもヒソカがオーラを飛ばした瞬間は分かったらしい。

それは心配していなかったが、それ以上に腕がちぎれても悲鳴を上げるどころか眉ひとつ動かさずに試合を注視していると言うのはかなりの驚きだ。

まあ、ミケに追いかけられるという体験をしているから、最早怖いものなど無いかもしれない。

今現在だったら、ポンスは念能力者としてはゴンとキルアよりも一段階上にいる。

まあ、実際に戦ったら戦闘センスその他諸々で叶わずに負けるだろうが。

この試合が終わったら、ポンスの試合を組むことを考えても良い

かもしれない。

というか、そろそろ試合を組まないと期限がある。

あ、ヒソカの試合が終わった。

「ポンス、とりあえず部屋に戻ったら “ 纏 ” “ 練 ” “ 絶 ” の切り替えの練習な」

今からヒソカの元に向かうとしよう。

今ならマチが居るだろうし、念糸縫合は見てみたい、そしてできればコピーしたい。

ま、旅団の一人を殺した奴としては敵対の対象になるかもしれないが。

第十話 天空闘技場（後書き）

天空闘技場は念を習得するための関門。

ちなみに身体能力的にはポンスさんはゴンよりも力があるはず。
潜在能力ではさすがに負けてるけど。

第十一話 主人公は中二（前書き）

さあ、まだまだいくぞ？

第十一話 主人公は中二

「いやー……死ぬかと思った」

とりあえず念能力をコピーするだけコピーして逃げ出して来たけど、流石に旅団。

身体能力も半端ないわ。

とりあえずヒソカの部屋が壊れてしまったが、後で何か果物の詰め合わせでも贈っておこう。

それでもコピーできたのは幸いだった。

「あんた……やっぱりバカでしょ」

弟子にバカって言われました。

やはり俺に誰かの師匠になる才能はないらしい。

キョウカとクリスはひたすら俺の事をバカにして無視するし、ポズには呆れられるし。

というか、弟子というよりも女の子にバカにされている気がする。

「ま、それよりも聞きたい事が一つ。何で試合組んでるの？」

相手はあのモブキャラ三人組で原作では唯一戦わずして逃げ帰ったサダソ。

俺としては対策の立てやすいリー……あのバイクと戦ってほしかったのだが。

名前を覚えるのは苦手だ。

「だって……喧嘩売られたしそれに……」

「それに？」

「な、何でもないわよ！！」

良く分からないが、まあ喧嘩を売られたのなら仕方ない。
それに能力自体は対策を立てる事も十分にできる。

「……あんたの事バカにされたからとか言える訳ないじゃない」

「ん？ 何か言った？ よく聞こえなかったんだけど」

「何も言っていないわよ！」

あ、そうですか。

というか何でもないなら独り言とかするな。
しかも俺の能力をして聞けないような独り言を。

「ま、良いや。それより対策を立てる為にこのビデオ」

操作系の念能力者が撮影した試合のビデオ。
ウイングに頼んで運よく手に入れる事が出来たのは幸いだった。

「“凝”で見て能力が何か考える事」

「さー！ やって参りました。ポンス選手対サダソ選手！ これが初試合のポンス選手！ 200階クラスでは珍しい女性選手ですが今日はどんな活躍を見せてくれるのか！？」

とりあえず、俺がサダソの能力に対して対策を教える訳ではなく、今日の試合はポンスに全てを任せることにした。

ちなみに彼女は未だ水見式を終えていない。

俺は自分の系統を知るよりも早くに“堅”“凝”の二つを確かなレベルにまであげる事が生き残るうえでは最も重要だと考えている。だから、彼女はまだ“発”を作っていない。

そして自分の系統が何であるのかということを知らない。

まあ、師匠の俺の言いつけを破って自分でひそかに水見式をやっているかもしれないが。

あまりそうだとは思いたくない所だ。

「ファイツー！」

そして始まった試合。

何やら口から始まっているようだが、ま、ここからわざわざ聞くほどの内容では――

「うるさい……」

て、何だかポンズが顔を真つ赤にさせて怒ってるんですけど。

しかもそのまま殴りかかったし。

これは終わったら説教だな。

能力が分かっているとは言え、隠し持ってるかもしれないのに最初から接近戦とか……まあ水見式を終えてないから接近戦以外にやりようが無いのかもしれないが。

それでもゴンみたいに石板を投げるとかそういう事が出来るだろうに。

それに200階からは武器の使用も許可されてるんだから何か使えば良いのに。

ま、ポンズ武器という武器は今までは毒だったし、蜂を此处で使う訳にも行かないからしょうがないか。

そう思いながら試合を見る。

右、左、と繰り返して行くポンズの拳は怒りの為か、大振りになっていて修行の時の何分の一の威力、鋭さしかない。

逆に、時折あるサダソの攻撃は的確にポンズの事を捉えている。

流石に200階クラスで洗礼を受けただけのことはある。

つまり、200階に到達するまでは自分の武術だけで昇って来たという事。

ハンター試験が終わってから英才教育が施されているとはいえ、ポンズは未だ一年も戦闘訓練を受けていない。

身体能力はサダソの比ではないだろうが、ま、実戦経験は及ばないだろう。

あ、サダソが能力を発動した。

まあ能力名は分からないけど、コピーする価値もないような能力だ。

ここで失ったであろう左手の代わりとして、オーラを具現化させ

て、それが巨大化する。

要するに巨大な左腕。

何のためにその能力にしたのか分からなかったが、まあ新人相手だったら自分の自身のある格闘能力と巨大化した左腕というのは確かに脅威になりえる。

まあ、自分の格闘能力が及ばない相手にだったら意味はないが。

「クリティカルヒット！」

これで得点は9対2。

相手の得点が8点に差し掛かったところでポンズの頭が冷えたのか、随分と良い動きをするようになった。

が、巨大な左腕相手に苦戦している。

それでも、オーラで作られた腕だから審判には見えない。

つまり、ダメージ覚悟で居れば今のポンズでも勝てる相手ではある。

まあ……あと数分もしない内に決着がつくだろう。

「あーっと！ サダソ選手の勝利！ ポンズ選手、初勝利なりませんでした！」

やはり。

良く持った方だが、今のポンズに格闘戦をしながら“堅”を維持し続けると言うのは酷な話だ。

それでも“堅”が出来ていたからこそ左腕のオーラに対してもダメージをあまり受けずに済んだのだろうが。

ま、とりあえず師匠としては及第点……かな？

でも俺としては身体のうちここに傷がある事が許せない。

まあ顔にないだけマシだが。

それでも、せっかく可愛いものだからもう少し自分を大事に……ま、

しょうがないか。

「ということで試合の反省会」

「何がということで、なのよ」

ま、メタ発言だから気にしない方がよい。

「それより、何で試合の始めからあんなに熱くなって大振りになってたの？」

「そ、それは……だって……」

「はいそこ。顔を紅くしてないで早く説明する。っていつか熱でもあるの？」

熱でもあるならそれはそれで心配です。
俺は可愛い女の子の味方なのです。

ということではポンスの額に自分の額を当てる。
古典的な方法だが、熱があるか無いかを確かめるのはこれが一番いい。

「な、なな……」

「……やっぱり熱があるんじゃないのか」

「な、無いわよ!」

分かった。

分かったからいきなり叩かないでください。

というかいきなり師匠の事を叩くとか、やはり俺は物ごとを教えるのには適していないのだろうか。

「ま、なら良いけどさ。それより何で試合の最初に熱くなったのよ」

「……言わないわ」

言えない、ではなく言わない、か。

とことん俺は師匠という柄では無いらしい。

ま、女の子に強要して聞きだすほど俺も廃れてはいないけど。

何よりも俺は可愛い女の子の（ry

「……何で私がこんな奴にドキドキしなきゃ——」

「ドキドキって何の事？」

何故かその部分しか聞こえなかったんだけど。

あ、アレか。

「ご都合主義とか言う。

というか本当に顔が赤いんですが、熱無いの？

何なら『我儘な調味料』で熱を下げる奴を作っても……。

「な、何でもないわよ！ …… 出てけえー！！！」

…… 追い出された。

「俺に一撃でも入れたら褒美をやるよ、キルア」

とりあえず俺もじっとしているのはつまらないので、200階まで一週間出来てから試合を組んだ。

一週間というのは、俺が一度は200階まで昇っていて、一気に180階まで行くことが出来たからだ。

原作ではキルアは断っていたが、別に金集めが目的ではなかったのでそのままエスカレーター式に昇ってみた。

んでもって、そう言えばキルアとやったことなかったよなあと思
いだして、試合を組んでみた。

ま、目の前の本人は兄貴の針のおかげかなりビビってるけど。
だから、今は“纏”の状態。

流石に“絶”だと、“纏”の状態のキルアの拳が当たった時に死
ぬ。

あいつは確か試しの門を四の門まで開けるんだったか。

「ほら、キルア。さつさとかかってこい」

一応殺気とかそういった類のものは出していない。

それだけで、兄貴の針は反応してしまうだろう。

それなら、危険を感じるか否かの、ギリギリの戦闘を体験させて
やってからの方が良い。

「……いくぜ、兄さん」

そう言えばキルアって俺のことは兄さんだけどイルミのことは兄
貴だよなあと思いつながら適当にかわす。

キルアも天才だが、未だ俺が能力を使うほどではない。

如何せん年の差もあるし、肉体が未だ成熟しきっていないから天
才相手でも俺の方が今は強い。

そのうえで、ポンズやキョウカ、クリスの師匠だったから分かる。
やはり、神童。

ポンズの方が念能力者としては一步上にいると思っていたが、ど
うやら勘違いだったらしい。

俺が攻撃を仕掛けることに“纏”から“練”になり、防御をする。
その切り替えのスピードはまさしく天性のものだろう。

ま、今はポンズに及んでいないことは確かだが、もしかしたらこの試合だけで抜かれるかもしれない。

それだけの成長速度を感じさせてくれる。

だから、兄貴の針は邪魔だ。

命がけの戦闘はキルアの事を大きく成長させるが、キルアにはそうした戦闘を避けるように脳に刺さった針で指令が飛んでいる。

針を抜いて、少し不利な戦闘をこなすだけで、キルアは数週間で中堅ハンターくらいの力を手に入れるはずだ。

それを確信させるだけの技量もある。

俺が常に“纏”で居るのではなく、攻撃の一瞬や移動の時、キルアの攻撃を防御する時にだけ“練”を使い始めたらすぐにそれを真似するようになった。

この分なら俺が応用技を使い出したら使いこなすことは当然無理でも、使うことぐらいは出来るだろう。

が、やはり今の俺の敵ではない。

それでも俺に一撃だけ入れる事が出来たのは驚きだが。

ま、実際は俺が楽しくなりすぎて油断していただけだが。

べ、別にキルアの為に一撃だけ喰らってあげたとかそういうことじゃないんだからね！

……止めよう。

「ということでキルア。ここから——っていうか多分最後になると思っけど」

構える。

中二病の俺がこの二年間で開発、そして辿り着いた念戦闘の境地。“凝”と“硬”の複合技、“視”。

目だけにオーラを集中させて、視力に関係のある全てを強化することができるかどうかは不安だったが、実験の結果できたから幸運だった。

「柔拳法——八卦六十四掌」

要するに原理は同じ。

全身の精孔を突くだけの事。

それで相手を強制的に“絶”にする。

限りなく鍛え上げられた動体視力と、目にオーラの全てを集中させる無防備状態が可能とする念戦闘の境地だと考えている。

能力ではなく、自らの身体能力で相手の精孔を突く。

「な、何だ……これ」

成功した。

「オーラが出せないだろ。強制的に“絶”にしたんだ。ま、詳細はウイングさんにでも聞いてくれ。それから一撃入れた褒美はしておいた」

兄貴の針は抜いた。

それがどう影響するかは分からないが、キルアが死ぬことはない。俺が影響をきたしたとしても、世界が正常に動いていることはハインター試験の番号で確認済み。

ま、後は俺も招集されるであろう9月1日のヨークシンまで自分を鍛えるだけだ。

3ヶ月あればそれなりに強くなれる。

目標としては旅団全員を相手に逃げれるくらい。

……まあ、あくまで目標だが。

俺としてはいくら念能力をコピーできるといっても、旅団全員相手に無傷で逃げられるほど甘いとは思っていない。

あ、でも『瞬動』を使ったら逃げられるか？

ま、それは別に考えるとしても、原作では団長一人相手にするのに親父とジジイが相手をしたのだ。

親父ですら旅団は割に合わない仕事だと言っていた。

俺が常に例の腕輪を付けているといっても、親父相手に無傷で勝利できるほど甘くはない。

腕の二三本は覚悟のうえだったら問題なく勝てるだろうが。

旅団全員を相手にしたとして、今の力量でどうだか……ネテロ会長でも難しい……かな？

でもあの能力はかなり反則だから、アレを使ってオーラを全て込めたら勝てない事もないか。

第十一話 主人公は中二（後書き）

主人公が弟子に対しても強く出れないのは相手が可愛い女の子だから。

可愛い女の子相手にはどうしても甘くなるものです。

男は皆ロリコン。

異論は認めない。

第十二話 VS 団長（前書き）

さすがは最強主人公

第十二話 VS 団長

キルア、ゴン、ポンス、と天空闘技場で相手をしながら、自分に適度な負荷をかけつつ修行はした。

腕輪及びあり得ないほどの筋力負荷での天空闘技場で実戦訓練。

まあ、天空闘技場のレベルなどたかがしれているから、“仕事”を入れたり、無理を言ってネテロ会長、アーチャー、ギルガメッシュに相手をして貰ったりもした。

流石に世界最強の人物には勝てなかったが……まあ殺す気じゃなかったから仕方が無いだろう。

それに健康体で相手をした訳ではない。

腕輪と筋力負荷の状態でだ。

流石にこちらも相手も殺す気でやっていた訳ではないからできたことだが、それでも自分でも驚くほどの成長をした。

今なら会長相手でも勝てるような気すらする。

やはり、俺は戦闘者なのかもしれない。

「済まない。少し遅れた」

辿り着いた部屋には数人の雇われた殺し屋たち、そして親父とジジイ、クラピカ。

知り合いはその三人だけだ。

クラピカ的能力は旅団相手には大したものだし、ま、一応俺もコピーしておこう。

ダウジングとかが使えるというのはかなり魅力的だ。

「時間に遅れるのは感心せんな」

「すまんジジイ。ちょっと弟子に指示を与えるのに手間取ったのと気流が変化しててな」

ま、両方ともホントの事だ。

そんでもってもう一人ゾルディック家の者が現れた事で衝撃が走ったのと俺が弟子をとっていることでもう一度驚かれた。

とりあえずクラピカは俺を見て驚きはしたものの、それを表情に現さなかった。

流石にプロとしての意識を確立させているらしい。

それよりも、問題はジジイが名刺を配ったのか、四人ほどが名刺を持っている事。

今でさえ俺が手伝ってはいるが、これ以上依頼があっても困るのだが。

「それより、あんた、一人とチームを組むのとどちらが良い」

聞いてきたのは原作で確か団長に描写もなく瞬殺される奴。

力量はたいしたことはない。

というか、旅団が相手だということを考えた時に、通用するのは親父、ジジイ、クラピカの三人だけだ。

何でハンター協会とかに依頼しなかったのか。

あ、できないのかもしれないけど。

「一人だ。この中で俺の相方が務まる奴が居るのか？」

というか、クラピカが説明してくれるだろうがお粗末なチームプレイは個人で好き勝手やるよりも大変なことになる。

威圧を出しながら言ったが、右に見えている四人は委縮してる。期待違いだ。

「決まりだな」

「まあ、組みたい奴は組めばいいさ」

そう言いながら各々が勝手に出て行く。

まあ、暗殺者を集合させたとしてもてんでバラバラになるのが落ちだから仕方ないか。

「親父、少し用事を済ませたら合流する」

とりあえずクラピカと話をしておこう。

ということ、どこに……あ、居た。

隣にいるおっさんは……ノースラードだっけ？

あれ？ それだと北の豚の脂？

まあ、名前を覚えるのは苦手だから仕方ない。

……何がどう仕方ないのか自分でも分からないが。

「クラピカ、久しぶりだな」

「ああ……」

何というかハンター試験の時とはまるで雰囲気も違う。

まあ、一人殺して、雰囲気が変わったのはしょうがないか。

俺も最初はまるで使い物にならなかったし。

それでも正気を保っているのは相手が旅団だからか。

「ゴンとキルアには？」

「いや、まだ会ってない」

「クラピカ、こいつは誰だ？」

この隣のオッサンうるさい。

まあ、クラピカの雇主だから顔に泥を塗ることはしないが。

「私の知り合いです」

「ミルキ・ゾルディックだ。よろしく」

営業スマイル。

何でも親父によれば依頼の三割ほどはマフィアがらみだから顧客を失う訳にはいかないのだとか。

ま、仕事が無くなるとゾルディック家だけではなくそこで働いている使用人達も路頭に迷うから仕方ない。

というか、ゾルディックの名前を出した途端に表情がこわばった。ま、仕方ないけど。

とりあえず無視。

「クラピカ、あまり無理するなよ。ゴンやキルアが悲しむ」

能力者としてはクラピカはそこまで大成した訳ではない。

旅団相手なら無双できるだろうが、念を習得してから一年もたっていないのだ。

仕方ないことは仕方ないが、ゴンやキルア、ポンスを見ていると焦りすぎているのではないかと思う。

実際に、時間をかけて行けばクラピカはかなりの使い手になっただろう。

「それから、念は奥が深い。お前はまだ若いんだから焦るな」

これは忠告。

旅団を捕まえ終わった後に能力が使えなくなるというのはあまりに酷い。

まあ、それに人生をかけているのだから仕方ない事も仕方ないが、それでも、凄腕の除念の能力者にかかれれば制約と誓約がある念能力でも解除できるはずだ。

新たに能力を作ればいい。

「じゃあな」

「ああ……」

ま、安心しろ。

俺は旅団のメンバーを殺したりはしない。

殺したら後の楽しみが無くなる。

……何だかヒソカと考え方が似てきたような気がする。

気のせいだ気のせい！

うん！ そのはず。

とりあえず親父に連絡を取ろう。

携帯の番号は……っと。

あ、鎮魂歌が始まったっぽい。

あ、親父？ 今どこ？ 分かった。それからキルアがこの街にいるからその対処してから向かうわ

で、キルアの番号は……っと。

やっぱりこういう時にキルアもゾルディック家専用番号を持っていた方が良さと思うんだけど。

あ、キルア？ 旅団には手を出さないように。そう。クラピカ？ さつき会った。だから旅団にだけは手を出すなよ？ 今のお前じや死ぬだけ

針も抜いたことだし、一応釘は刺しておく。

ま、キルアが死ぬことはないだろうからこれで大丈夫——って今度はジジイ？

何？ ウルセエから電話で叫ぶな！ あ？ 屋上から？ 分かった。今から行く

そっぴや原作でもそんな事やってたなあ。

屋上から“円”を使って降りて行く……か。

確かに神経すり減らすけど、わざわざ俺がやらなくても良いのに。というかバカオーラって……いくらなんでも言い方ってものがあるだろ。

「親父、ミルキ、やるぞ」

俺が一人でやろうと思ってたけど、どうやらそうもいかないみたいです。

依頼は確実にこなすのがゾルディック家のしきたり。

三対一でやることになりました。

俺は流石にこの三人に叶うほどの近接戦闘能力はない。

ということでは実際は二対一でやりながらも俺が隙を窺うという戦法。

それでも流石にトップクラスの戦闘者同士。

隙を簡単には見せない。

「平気か」

「問題ない」

親父がベンズナイフで皮膚を切り裂かれて、毒に対して全く問題ないと言ったのけた。

まあ、ゾルディック家の者ならば毒は問題ないが、それにしても団長流石。

親父とジジイの相手をしながら俺にも注意を払っている。

「他人の念を盗むか……ミルキと同じ特質じゃな」

ジジイの分析が進む。

団長の念能力の詳細は知らなかったが、流石はジジイ。亀の甲より年の功、ってか。

「——シルバ、ミルキ、サポートせい——」

「冗談言つな。ジジイ、俺にやらせてくれ」

その為にわざわざヨークシンまで来たのだ。

ここで団長と戦えないんだったら来た意味がなくなる。

「……一人で戦う相手ではないわい」

「そりゃわかるけど、ジジイも俺の力を知らない訳じゃないだろ？
大丈夫、ジジイと親父が隙を見て決めてくれれば良いから」

「……勝手にせい」

そりゃどうも。

なら十分にやらせてもらおうとしよう。

相手の念能力をコピーする力と、盗む力、どちらが強いのか、勝負。

親父とジジイがニメートルほど後ろに下がった所でジジイの能力を発動。

と、団長が本を片手にしながらマントを具現化した。

普通の使い手ならその能力を恐れて足踏みするだろう。
だが甘い。

『龍頭戯画』

時間稼ぎが見え見えとはこの事。

原作でジジイもそう言っていたが、それが分かるほどには成長している。

それでもって、俺の攻撃をかわしながら二人の事にも注意しなければならぬのはかなり神経をすり減らす。

それにしても、本当に素晴らしいの一言だけで説明がつく身体能力だ。

俺の攻撃をかわしつつ、親父とジジイを視界に入れつつも俺の事を生け捕りにしようとしている。

恐らくは俺の能力が欲しいのだろうが生憎、これはジジイの能力。遠距離に特化しているといっても過言ではないから俺から近づくことはまずあり得ない。

「ッ!!」

親父が“練”をした。

それに団長が反応して一瞬の隙が出来る。

それを狙って一気に龍を団長に喰らわせ、壁に叩きつける。

——
“練”

そのまま俺自身も団長との距離を詰めて足を捉えて殴りつける。

「親父!!」

——
“堅”

親父のオーラが俺もろとも団長に叩きつけられる前に携帯の音がしたが、どうやら兄貴、超ジジイ、カルトが任務を終えたのかもしれない。

というか親父、本気でやりやがった。

「イルミか」

親父が兄貴からの伝言を団長に伝えて、戦闘終了となる。

俺達の依頼人の十老頭が死んだのなら仕方がない。

「やれやれ、命拾いしたのお」

それは俺に言ってるのか、それとも団長に行ってるのか、ジジイには後で問いただしたい所だ。

「……殺らなくて、良いの？」

「お主、わしらを快樂殺人者か何かと勘違いしとらんか。わしらの依頼人は十老頭——」

服がかなり汚れた。

これは帰ったら洗濯しても駄目かもしれない。
所々破けてるし。

ま、それなりに楽しかったからちゃらにしてやろう。
……何だか随分と上から目線だ。

そして、帰ろうとしていたら団長に声をかけられた。

「一つ、聞いて良いかい？」

「何？」

「サシでやったら、俺とアンタ、どっちが勝つ？」

どうだろうか……。

っていつか親父とジジイ、俺を置いて行くな……ってそう言えば
これから二人とも家に戻るのか。

なら置いて行っても良いが……一言くらい何かあるだろ。

それよりも団長の質問に答えてなかった。
サシ、か。

まあ――

「あんたが俺を殺す気なら…… 8割」

多分、そうだろう。

「その2割は？」

「俺が遊んだらそうなる。もっとも、遊ぶ気満々だったから常に8割だけ」

だって会長の能力全開で使ったらそうなるしなあ。
不可避の速攻？
何それチート？
って感じだしなあ。

「あ、そう言えば腕輪外してなかった」

キルアか、何？ グリッドアイランド？ 自分で手に入れる。じやーなー

あと二つ分残ってるけど、一つは俺の分だからゴンとキルアの二つ分はない。

それなら原作通りに選抜に受かった方が良い。

その方が、キルアとゴンの“発”の習得にも役立つ。

そして、キルアの能力は俺も欲しい。

ま、それはともかく――

「いつの間にかフロアマスターですか……」

ポンズがフロアマスターになってた。

まあ、ヨークシンに向かう前にすでに8勝してたから時間の問題だとは思ってたけど。

「で、どうすんの？ そのままフロアマスターやってるか、それとも当初の予定通りに幻獣ハンターを目指すか」

俺としては立てた条件がここで5勝だったからそれをクリアした今は、ポンズがどうしよう彼女の勝手だと思っただが。

今の実力なら、キメラアントから逃げ出す事も出来るだろう。

「あんたはどうするのよ？」

「俺？ これからグリッドアイランドっていう世界一危険なゲームやる」

それが当初の予定。

そしてその為に今はキョウカとクリスも頑張っているだろう。
あの二人ならクリアに向けて……案外ゲームを楽しんでたりして
あり得るから怖いが。

「……私もあなたについて行くわ」

「え？ 何で？ 幻獣ハンターになりたいんじゃないの？」

「う、うるさいわね！ 何か文句でもあるの！？」

「無いです！」

怖っ。

まあ、セーブデータは後二人分残ってるから何とでもなるけど。

「所で“発”は完成させた？」

それだけが知りたかった。

ちなみに水見式はとくに済ませて、ポンスが操作系だということ
とは分かっている。

何で操作系なのかは分からない。

ヒソカの性格判断によれば、操作系は理屈屋でマイペースだった
はずだ。

マイペース……にはとてもではないが見えない。

まあ、百歩譲って理屈屋ではあるかもしれない。

毒を扱っていたから。

ま、ヒソカの独自分析だから当たっていない事もあるのだろう、
多分。

「できてるわよ」

「見せて？」

「……他人には無闇に見せないんじゃないの？」

「それはそれ、これはこれ。俺は師匠だから」

「ということで見せてもらったポンズの念能力はこちら、『忠実な働き蜂』ロイヤル・ビー」

操作系ということで元々使っていた蜂を操作できることは勿論、モラウと同じように意のままに操ることのできる念蜂だ。

しかも、針だけでなく、何匹かが毒を元にして蜂を作っているからタチが悪い。

掠ったらアウトの上に、蜂に“隠”を使う事が出来る。

俺は毒が効かないからなんともないが、そういう人間はゾルディック家以外には居ないだろうし、かなり有効的な能力だと言える。

何よりも、生物としての蜂と念蜂の見分けが“凝”を使っても、“円”を使っても分らない。

クラピカの鎖と同じく、厄介だ。

まあ、この能力は各系統の複合能力であるが故に、メモリを喰いすぎてそれ以外の能力を作れないというのが欠点だが、それでもそれを補ってお釣りがくるほどの念能力だと思う。

それに格闘戦が出来るから、それをしながら強化系だと思わせておく一方で、途中で蜂を操って操作系だと思わせ、最終的には隠を使った念蜂が毒でもって制す。

これのバリエーションだけで六通り。

「上出来。後は蜂が複雑な動作を出来るようにすると、“隠”を完璧に扱えるようになる事、それからもう少し格闘が出来るようになることだな」

「それって……全部じゃない」

「ま、修行に終わりはないの。念を極めようと思ったらそこ人間が生きられる時間じゃ足りないんだって。それより、もう少ししたらグリードアイランドをやるから、準備しておいて」

俺は一応気になる事があるからそれを済ませなければならぬ。

第十二話 VS 団長（後書き）

チートにしすぎた。

でも自重はしない。

まだまだ強くなるはず。

第十三話 グリッドアイランド（前書き）

はっはー！

主人公最低だ。

こんな風にするつもりはなかったのに……

第十三話 グリッドアイランド

「みなさん、お待たせいたしました。それではこれより、グリッドアイランド選考会を始めたいと思います」

ということやってきたのは選考会。

キルアとゴンがはじき出されることはないと思うが、転生者が居た以上、油断だけは出来ない。

一応この二人が選考会で合格できるかどうかだけ見届けようと思つて来てみたが……果たしてどれほどの熟練者が居るのか。

念能力を見る事が出来ないから分からないが、それでもオーラの歪みが無いか、それを見ればなんとなくはわかる。

一流の使い手は歩き方からして違うものだ。

まあ、ビスケは確実に通る。

鍛え抜かれた肉体に類をみないほどの実戦経験。

キルアも電気に変化させる“発”を見せれば大丈夫だろう。

gonは……“硬”で壁を殴るんだっけ。

それは少し心配だ。

原作キアラも何人かいるが……二人が落ちない事を祈るとしよう。

そして、ゴンやキルアと話をしている今で俺の方に視線を向けているのは……数人。

その内の何人かは間違いなく転生者だろう。

「先に行くぜ、ゴン、兄さん」

反応したのは間違いなく転生者。

オーラの流れから見ると、俺よりも強い人間はいないだろう。

ゴンも出て行く。

今までの流れで見ると、合格したのは二十五人ほど。

この分ならゴンが合格する事も確実か。

それに、ツ……ツエ……テ……何だっけ？

まあチエケラツチョコで良いや、そいつがゴンの持っているセーブデータの事も知りたいだろう。

一応確かめるが。

「最後の方、どうぞ」

ま、一応千二百万ジェニーを払ってきているから俺も選考だけ受けて行こうかな。

「練を見せてもらおう」

確かハンター用語で鍛錬の成果を見せる。

ゴンとキルアは素直に“練”を見せて最初に落とされた。

——“練”

敢えて全力で“練”をやってみた。

とりあえずジジイにバカオーラと言われた俺の“練”ならどういう反応を示すのか。

「……合格だ」

あ、合格した。

まあ俺が最後だったからかな？
顔が若干ひきつってるけど。

ということ合格者が集まっている所に入ってみたら、どうやら原作よりも少し多いみたいだ。

三十人よりも少し少ない程度。

「あ、兄貴！」

「ミルキさん！！」

いやー。

二人が受かってたみたいで良かった。

「ミルキさんはどんな“発”を見せたの？」

ゴン……それをこの大勢の前で聞くか？

まあ、バカだから仕方ないのかもしれないけど。

「普通の“練”」

「へ……？」

「だから、普通に“練”をしてきた。あ、ハンター用語じゃないぞ？ 四人行の方」

これはここに居る者への牽制。

とりあえず普通に“練”をして受かったという事がどういうことが分からない奴らではないだろう。

もしかしたら俺の事を勝手に強化系だと思っかもしれない。

まあ、いずれにしてもここからは退散するけど。

「ということ俺は帰る」

「どうして？」

「どうせ報酬は金だけだからなあ……別に雇われる必要ないし。と
いうことでじゃあな」

とりあえず帰ったらポンズを連れてG Iに乗り込まなくては。
ここにいるメンバーが入る時とか会ったら面倒だから先に入っ
ておこう。

それにしてもどうしてなのか理由は知らないけど、ポンズが一緒
に来てくれるというのは非常に助かる。

男一人とかありえないし、キョウカとクリスと会うまでは一人で
居る奴として狙われる事も多くなるだろう。

まあ、最近はポンズも顔を赤くして熱があるみたいだから心配だ
が……それでも本人は大丈夫だって断言するから大丈夫なんだろう
けど。

「あ、やっぱり……」

いやー。

ずっと前から思ってたけどやっぱりね。

そっぴいやどつかで見た事ある人間だったし、協力してくれって言われたから協力したけど……まさかアレがジンだったとは。

いやー……やっぱり俺ってバカだわ。

ちなみに入口の女の子の所でジンからのメッセージがあったけど、ひたすら謝られました。

そんでもってカードを自由に持って帰って良いという言葉も。

ちなみに謝られたのは俺が特質系の“発”でカード化する能力を作らされていたから。

流石にあんなにオーラで俺も念能力だけは天才だと思ってたのにメモリが少ないとは思ってたんだよなあ。

まあ、カード化する能力を作っていたとしても別にそこまでメモリを使っている訳ではないから良いけど。

それはともかくG Iに入っただけど……見られてる。
ねっとりとした視線。

“絶”を使う気配など微塵もなく……いや、使ってるかもしれないけどどちらにしても気付かれるようじゃ大したことはない。
こっちから“円”で威嚇してやろうか？

「で、ポンスは乗り遅れたのか」

階段から降りてきたのはまさかのゴン。
多分ポンスが入るのを躊躇ったのだろう。

ゴンと適当に話をしながらポンスが下りてくるのを待つ。
そうしたら降りてくるのは選考会で合格した奴らばかり。

キルアが下りてきて二人がじゃんけんで方角を決めてから俺に手を振りながら街の方向に向かう。

それで二三人雇われている奴らが向かってから漸くポンスが下りてきた。

「遅い」

「しょうがないでしょ！？ あんたが行ってから暫くずっと入れなかったんだから！」

「どうせ入るのを躊躇ったんだろ？ 雇われ組がお前が入って来るまでの間に来たよ」

「ウツ……そ、そんな事よりこれからどこに行くのよ！」

凶星だったらしい。

ごまかしやがった。

それよりももう少し修行を厳しくした方が良いのだろうか。もしかしてこの視線に気づいてなかったり……それはないか。

「どっちが良い？」

聞いたら、すぐに真面目な表情になって考える。

二方向を繰り返して見て、考える。

「こっち……」

「じゃ、そっち行くか」

ポンスが示した方向に向かって歩く。

とりあえずこちらの方向を見ている視線はまだある。

本当に低レベルな奴らだから、スペルでの攻撃とかはあまり心配しなくても良いだろう。

カードで攻撃される前にそのスペルカードを奪ってしまえば問題はない。

それに、ポンズの毒も交渉の手段にはうってつけだ。

「来た」

上から音がして、スペルで誰かが来た。

恐らくは 衝突 で俺達の所に来たのだろう。

ゴン達の所に行った後に来たのだろうか、原作で見た事あるような奴。

ま、どうせ俺達の後で旅団に殺されるだろうから覚えなくても良いか。

ポンズは敵がきた瞬間に“凝”をした。

修業の成果が出ているのだろう。

でも、ここがG Iだということを考えると、ブックをしないと威嚇にはならない。

取り合えず、キョウカとクリスと合流したら俺も元の世界に戻るかどうか考えるとしよう。

最近俺が本当にどっちを望んでいるのか分からなくなってきた。

まあ、二人が帰る時になったら決めるとしよう。

俺もこの世界に居たい訳じゃないし、何よりもネテロ会長が勝てなかったキメラアントに俺が勝てるとも分らない。

結局は主人公組が何とかしてくれるだろうが、それまでに俺が狙われないとは限らない。

ハンター協会から会長を空で運ぶ依頼がゾルディック家に蟻、実行するのは俺かジジイのどちらかだろう。

一応死にたくはないからな。

「ブックをしない所を見ると初心者プレイヤーか！」

とりあえず目の前の敵に専念するとしよう。

まあ、俺達の名前がばれるのは別にいい。

それよりも位置を知られるのはマズイ。

「追跡 オン！ ミルキを——」

「——遅い」

カードを奪い、そのまま背後を取って肉体操作してナイフよりも鋭くなった指先を首に当てる。

その時に指先のオーラを増やすのも忘れない。

「三秒やる。今ここで死ぬか、同行 を置いて行くかを決めろ」

俺が何の知識も持っていないと誤解した事が命取りだった。

そして、俺について何の情報も持ち合わせていないという事。

こいつ自身の力量としては天空闘技場で200階に到達しても勝てないというくらい。

ゴンやキルアにも劣る。

故にポンスにも絶対的に劣る。

同行 を奪ってから、敵が去っていくまでは油断はしない。

このゲームはスペルから逃れるにはスペルで対抗するしかないから、そこが面倒な所だ。

まあ、スペルを使われる前にカードを奪ってしまえば問題ないが……相変わらず危険な考え方してるなあ俺。

「じゃ、行くか。 同行 オン。 キョウカ」

「それマジで？」

「……うん」

キョウカの話をもとめたら、つまりはこういう事。

やはり転生者たちで元の世界に帰ろうとこのゲームをやっている奴は居て、それでもってそう言う奴らは既に居ないとの事。

つまりは、ゲームクリアをしたのではなく、そう言う類の念能力を開発した者が居て、報酬と引き換えに元の世界に帰ったのだとか。そんでもって、キョウカとクリスはこのゲームに残る事を決めたらしい。

何でも、このゲーム内にいたらキメラアントの心配もしなくて良いし、何よりも楽しいとか。

世界を渡る念能力を開発した者が居るのだとしたら、そいつは一流の念能力者であるだろう。

そういう能力で儲けようと思う奴が居るとは考えなかった。

確かにここに居れば転生者たちが集まるだろうし、一度現実世界に戻ってから貴重なものを持ってきてもらって、稼ぐ事も出来る。

ちなみに、キョウカとクリスが集めたスペルカードと指定ポケットのカードは全て貰った。

ここで二人で楽しく生活するからいらないとか。

実際に凄く楽しそうでした。

いや、もうホント同じ空間に居るのが申し訳ないくらいに。

ということで、俺もどうしようか考えて、帰ることに決めた。だけど……

「う……グスっ……」

何でか知らないけどポンスに泣かれました。

いや、何でか知らないというのは嘘です。

……何時の間にフラグ立てたの俺？

いや、俺は可愛い女の子の味方だよ？

ポンスは実際に可愛いから嬉しいことは嬉しいけど……どうしましようか。

いやー、モテル男はつらい！

冗談です。

いや、本当にどうしようか。

今でさえ抱きしめて頭を撫でてやってるけど、柄じゃない事をや

っているのは自分でも分かる上に、これが逆効果だという事も分かる。

この世界を離れるのならこれ以上ポンズの気を引くべきではない。

まあ、とりあえず異世界の話しだとか、なんだかんだをポンズに説明してからにするか。

「ということで、理解した？」

「分かんないわよ……ばか」

俺には荷が重いです。

俺の話を理解は出来るけど、理解したくないというのが心情だろう。

いやー……正直可愛いから残ろうか迷ったくらいで。

でも死亡フラグ残ってるからなあ……ここでポンズと楽しくやるのも死亡フラグのような気がするし。

とりあえずゴンがこのゲームをクリアしてくれるまで待つてるか……。

その間に俺の気が変わるかもしれないし、何よりも可愛い事過ぐすのは悪いことではない。

まあ、帰る時になって帰りづらくなったり、ポンズに可哀そうなことかもしれないが。

しょうがない。

彼女にはそれまでの間に俺が残る決意を固めるように頑張ってもらうとしてよう。

第十三話 グリッドアイランド（後書き）

くそっ。

いつの間にかポンスさんがヒロインしてて、主人公がフラグを回収してたから強制的に別れさせなければ。
無理矢理だ！！

第十四話 ポンズ無双（前書き）

な、なんてことだ……

第十四話 ポンズ無双

ポンズをゴン、キルアと引き合わせてからビスケの修行に混ぜてもらって数カ月。

とりあえずポンズはひたすら基礎能力と自身の念能力の向上に努めた。

そのおかげで一応は一流の使い手には成長した。

そして……俺もやばい事になりつつある。

何と言つか……染められてる感じ。

正直、女性経験など前世を通じても殆どないので、積極的にされるとやばい。

修行をすることなるべく暇な時間を作らないようにしているが、もしかしたら残る事になるかもしれない。

男は可愛い子には弱いのだと痛感した。

そうは言っても、年の差は約五歳ほど。

……まあ、俺が前世から通年で考えたら恐ろしい事になるし、念を習得した者は若さを保てるからあまり気にはしていないが。

それでも、俺にも理性とか、良心とか、道徳とか、そういう類のものがある……はず。

ロリコンではない。

断じて。

ただ、可愛い女の子を守り、俺が自分の傍に置いていただけだ。

そう、決して癒しを求める存在をぬこからポンズに乗り換えた訳ではない。

実際に、ぬこはいつも出しっぱなしだ。

そう、しな垂れかかってくるポンズが可愛いから骨抜きにされて

いる訳ではない。

多分……。

い、いや！

自信を持て！ 俺！

俺は決して女の子に尻に敷かれたり、骨抜きにされる男ではない！
むしろ女の子を骨抜きにするタイプだ！！

暗殺者だぞ！ 殺し屋だぞ！

女の子に免疫が無い訳……あるな。

というか今実際にこうしている訳だし。

これが原作キャラの魅力か！？

くそつ、そんな事を考えているからどんどんポンズの思惑通りになつてるんだ！

何か他の事を……そうだ！ 修行だ！ 修行の事を考える！

そう、俺の弱点はゾルディック家でも歴代で一位という格闘センスの無さ。

ということ、武術の達人であるビスケに組手の相手をして貰っている。

まあ、念なしだから敵う訳もないのだけど。

そして、俺が勝てないからということ、キルアはビスケの事をより信頼するようになってる。

兄としては複雑な所だが……まあ念能力者としては確実に五本の指に入るだろうからキルアが俺への尊敬を忘れることはないだろう。

でも、正直ビスケにばこにされてからぬことで回復しつつ、ポンズの介抱を受けるのは役得だと思っている。

膝枕とかやーらかいです。

ハンター試験以来、久しぶりにやってもらったけど相変わらず良い匂いだし、やーらかいです。

こうやって男は墮落していくんだろぅなあと。

俺には勿体ないくらいに良い子です。

本当に良い相手を見つけてもらいたい。

何だか少しだけ親の心境。

でも動物というのは不思議なもので、生存本能として種族を反映させようと自分の子供を作ろうとするのです。

……何が言いたいのかと言えば、つまりはこう……凸と凹がぴったりはまる、みたいな？

全国のポンズファンの皆様、大変申し訳ありません。
食っちゃいました。

だってよお！ あんな表情で迫られて何処の男が拒めるって言うんだよ！

っーか拒める奴がいたらそいつは間違いなく男ではない！
宇宙人が、若しくは同性愛者のどちらかだ！

……って何時の間に修行の話からポンズの話に戻ってるんだ？
それだけ毒されているということか……。

流石は毒の使い手。

師匠として弟子が順調に育っているのは本当に喜ばしい事です。

「ねーミルク……？」

無視だ無視。

これはわなに違いない。

振り向いたらその瞬間、俺は喰われることになる。

そう、俺の胸の上で艶めかしく動いている手とかに反応してはいけない。

“絶”だ！ “絶”を使えば耐えられるはず！！

あ、いや、この場合は心を静めるんだから“纏”か？

「だーい好き♪」

「グボハッ！」

な、何という威力だ……思わず意味不明な声を上げてしまった。
いや、今のも仕方がない。

だって後ろから抱き疲れて耳元で言われたんだぞ！？

誰が今の攻撃を耐えられるんだよ！

だが……！！

俺は耐えて見せる！！

「……ちえっ、ダメだったか」

腹黒い、腹黒いよこの子！

危ない所だった。

今に乗ってたら間違いないで喰われてた。

ああ、断言できる。

俺が喰う前に喰われてた。

「……恋人の気を引く操作系の能力でも作ろうかなあ」

何いつ……！！？

俺はそんな事をさせる為に念を教えたんじゃない！

「ポonz！ そんなことは——」

「もらーいっ♪」

「はっ！ しまつ——うむっ！？」

くそっ！

振り返った瞬間に唇を奪われるとはっ！

……断じて見逃した訳ではないからな！？ 避けられなかったんだからな！？

いや、そんな事よりも問題はこの舌使い。
やばいって。

あ、何だか気持ち良く……ってダメだ！

気をしっかり持て！ 俺！

これがポonzの策略だ！

俺は年下の女の子の良いようにしてやられる男ではない！
たかがキスくらい俺にしてみれば屁でもない——

「はむ……む……ぷはっ……ふふっ♪ 気持ち良かった？」

——訳もない。

この妖艶な笑い方……。

よかろう！ 戦争だ！

「ふははは！ ポonz！ 俺をその気にさせるとダメだということ
をその身をもって体験させてやろう！」

「喰われた……」

いつの間にか流されてた上に、いいようにしてやられた……。

しかも隣ですやすやと寝ているこの娘、俺から散々に搾り取ったから肌がつやつやしてる……。

納得がいかない……年下の女の子で、しかも弟子に負けるってどういう事！？

俺には念能力しか才能が無いとでも！？

確かにそれ以外の才能が思いつかないけど……。

正直複雑な気分です。

可愛いんだけど、一度決めた元の世界に戻るといふ決心が鈍る。

というか俺ってそんな決心したんだっけ？

ああ、もう！ 何が何だか分からなくなってきた！

何で俺がこんなに悩まなくちゃいけないんだ……。

まあ俺が考えるのが苦手だということは認めても、そこまでバカではないはずだ……多分。

ということ、日時は数日経った。

あ、数週間かな？

まあ、そんなことはともかく、今はキルアやゴンとは別行動をしています。

何故かと言えば、ゴン達が指定ポケットのカード集めを始めたから。

ということで彼らが指定ポケットを集めている間に修行を続けている訳だが、何て言うか……俺も随分とチートだわ。

これまでの修業の成果で、なんとなくだけどあり得ないほどに強くなっていることは分かる。

近接戦闘もそれなりのレベルから、ジジイや親父と渡り合えるだけのレベルにまで成長しただろう。

それよりも、念の成長がおかしい。

鍛えに鍛えて超一流の域に達したと思っていたが、どうやらまだ成長できるようだった。

オーラ量がここに来てまだ増えているのだ。

この分なら、全ての系統を100%を鍛える事も出来るのではないかと錯覚してしまったほどだ。

まあ、念の特性からして全ての系統を極めることは不可能だが。それでも、現段階で強化系と格闘戦で勝利できるほどのオーラを有し、かつ使う事が出来る。

攻防力のオーラ移動もそうだし、念に関してだけ言えば、自分でも間違いなく天才だと断言できる。

「で、これはまた厄介な相手だ……」

目の前に居るのは旅団のメンバー。

出会ってからG Iに居るのだということを思い出した。

正直、油断していたと言うほかない。

そうでもなければわざわざ旅団とかち会ったりはしない。

先に逃げる。

いくら俺が念に関してまだまだ成長しているといっても全員相手をするのは疲れる。

——“練”

とりあえず戦闘態勢を取る。

隣では超一流の念能力者を前に、ポンズも戦闘態勢に入っている。流石に分が悪い。

俺一人なら相手に出来るだろうが、ポンズを守りながらだと考えると難易度はかなり上がる。

『百式観音』で一気に叩き潰す事も考えないではない。

だが……原作メンバーを殺してしまうことは影響を与えすぎる。

威嚇に留めておくべきだ。

「殺したくはない……俺の視界に入るな」

殺気を開放し、“練”で作ridすオーラを最大にする。

何時でも反応できるように、ギアをマックスに入れ替える。

「おい……喧嘩売ってんのか？」

どうやら喧嘩を売っていると取られたらしい。

それでも結構マジで言ってるんだが。

「そう取られたのなら謝ろう。かなり本気で言っている。……まさか俺の事を知らないのか？」

「はあ？ 誰だてめえ？」

なるほど、俺の事を見てもいきなり襲いかかろうとしなかったのは俺の事を良く知らなかったからか。

「なら自己紹介といこう。ミルキ・ゾルディック。お前ら旅団の前の8番を殺し、この間は依頼でクロロ・ルシルフルと戦闘した者だ」

ゾルディックの名前を出しても引き下がるところか、怒気が増したのは流石。

それでもって、俺と戦うとか団長から言われていないのだろうか。

もしかして団長にとっては俺が忠告をするに値するほどの戦闘力を有していなかったのか？

そうだったらいくらなんでも自信を無くすが。

「本当に知らないのか、そのところ、どうなのか教えて欲しいものだ……カルト」

そう言えば旅団の4番になるんだっけ。

随分と原作の事も忘れていたものだ。

「……お兄様と戦う気はない。まだ死にたくないから」

随分と賢い子に育ってくれたみたいで、兄としては嬉しい限りだ。それはともかく、ならばさっさと消えてもらいたいのだが。

「なら、何の用だ？」

「……お兄様、除念を使えない？」

なるほど、クロロの除念が目的か。

つまりは俺がコピーした念能力の中に除念の能力が無いか、というところか。

確かに除念が出来ない訳ではない。

『無限の剣製』を使ってルールブレイカーを使えば。

だが、その為にはここから出て行かなければならない。

そして元の世界へと飛ばしてくれる念能力者はここに居るのだから、戻ってくるまでの間に所在がつかめなくなったら困る。

「使えない訳ではない。が、使わない」

「デメエ……今ここで殺されてえのか？」

「それはこちらのセリフだ。お前らがそこから俺の許可なしに一步

でも動いたら戦闘開始の合図とみなす。死にたくなかったら動かないことだ」

今ここで俺が逃げても後を追ってくるかもしれない。

俺の居場所をカルトの能力で掴む事が出来たのだから、除念師の居場所もすぐに分かると思うがあと後面倒にならない為には今ここで俺がダメだということを認識させる必要がある。

こういう頭を使うことは苦手だっていうのに……まったく面倒だ。

——『百式観音』

「だから動くなと言っただろうに……一度目は警告だ。二度目はないぞ」

おそらくスピードに自信のあったであろうフェイタンが妙な動きを見せたのでその瞬間に能力を発動させた。

殺してはいない。

かなり遠くまで飛ばしただけ。

「分かった。御免なさいお兄様。別の除念師を探す」

「物分かりのいい奴は好きだ。ポンズ、やらなくて良いぞ」

驚いた。

まさか旅団相手に“隠”を使って念蜂を待機させていたとは。

俺は能力を使ったから気がついたが……やはり相当に強力な能力だ。

旅団が俺に気を取られていたとはいえ、完璧な“隠”だった。弟子の成長は嬉しいものだ。

……こっち方面限定で。

第十四話 ポンズ無双（後書き）

やはり俺には甘々なものを書くことしかできない。

……でもリリカルになったらアリサはツンデレだから何とかしてくれるはず！！

第十五話 ドッジボール（前書き）

ポンズの部分とドッジの部分、かなり無理矢理。

第十五話 ドッジボール

今更ながらに気がついた。

俺が別にポンスの事を好いている訳ではないということに。

……いや、これ結構マジで。

前世からの女性経験を合わせて付き合うという事が無かったので、女性を好きになるという事が分からない。

いや、好きになるという事が分からないということではない。

それは俺がポンスの事を好きだということではないということでは分かってる。

こう、何というか……そう、恋愛というものが分からないのだ。

確かにポンスの事は好きか嫌いかで言えば好きだ。

弟子だし、守りたいとも思う。

だけど、それが決め手でこの世界に残りたいとも思わない。

しかし、何としても元の世界に戻りたい訳ではない。

自分でも何がしたいのか良く分からないけど、元の世界に戻ったら何か楽しい事が待っているような気がする。

直感だ。

それ以外の理由はない。

でも、念能力者にとって直感は大切にすべきものだ。

それは自身の強い思い入れと関係している場合が多い。

ということだ。ポンスにその事を話した訳だが……いやー。

思いつき殴られた。

そして泣かれた。

罪な男、ということを自覚している訳ではないが、客観的に見たらそうなるのだろうか。

一時間ほど殴られ続け、今は漸く気が収まったのか、ポンズは俺の腕の中で静かにしていてくれている。

「ばか……ばか……ばかっ」

「ごめん」

何でこんなラブコメみたいな展開になっているのか良く分からないが、とりあえず謝らなくてはいけないので謝っている。

思えばハンター試験の四次試験。

あそこで洞窟に入っただのが間違いだったか。

「ぜったい許さない……一生忘れてやらないもん」

可愛い。

相変わらず可愛いとは思うが、好き、というのとは少し違う。

一步引いた所から、そう、例えば兄や親のような感じ。

兄にはなっただけど親には未だなっただ事が無いから実際はどういうもののなのか分からないけど。

「すまん」

とりあえず抱きしめているのが不味いのかと思うけど、離そうとしたら身体を逆にくっつけられたからそのままにしている。

誰かに本当に執筆してもらいたい。

女心を理解する方法。

「……もう良いもん。あんだなんかよりずっと良い人見つけてやる

もん」

拗ねてる……のか？

いや、違う。

やっぱり分からない。

「そうしてくれ」

幸せになってもらいたいものだ。

可愛い女の子の味方のつもりで居るので。

というかそのスタンスがフラグを立てることになった原因なのだろうか。

今でもポンズに好かれる理由が分からないのだが。

「ぜったい後悔させてやるもん。こんなに可愛い女の子、逃したらもうチャンスは二度と無いんだからね？」

立ち直るのが早いものだ。

いや、から元気かもしれないけど。

「んっ。ほらっ！」

「何？」

「最後にキスしてあげる」

「して欲しいの間違いじゃないのか？」

から元気、だろう。

だから俺もおどけるように言っ。

「うるさいわよ。こんなに可愛い子がキスしてあげるって言ってるんだから素直にされなさいよ」

しょうがない、などと意味不明なことをつぶやきつつ距離をゼロにする。

それでもって、その感触が消えたと思った瞬間には姿が消えていた。

離脱 を使ったのだろう。

これから先は幻獣ハンターとして活躍するだろう。

もしかしたら、ポックリと一緒に仕事をするのかもしれない。罪拭いではないが、ここで強くできるだけ強くした。

キメラアントが相手でも勝つか逃げるかは出来るだろう。そう信じたものだ。

「止め止め。何感傷的になってるんだか」

それよりも、先ほどからの視線が気にかかる。

ポンスに叩かれていたあたりからか。

距離はさほど遠く無いが、“絶”を使っている。

「キルア、覗き見は感心しないぞ」

「ばれてた？」

そう言いながらキルアが出てくる。

「兄さんもやるなあ……女泣かせだったなんて知らなかったよ」

俺も知らなかった。

というか、キルアにも別れの挨拶くらいはした方が良いでしょうか。

まあ、俺を探すということはしないだろうが。

「で、何の用だ？　俺はこれから旅に出て音信不通になる予定何だが」

こう言うておけばゴンがジンを探すようにキルアが俺の事を探すという事はないだろう。

そう信じたい。

「兄さんに頼みがあるんだ」

告げられたのは一坪の海岸線を手に入れる為に協力してほしいとの事。

レイザーのイベントでスポーツを何か担当して欲しいとの事。

チエケラツチョが既にいるから俺はもしかしたら忘れられていたのかもしれない。

それはそれでショックだが。

それにしても、ヒソカに会いに行かなかったのだろうか。

あ、もしかしたら俺が居ることの影響でヒソカの代わりになっているのかもしれないか。

まあ、俺がキルアの為にしてやれる最後の事かもしれない。

引き受けてやるとしよう。

レイザーのイベントが始まり、相撲担当の敵がレイザーに殺されてから漸く目的である所のドッジボールが始まった。

ヒソカの代わりだからリフティングでもやるのかと思ってたけど、またしても流れを覚えてなかったみたいだ。

それよりも、レイザー、流石だ。

この中でも念能力者としては一流だろう。

ゴン、キルアは未だ遠く及ばない。

ビスケ、チエケラツチョ——あ、そう言えばツエズゲラって言うらしい——がどうにかして対抗できるかという所。

恐らくはジンに雇われてから修行を怠らなかったのだろう。

「ルールの説明をする——」

俺がヒソカの代わりに入っているということは、気を付けていなければいけないのは最後までアウトにならないようにする事。

そして三人でレイザーの弾をキャッチする時に弾を覆う役をする事。

後は何かあっただろうか……まあ、ゴンとキルアが残るようにしていれば何とでもなるだろう。

いざとなったら一人で全部片付ければ何とかなる。

「片手で止めやがった!」

これはゴレ……ゴリラが念獣を入れ替えてアウトになる。
内野に残っている味方の中で関係ないのはツエズゲラ。
考えている間に高速のパスが始まる。

「ツエズゲラ！」

「後ろ！」

ゴンとキルアが警告を飛ばして、彼がとつさにオーラを背中に集中させる。

が、この試合ではもうダメだろう。
残ったのはゴン、キルア、ビスケ、念獣。
段々と思いだしてきた。

「ミルキさん」

「分かった。ボールを」

——『バンジーガム』

ヒソカの能力でボールをキープしたままで敵にぶつけて行く。
そしてキルアの質問でレイザーを最後にすることが決まる。
どの程度の力を出せばいいのかは分からないが、とりあえずヒソカ
くらいの力で投げたら6と7が合体して13になって俺の弾を止めた。

……バンジーガムが取れない。
仕方ないから剥がすか。

「あんなのアリかよ!？」

「アリです」

ま、未だ手段は残っている。

が、問題なのはレイザーの手にボールが渡った事。

ゴンとキルアが“堅”で構える。

ここは確か……。

考えている間にレイザーの手からボールが放たれて“硬”でゴンが受け止める。

そのままボールが天井にめり込み、ゴンは場外へと吹き飛ばされる。

それにしても良く“硬”を使おうと思うものだ。

真正面からあの球を受け止めようと思うことは称賛に値する。
ここでの経験はゴンにかなりの経験値を与えているのだろう。

「ゴン、気休め程度にでもぬこを頭に当てておけ」

ぬこを出してゴンの傍に行かせる。

とりあえず、気休め程度にでも回復はするだろう。

傍にいるのならクランプカの能力で回復させてやるのだが。

まあ、ないものねだりをしてもしようがない。

そして試合は進んでゴリラがアウトになって残りの内野はキルアとビスケになる。

「さて、と。次は——誰かな？」

この回転は……シュートか。

ならばキルアを狙っていると見せかけてこちらに曲がるはず。

「曲がりすぎだ！」

ビスケが避け、俺も避けたがこの曲がり方は予想していなかった。
どんな投げ方をしたらこういう風に曲がるのか。

「ミルキさん！」

ゴンからの警告が体育館内に響き、曲がったボールが外野から俺
に向かってそのまま放たれた。

取りこぼしはマズイ。

そして、こちらのボールにした方がやりやすいことは確かだ。

——『バンジーガム』

この能力、便利だ。

取りこぼさないようバンジーガムをボールに張り付け、ガムの性
質で手にくっつける。

威力が高いことはあらかじめわかっているので、攻防力の移動を
瞬間的にやって手と足にオーラを集める。

手だけではだめだ。

ゴンの二の舞になる。

だから、踏ん張れるように足にもオーラを集めた。

案の定拙い作戦が功を奏して何メートルか床を滑ってそのまま受
け止める事が出来た。

だが、凄い威力だ。

強化系でもなければこれを受け止めることは難しい。

そしてビスケは衣服も身体の一部とみなされてアウトを宣言され

た。

残ったのはゴン、キルア、俺の三人だけ。

作戦を立てているが、どうやらゴンは完璧に勝ちたいらしい。作戦も何もないが、思い出した。

キルアがライン前に立ってボールを持ち、ゴンがそれを“硬”の拳で叩く。

俺なら攻防力の移動で自身の怪我なしに砲台の役割をする事が出来るが、それではゴンも全力を出せないだろう。

「最初はグー……じゃんけん——グー!!」

オーラが跳ね上がった。

流星は天才。

今のオーラ量は中堅ハンターくらいはある。

が、今のままではレイザーをアウトにすることは出来ない。

「さらに上がるか……」

流星だ。

オーラ量がツエズゲラを越えた。

念は思いによって力が変わる。

強化系が戦闘において強いと言われているのはヒソカの性格分析にもあるように一途だから。

それだけ思いが強いのだ。

が、それでもレシーブをされて威力を弱めて受け流された。

「逃げるのと取るのだけじゃないってことさ。ま、参考にはならないと思うがね」

「凄い！」

が、甘い。

「バンジーガム！ 兄さんナイス！」

その通り。

ヒソカ的能力は本当に応用が利く。

ボールは俺がキャッチして一応数の上では形成が逆転した。

俺が簡単にレイザーを仕留めても良い。

だが、それでは二人の経験に蓄積されない。

まあ、念人形は当ててやろう。

「ナンバー2、アウト！」

あ、バンジーガムを付けておいた方が良かったか？

でもキルアの経験の為には三人で本気の弾をキャッチする必要がある。

そのままタイムアウトで角の方に移動してからキルアの手を全員が見つめる。

忘れていた。

ゴンの弾を持っているから酷い事になっているんだった。

「もう一球くらい大丈夫だよ！」

「アンタが弾を持ってやれ！」

ツエズゲラが俺に対して言うが、それはお門違いというもの。

この世界はこの二人を中心にして回っているのだ。
俺が手出しをすることではない。
それにこのゲームはジンがゴンの為に作ったもの。

「キルア、ゴン。お前らが決めろ」

「俺……分かってたんだ。キルアの手の事、分かってた」

ならば良し。

勝てなかったとしても俺が決めてやろう。

それにしても、キルアの友達そして最高だ。

思い残すことはない。

俺が居ることでは何が変わったという事もないが、それでも俺なりにやってやれることはやってやった。

ゴンが先頭で、キルアが真ん中で、俺が一番後ろで合体。

念で作られた人形が全てレイザーに還元されてオーラが増える。

次が本当の全力という訳か。

確か次はバレーのスパイクを打ってくるはず。

なら、取りこぼしを防ぐためには下方向に重点を置きつつ、横にも注意を払うべき。

二人はこの後の攻撃がある。

あまり無理をさせるべきではない。

ならば、出来る事なら負担を減らすべく俺も積極的にボールを掴んで踏ん張るべき。

二メートルほど後ろに下がってしまったが、ゴンはボールを止める事が出来た。

後は二人が決めてくれるだけ。

「全部出し切ってこい。ダメでも何とかしてやるから」

「オッス！ もっと、威力を……もっと！」

流石。

この年にしてこのオーラなら間違いなく天才の中の天才。
流石は主人公。

「最初はグー……じゃんけん、グー……！」

全部出し切ったか。

打ち終わってからレイザーがまっ正面にレシーブして、それを避けるように倒れた。

「完璧に勝つ、か」

怪我はしていない。

貢献してやろう。

——“練”

超一流の念能力者としての意地がある。

何もしないというのは性に合わないし、何よりも完璧に勝つ事が二人への手向けになる。

構えて“練”から“硬”に、オーラを全て右拳に集中させる。

完全に原作を思い出した。

確かここでヒソカはバンジーガムを使ってゴムの反動でアウトにさせるんだ。

が、完璧に勝つなら完膚なきまでにたたきつぶすべき。
死ぬことはないだろう。

「ハアッ！！」

“硬”の拳をそのままボールに突いて、来た方向に返す。
威力は二倍になったはず。

その証拠に、いつては何だが俺の拳も確実にやられた。

「真っ向勝負か！ 面白い！」

そのままレイザーを襲ってレシーブされる。
が、右拳が使えなくても左拳がある。

ゴンと同じように、使えるオーラをすべて出し切るつもりで集中させる。

足を床にめり込ませて踏ん張りを付けさせる。
そして再度同じように殴った。

「最後の一球だ！！」

文字通り、死力を尽くした。

それがレイザーにあたって、レシーブが不完全なままで——完全に受け切る事が出来ずに彼はアウトになる。

完璧な勝ち方としてはこれ以上のものはないだろう。

おかげで俺も両拳をやってしまったが。

しかもどうやら意識を失いそうになっている。

オーラを使いすぎた。

キルアが駆け寄ってきているのが視界の端に入っている。
傾いているという事は倒れている途中なのだろう。

たかがスポーツに本気になりすぎだ。

勝つ方法など真っ向から勝負する以外だったらいくらでもあったのに。

ああ……

第十五話 ドッジボール（後書き）

相当な無理矢理だ…… また叩かれるんだろうなあ。

だが後悔はしていない。

これで後腐れなく主人公をアリサとくつつけられる……はず

第十六話 ようこそリリカルな世界へ（前書き）

でも魔法はまだ出てこない

ちなみに今日の投稿はこれで最後。

書き溜めしてたの全部なくなっただ……

第十六話 ようこそリリカルな世界へ

確かに、確かにだ、面白い事になった。

念能力者にとつて大切にすべき直感、それに従つた結果、普通では体験できないような結果になった。

あ、ちなみに何の話をしているのかと言えば、つまりは元の世界に戻ろうとしたのだが……目が覚めたら、身体が縮んでしまつていた。

工藤新。が生きていると奴らにばれたら、また命を狙われ、周りの人間に——つて違う。

そつという話ではない。

とりあえず俺も何が何なのか分からないので状況を整理してみようと思う。

まず、周りの状況から見るに、ここはハンターハンターの世界ではない。

とりあえず世界を渡ることには成功したのだろうが、元の世界ではないらしい。

何よりもそれは俺の生まれ育つた街が無い事が如実に示している。ちなみに、俺の生まれ育つた街の代わりには海鳴市、という地名の街があつた。

そこに行つてみた訳だが……ブック。フで立ち読みをして時間をつぶしていたらハンターハンターの漫画が無い事に気がついてしまった。

何で立ち読みをしに言つたのかは聞かないでほしい。

でもって現在困っていることは、現代社会に近しいこの世界において戸籍がない事。

そして金を持っていない事。

幸いにして宝石は持っているが、この身長では金に替える事も出来ない。

何故か知らないが、どうやら身体が縮んでしまったらしく、今の俺は小学生くらいの身長しかない。

ちなみに身体の具合を確かめたらどうやらそのまま縮んでしまったような印象を受けた。

トラックを動かす事が出来たから。

生きて行くことは出来る。

どうかそこらへんの山にでもこもれば何とかなるだろう。

問題は保護という名の観察処分を受けて孤児院に連れ込まれてしまう事。

これでは身動きが取れなくなる。

戸籍を手に入れるには金で買えばいい……と思う。

多分裏社会専門のような所があるから、そこを発見する事が出来れば何とかなるだろう。

そして金を集めるにはどうすればいいのか。

考えても思いつくことは一つだけ。

そう、この技能を生かしてのミルクとして、仕事を受け持つ事。

上手く裏の奴らに引つかかる事が出来て、そこから芋づる式にマフィア社会にでも通じる事が出来れば暗殺者として名を馳せる事が出来て依頼も増えるだろう。

念は使える。

どういう原理で身体が縮んでしまったのかは分からないが、まあ異世界に行く念能力なんて不完全なものが多いのかもしれない。

とりあえず立ち読みで時間は潰したから今から怪しそうな所をめぐって行こう。

幸いにして怪しい場所を見つける鼻は効く。

まあ生粋の暗殺者としての教育を受けているのだから当たり前だ

が。

ということ、小さくなくても頭脳は同じ、迷宮ばっかりの迷探偵。

真実はいつも一つ！

やあ、皆のアイドル、ミルキだ。

嘘です。

調子に乗ってごめんなさい。

とりあえずそれらしき人物を発見して後を付けてみたら運よくマフィア——じゃなくて殺し屋を発見する事が出来た。

そう言えばマフィアって言うのはイタリアの組の事らしい。

日本では極道或いはやくざというのだから。

勉強になる。

それはともかく、殺し屋さんの後に付いて行って俺を雇ってもらおうと思いいしてみたら鼻で笑われたので色々と脅してやりま

した。

まあ、手軽な所で指を折ったりだとか、爪を剥いだりだとか。そうしたらすぐに手のひら返して彼に仕事を紹介してくれる人を紹介してくれました。

ということとで初日から実力を見るとか何とか言われて今は仕事の真っ最中です。

ターゲットはどこかの組織を裏切ったらしい男。別に直接手を下す必要もないので、『忠実な働き蜂』で爪と指の肉の間の部分をちよいと刺して終わりにしました。

毒殺されたという事が気付かれても、そこを刺しておけばどうして毒を盛られたのかが分からないのです。

ちなみにその男はパーティー会場に居たんですけど、俺はこの身長で入る事が出来なかったので“円”との併用でした。

意外と疲れた。

それはともかく雇ってもらえる事になったので、俺の提示した条件とあちらの提示してきた条件を合わせて俺が受け持つことになった仕事は暗殺。

しかも裏に関わった事のある人間だけ。

流石にゾルディック家でもないのに無闇やたらに人を殺してたら恨まれ度が半端ない。

あれは伝説の殺し屋一家として恐れられていたからできたことだ。ちなみに、俺が紹介してもらったのは運よく、裏の仕事には罪がある場合にしか手を出さず、殆どは表に関わる仕事らしい。

警察が手に負えなくなった相手だったり、どこぞの重要人物を影から護衛したり、ひっそりと後を付けることだったり。

表の仕事を手伝う事もあるけど、やはり誰もが手に負えなくなつた奴の暗殺という依頼が俺の仕事だ。

何よりも報酬が高いし、誰からも恨まれる心配が無い。

一応戸籍が無いと飛行機とかで移動が出来ないということで、戸籍は作ってもらった。

名前はミルキ・ゾルディックのままで、仕事で使う名前はイルミ。兄貴の名前を借りた。

そして、兄貴の名前を借りた所で思い出した。

兄貴の能力で身長を変えられるではないか、と。

ということでは仕事の時には姿を変えるようにしている。

最も仕事が多くなると入ってくる訳ではないが。

だって紹介所に仕事はそんなになんて言われたし。

ということでは本格的に活動を再開するのはもう少し後になってからになりそう。

あれから数カ月が経った。

仕事を着実にこなしていく中、俺の人生の分岐点と思われるイベントがこちら。

え？ 中止？

ターゲットを殺そうとした直前に電話が入り、それは緊急用だったので取ってみたら中止と言われた。

久しぶりに俺も肉體操作を使ってやろうと思っていたので、手はナイフよりも鋭くなつてターゲットの首に突き付けたまま。

で、理由は？ はあ？ 間違えた？

間違えたとかありえない。

この仕事に間違えたというのはあつてはならないことだ。

「ということでオッサン、良かったな。依頼が中止らしい」

俺はターゲット以外は殺さない主義なので、ターゲットの護衛をしていたSPと思わしき方々は気絶させてある。

“絶”を使って背後から手刀で一閃するだけで気絶してくれるからこの世界での仕事は楽だ。

相手が念を使ってくる訳でもないし。

「じゃな。こいつらは後二三時間もしたら目を覚ますと思うから」

といいながら俺はその屋敷を去った訳なのだが……。

まあ、ここまでが俺の人生を転換させることになったであろうイベント。

でもって、それが決定的になったのがこちら。

ダイジェストでお送りしよう。

俺が紹介所から呼び出されて依頼を受けようと思つたら、どうやら専属契約のお達し。

そう言うことはまれにあるのだが、その方が金はたくさん手に入る
ので俺はすかさずその話に飛びつく。

そしてその話を持ってきた人物はこの間依頼が中止になって直前
で殺すのを止めた相手。

ちなみに専属契約の内容はオッサンの家の隣に住んですぐに動け
る体制になっておく事。

主な依頼内容は殺し屋からの護衛。

ということでは俺は晴れて一軒屋を手に入れて普通の生活を送るこ
とに。

ちなみに今日は具体的な内容を詰めるということでオッサンの家
にお邪魔しています。

何と言うか……広い。

っーかあり得ない。

ゾルディック家ほどではないが、ヌメーレ湿原くらいの広さはあ
るのではないだろうか。

いや、ヌメーレ湿原がどのくらい広いかは知らないけど。

今の状況から推測できる事、それはこの家の持ち主、すなわちオ
ッサンがかなりの金持ちである事。

いや、その通りだろと思うことなかれ。

ただの金持ちではない。

この家は別荘代わりに所有しているのだそうで、本宅はアメリカ
にあるのだとか。

俺を案内してくれた執事長の話によれば、世界でも十本指の金持
ちらしい。

恐るべし、オッサン。

ちなみに門を通ってから家までは車で向かった。

門から家までの所要時間は十分ほど。

まあゾルディック家には遠く及ばないがかなり広かった。

ということでオッサンから下された依頼は護衛。

しかもオッサンではなくオッサンの娘の護衛らしい。

まあ、護衛といっても俺レベルの使い手はこの平和な世界にはいないだろうし、門をくぐってしまえば優秀らしいSPが付いているので学校の行き帰りだけだ。

というのも俺が専属契約を結ぶにあたって本当の名前と姿を見せたらそう言う依頼に変わったのだ。

本来の姿が小学生というのは驚かれた。

まあ不思議ではないが。

それよりも問題は本当にこの家にいるSPが優秀なのかということだ。

俺の感覚からすれば拙すぎて不安だ。

まあ、依頼は学校の行き帰りまでを無事であるように影から守る事。

その為に偽証した戸籍もオッサンの権力で確かなものにして貰って娘さんと同じ学校に転校という形で行くことになった。

殺ではなく護衛という依頼はやった事が無いが、まあ何とかなるだろう。

「じゃ、娘さんの――」

「何！？ 誘拐だ！？」

依頼内容についての話が終わったからさっそくオッサンの娘の写真でも貰おうと思ったのだが、執事らしき人が入ってきてあわただしくなった。

どうやら件の娘さんが誘拐されたらしい。

いやー……話題に事欠かないオッサンだ。

というかそんなに簡単に誘拐されたのだろうか。

まあ、そんなことはないはずだと信じたいものだ。

ちなみに、俺の話をそっちのけで身代金を受け渡す話になっている。

「あー、娘さん取り返しでしょうか？」

「何！ そんな事が出来るのかね！？」

「ま、一応プロなので。地図ありますか？」

確かクラピカ能力の中に地図からダウジングで探す方法があった。

それを使えばどこにいるかは分かるし、範囲内に入れば“円”だけで状況を全て把握する事が出来る。

念能力で居場所を特定する訳だが……どうやってごまかそうか。

まあ俺にしかできないとか何とか言っでごまかさなくても良いかもしれないが。

それでもダウジングを信用してくれるか？

あ、でも俺が普通に行けば問題ないか。

どうせ車よりも走った方が早いし。

「ここ、ですね。娘さんの写真……なくても分かるか。ということで行ってきます」

護衛が依頼なのに初めての仕事が誘拐された娘を取り返しに行くとはこれいかに。

とまあそんなことはともかく、海鳴という街はその名前の通り海に面していて、そのあたりにはなんだかんだ色々なものを入れる倉庫があるのだが、その一角に物騒な集団を発見。

地図を貰ってからここまで実に五分。

何と言うか事が上手く運びすぎているような感じがしないでもないが、まあこれがご都合主義という奴なのかもしれない。

とまあメタ発言は置いておき、とりあえず“円”で確認したところ、武装している集団は全部で15人。

二人が入口の前で、三人が別の倉庫の上で見張り、五人が徘徊していて、残りが倉庫の中に居るという基本的なフォーメーション。

まあ、持っている銃器から見るに確実にプロの犯行。

セオリー通りに動くのなら監視役の二人を倒してから徘徊している五人を倒し、さらに入口と続く訳だが、どうやらそんな事をしてる時間も無いようだ。

というのも動きが急に変わったってきた。

ここから移動するのか、或いは身代金を誰かが引き取りに行くのか、はたまたオッサンが俺の事を信用して金との引き換えを拒んだか。

まあ、どちらにしても迂回は面倒だから正面から突破して返してもらっただけだ。

一応この身体で“堅”をしてたら銃弾ごときでは身体に傷一つ付けることは出来ないから。

「ということでお邪魔しまーす」

いやー、入口の二人は速攻で気絶させてドアを剥がして中に入っただが、どうやらプロだというのは当たっていたようで「誰だ!」とか聞かれる事もなくいきなり撃たれました。

ま、効かないけど。

それでも強化系ではないからバズーカあたりになるとちよつと心配だ。

旅団のゴリラは対戦車用バズーカを喰らっても少し痛いので済んでいたが……対戦車用はちと荷が重い。

「ちつ！ こいつ銃が効かねえ！」

「手榴弾持って来い!!」

日本の警察の諸君は何をやっているのだろうか。

いくらプロが相手だといってもこんなに簡単に銃器とかその他武器が手に渡っても良いものなのか？

っていうか俺、銃が効かない事を驚かれていないのだがそういう人種はこの世界では珍しく無いのだろうか。

ま、驚いてもすぐに対応するというのは殺し屋を営む者なら誰でもやっていることだが。

「で、君がオッサンの娘で間違いない？」

うーん……気絶してる。

ま、これだけ激しくドンパチやってたら仕方ないか。

というかこれは全員殺しても良いものなのだろうか。
処理の云々はオッサンが何とかしてくれると思うが。
まあ手間を増やすのもどうかと思うし、全員気絶させておくくらいで良いか。

「——つとこれで全部だな」

約五秒で倉庫に居た人間を全て気絶させてから“円”で周囲の状況を確認する。

敵は残っておらず、ターゲットは無事。

外傷は見当たらないからどうやら何もされることなく間にあったのだろう。

——『龍頭戯画』

能力を発動させて空を飛んで帰る。

途中でターゲットが起きないか心配だったが、まあ起きることなくオッサンの家に到着したから大丈夫だった。

第十六話 ようこそリリカルな世界へ（後書き）

ようやくリリカルになった。

ここまで長かった……。

それだけに早く終わらせようとして今までを無理矢理にやり過ぎた。
ゴメンナサイ。

さあ！ アリサ！ 待っている！
俺が攻略してやるっ！！

第十七話 転校生ミルキ（前書き）

ちよつと更新が遅れました。

第十七話 転校生ミルキ

「親の仕事の都合で転校してきたミルキ・ゾルディックだ」

転校生の自己紹介というのは盛り上がるものである。

それも日本の学校に名前からして外人の奴が転校するのだから自然、注目を引くことになる。

今まで言及してこなかったかもしれないが、俺はキルアと同じく銀髪だ。

親父の血を引いているからだろう。

一応、イケメンの方に分類される自信はある。

まあ小学生の中では恋愛の類はないだろうし、何よりもそれなりに年を経なければ精神年齢的に恋愛対象ではないが。

中の人的には俺は既に40に差し掛かっている。

まあ、具体的な数値はともかく、同年代はロリコンと呼ぶに相応しくなってしまう。

肉体と精神の関係から多少なりとも精神が肉体に引っ張られているようにも感じるが。

それはともかく、オッサン——ラビット・バーニング氏の娘は無事にオッサンに引き渡した。

空から応接間の窓に降り立ったから驚かっていたけど、俺の事だからということでもアリになった。

適応能力の高い人だと思う。

だからこそ大成したのだろうか。

それはともかく、娘のアリス？ だっただかには顔を見られていないから大丈夫だ。

本人は人質に取られてから特殊部隊に救出されたとも思ってい

るだろう。

万が一に、顔を見られていたとしてもそれは兄貴の能力で兄貴の顔そっくりになっていたので俺だとはれることはない。

そのアリスとはオッサンの計らいで同じ学校かつ同じ学年かつ同じクラスに相成った。

転校生の自己紹介からそのまま質問タイムとなって、昼休みに質問攻めにされていた所をアリス嬢が助けるようにクラスをまとめていたのは記憶に新しい。

恐らくこのクラスにおいて学級委員的なポジションなのだろう。

小学生というのは活発な生き物だ。

その勢いはとどまるところを知らない。

俺も質問攻めで圧倒されてしまった。

まあ、数週間で熱も冷めて俺はひっそりと存在するだけの人間になるだろう。

授業中に“絶”を使っていれば当てられることはないし、話しかけられる事もない。

正直、いくら俺は頭が悪いとは言っても、小学生のレベルなら問題はない。

むしろ、かつたるいレベルだ。

“絶”で存在感を薄くしておけばアリス嬢と関わる事もないだろうと思うている。

影から護衛しろと言われているのにその姿を見せて守ることはない。

むしろ、関わったら面倒くさそうだ。

何しろアリス嬢は勉強面において天才だから、頭も良いということとその精神年齢は他のクラスメイトと一線を画している。

同等にあるのは、物静かそうな少女と、茶髪の活発そうな少女の

み。

いや、もう二人いた。

小学三年生にしてお付き合いをしているように見える男女二人組。リア充は爆発すべし。

あ、でも俺もちょっと前までリア充だったか。

そして今は丁度質問タイムの時間。

というか、昼休みの時間。

弁当を作るのはかつたるかつたので、来る途中で適当にパンを買ってきました。

「どこから来たの？」

「コスタリカ」

ちなみに適当である。

一番最初に頭に浮かんだのがコスタリカだったのだ。

コスタリカの場所が知りたい人は地図で調べるかググって欲しい。まあ簡単に言えば、カリブ海と太平洋に挟まれているメキシコの
下ら辺の国である。

ちなみに公用語はスペイン語だ。

「向こうの学校ってどんな感じ？」

学校という概念が無かったので知りません。

という訳にもいかないか。

でも暗殺の訓練ばかりやってたからなあ……あ、天空闘技場で
良いか。

「200階まで行った」

「スッゲー」

いや、俺もなに言ってるか分からないのに理解されてしまったよ
うだ。

こんな返答で通じるのだろうか。
というか200階って何だよ。

そんな高い校舎がある訳ないだろ。

しかもコスタリカだぞ？

発展途上国だぞ？

「日本語上手だね。どこで覚えたの？」

日本語か、産まれて最初に習ったのがその言語でした。
その次にハンター文字を習いました。
なので覚えたというのは不自然な質問。

「コスタリカでは日本語を学ぶ」

本当かよ。

というか自分で答えて自分でツッコむって空しいわ。

「前に住んでたのってどんなところ？」

「256トンの扉が門で、それをくぐると全長五メートルほどの番
犬が居る。本邸に入る前に執事室があり、門から山までが家の敷地
だ」

「すげー。金持ち何だね」

ちなみに家族全員が殺し屋で顔写真にすら賞金が掛けられている。弟は母親を刺すような家族関係です。

食事は三食毒が入っていて、仕事は常に殺し。

ジジイのジジイが未だしぶとく生きていて伝説の暗殺一家と巷では言われている。

家までの観光バスがあるくらいだ。

「趣味は？」

え、趣味って小学生の質問？

しかも趣味と言われても特に興じているものは……大体ここで暗殺とか言ったら確実に通報ものだし。

俺の趣味俺の趣味……あ、あった。

「修行だ」

「その髪地毛？」

「その通りだ」

地毛なんて言葉良く知ってるな。

俺が小学生の時はそんな言葉知らなかったぞ？

やはり最近の小学生は進んでいるのか……甘く見ていた。

「コスタリカの料理ってどんなの？」

くっ……コスタリカって適当に答えただけなのに……。

こっとなったら適当に答えるしかない！

「『我儘な調味料』を使う料理が多い。狩りをするので取ってきた動物にそれをかける」

確かそうしてたはず。

というか我儘な調味料ってどんな調味料だ。

あれか？ 調味料が尊大な態度でも取るのか？

あ、質問が終わった。

というか時間が無くなっただけか。

出来ればこれ以上質問されないようにしておきたい所だ。

アリス嬢を家まで見送ったら早急に図書館に行つてコストリカの事を調べなければ。

この小学校、まじばねえ。

ひらがなだと驚異のほどが伝わらないか。
ならばもう一度。

この小学校、マジパネエ。

分かっただろうか。

俺も前世の記憶（笑）があるから寝ていても授業に付いていけるし、どうせ“絶”を使って教室の隅っこに居るつもりだった。

そして、それが原因でそう言えばそんな奴いたなあ程度の認識で居るつもりだった。

その方がアリス嬢を影から護衛することは楽だ。

下手に近づいてしまうと……アレ？ デメリットなくね？

い、いや、待て！

あれだけ考えて影から護衛する事に決めたんだから……あ、そう
だ。

俺が能力として護衛よりも暗殺に適しているから、誘拐しようとする輩からアリス嬢を守るのなら同じ目線に立った方が良いと思っ
たはず。

それはともかく、アリス嬢、実の名前はアリスだったらしい。

さっきグループワークになるまで気がつかなかった。

そう、グループワークである。

何故かは知らないが、俺はアリス嬢と同じグループになってしま
ったのである。

これがご都合主義とでもいうのだろうか。

一体神は何を考えているのやら。

それより、アリス嬢の名前がアリスではないということを知った
のはそのグループワークがあったからだ。

この街で働いている人に突いて何やらやっていたのだが、俺は自
己紹介をしたが他の者はしていないという学級委員的なアリス嬢の
発言によって自己紹介がなされた。

ちなみにこれからの一年間はこのグループで動くらしい。

まずは班長のアリサ・バーニング。

言わずもがな、護衛対象のアリサ嬢である。

その日本人にあるまじき金の髪はオッサンの血を引いている証拠で、でも顔立ち日本人の母親に似ているらしい。

そして副班長のた、たか、たな……田中何とか。

栗色の髪の子の少女である。

見た感じでは彼女は強化系だろう。

名前で呼んだら友達だよ、と何の前振りもなく告げられた。

どうやらこの少女からは俺は友達だと認識されてしまったらしい。

そして最後の一人はつ、つき……月すず。

若干紫を感じさせる髪の子だが、外人の血が混じっていきそうなものの、一番ご令嬢という響きが似合いそうなお嬢様である。

何でも海鳴の街においては名士なのとか。

家はバーニング邸と同じくらい大きいらしい。

これは田中何とかの情報だ。

彼女はなんとなくだが特質系な気がする。

握手をした感じでは握力は小学生の女の子のものではなかった。

まあ、本人は隠そうとしているみたいだったが。

多分、俺みたいに暗殺一家で育ったとか特殊な事情があったのだろう。

他のグループは五人なのだが、家のグループだけ一人少ないのは、俺が転校生である事と、アリサ嬢が委員長的な存在であることに起因する。

そして男女比がおかしいのは、独裁者ヒトラー、別名アリサ・バーニングがそう決めてしまったから。

まあ、精神年齢に合う友達がこの二人しかいないのだろう。

月すずは俺の直感が特殊な環境で育ったと告げているが、田中何

とかはどうしてこうも精神年齢が高いのか。

まあ、何か……そう、特殊なことを体験したのかもしれない。
具体的には何か分からないが。

ああ、そう言えば何でこの小学校がパナイのかの説明をしていなかった。

つまりは、授業のレベルの高さである。

俺の記憶だったら、九九の掛け算は二年生でやるはずで、三年生は決して分数の計算をしないのである。

それなのにこの三人はいとも容易く計算しているのである。
それだけではない。

三人だけでなく、クラスのほとんどは割り算を使いこなしている
のである。

この分だと中学校では俺のアドバンテージが無くなりそうだ。
まあ、その時になったら考えるでしょう。

やあ、ミルキだ聞いてくれ。

アリサ嬢の護衛を受けてから二日目。

家を出てからもう一度家に入るまでだった契約が何と、オッサンの計らいによってバーニング家の護衛依頼に変わった。

計らい、というのは表現がちとおかしい気がするが、まあとにかく合意の上だ。

最初は俺のターゲットだったオッサンだが、殺しに来たものを逆に自分の家の護衛として雇ってしまう所は、流石世界有数の大企業の社長といえる。

それはともかく、バーニング家御用達(?)となってから、報酬は年収換算で3000万円となった。

あのオッサン、太っ腹である。

まあ、その莫大な報酬の裏には、危険な場所にオッサンが赴く時には俺がついて行くということを含めているから、危険手当の意味合いもある。

俺にしてみれば相手が核兵器でも持ち出してこない限りは絶対に危険にはならないから儲けものだ。

ちなみにまだアリサ嬢の母親にはご対面していない。

何でもオッサン同様忙しいらしく、世界を飛び回っているらしい。夫婦そろって仕事熱心なのは良いけど、少しはアリサ嬢の事も構ってやれよと思う今日この頃。

そのアリサ嬢は、小さい頃から大きな家に住んでいて、寂しさを紛らわせる為に沢山の犬を飼っている。

親に付いて世界を転々としていたが、小学生になる頃にせつかく仲良くなれた友達と離れるのが嫌だということで、最終的にこの地に落ち着いたらしい。

その海鳴、人外魔境の地かもしれない。

この間護衛対象であるアリサ嬢が学校の帰りに寄り道していたので仕方なく100メートルほど後方から尾行していたのだが、喫茶店に入った時に、感づかれそうになった。

あそこのマスター、確実に裏の人間である。

いくら俺が“絶”をしていなかったといっても、100メートル後ろの存在に気付かれるとは思わなかった。

まあ、“絶”を使うといきなり存在感が無くなってそれこそ怪しまれるので素通りしてから戻る時に“絶”を使った。

マスターだけではない。

あそこで働いている男性と女性一名ずつ、かなりの使い手だ。

天空闘技場だったら少し時間をかけたらすぐに200階まで昇れるのではないだろうか。

いや、そんなことはどうでも良い。

どれだけの使い手であろうとも俺に勝る奴はいないのだから、立ちふさがるのはどけるだけだ。

第十七話 転校生ミルキ（後書き）

ハンター世界の終わり方が酷過ぎるとほぼ全員に言われる始末。

でもこれからはこなれた（？）リリカル世界だから何とかなると信じたい。

そして書き終わってから気が付いた。

主人公をバカにするなら強化系だったのではないかと。

もう後の祭り。

書き終わってしまったことに絶望した。

第十八話 オーラと魔力の関係（前書き）

実はバニングスは管理局と貿易をしていたという設定。

多分原作でリンディの部屋にあった盆栽とか、お茶とかはバニングス家が輸出したもののはず。

第十八話 オーラと魔力の関係

「グオオオオオオ!!」

何やら怪物と呼ぶべき奇妙な物体が街を破壊しようとしている。
身体から触手のようなものが生えているが、あれはもしかして幼女をアレしてしまうものなのだろうか。

そしてその対象となっている幼女はアリサ嬢の友達の田中何とか。

その場面に出くわしたのは偶然である。

寝付きが悪かったから家の天井に上って星を眺めていたのだが、
不穏な気配を感じたからそちらに目を向けてみたらその場面だったのだ。

俺は何度も言うようにかわいい女の子の味方である。

ちなみに女の子という分類には幼女も含まれているのであしからず。

上は高校生までが限界だろうか。

あ、それよりも最初は田中何とかを助ける為に向かったのだが、
奇妙なピンクの光を田中何とかが発生させていたから様子見をした。
戦闘に関しては素人も良い所だろうが、あのオーラはすさまじい。
潜在オーラだけで言えばゴンくらいはあるのではないだろうか。
それに、父親はあの喫茶店のマスターである。
期待しない方がおかしい。

ということで見えていたのだが……圧勝していた。

何やら奇妙な黒い物体は田中何とかの放出系のオーラによって消滅、後に残ったのは青い宝石だった。

あれからもかなりのオーラを感じられる。

もしかしたらこの世界の念の使い手が具現化したものなのかもしれない。

それにしても具現化したものが宝石というのは、もしかしたらビスケのような奴なのだろうか。

あ、というか話は変わるが、もしかしたら——というよりも確実に、ヒソカのオーラ別性格分析は通用しそうにない。

田中何とかは見るからに強化系だが、あの放出系の技は明らかに元々の系統が放出系でないとあそこまでの威力は出せない。

ということは田中何とかは水見式をすれば放出系の反応が出るのだろうが、それにしても解せないのは、初めてにしてあれほどの威力のオーラを放つ技術である。

あれほどの事は流石の俺でもすぐには出来なかった。

それなのに簡単にやってのけた田中。

もしかしたら何か秘密があるのかもしれない。

具体的には傍にいたフレットとか、変身していた事とか。

なるほど、あの恥ずかしい変身が制約なのだとしたら威力を出せるかもしれない。

それにしてもいきなり“発”を使うとは……田中、恐ろしい子。

変身が制約なのだとしたら、誓約は……服が消えるとかだろうか。時間を越えて力を使用した時に服が消えるとか……考えただけでも年頃の女の子が考える制約と誓約としては最高峰のものだ。

それに、相手をのした後に服が変わっていた事を見るに、その誓約はもしかしたらあるのかもしれない。

夜中に全裸で街を走る幼女……考えただけで犯罪の匂いがする。

田中がアリサ嬢の親友で本当に良いのかと思った瞬間だった。

で、昨日の田中の事をオッサンに報告したら、その摩訶不思議なピンクの光はオーラではなく、魔力であると言われました。

何でも、この世界とは別の世界、概念的には次元世界という、並列の世界ではなく、距離的に遠い世界があるのだとか。

そこでは魔法技術が盛んで、地球よりもずっと進んだ科学技術があり、バーニング家はその別世界とこの地球との貿易の一切を任されているのだとか。

ちなみにオッサンは俺が空を飛んだりだとか、アリサ嬢の居場所を突き止めたとも魔法だと思っていたらしい。

まあ、魔法ではないということをおッサンには説明したが。

で、その魔法とかいうなんともファンタジーなものは、人間が持つリンカーコアとかいう精製器官から魔力を生みだすことで使用できるのだと。

でもリンカーコアを持っている人間は少なく、管理外世界と呼ばれる魔法技術の無い世界の人間にリンカーコアがある確率はごく少ないのだとか。

ちなみに地球は第97管理外世界。

ということで、少なくとも百近くの世界がある事を知った。

あ、アリサ嬢の母親はその管理世界を飛び回っているらしい。

だから会えないのだとか。

でもって、魔法というのは俺は精神エネルギーが関連しているものだと思っていたのだが、どうやらあながち間違っではないらしい。

オッサンの護衛に付いていた魔導師という魔法を使える人によれば、総魔力量の多い人が実は精神的にも優れている或いは過去に精神を強くするような体験をしている事が多いという説が学会で発表されているのだとか。

まあ、主流ではないが、それでも一応認められつつある説ではあるらしい。

ちなみに、今のところ認められている説は、魔力とはリンカーコアが魔力素を取り入れて精製する物で、個人によって総魔力量が違うのは遺伝や環境によるものだという説だ。

オッサンのガードに付いている魔導師とはある切っ掛けからオッサンに護衛として雇われることになったそうだ。

何でも管理世界には時空管理局という司法と立法を足して二で割ったような組織があり、その組織が世界を管理しているのだが、オッサンの護衛の人は管理局に嫌気がさして止めたらしい。

曰く、上司に嫌われて出世できなくなったとか。

ちなみにその人は魔導師ランクという魔法を使えるものの中で強さを表す基準で言うと、AAランクだそうだ。

上はSSSから下はFまでの十一ランクの中ではAAAランク以上の魔導師は時空管理局の中でも全体の5%ほどしか存在していない事を考慮に入れたら、十分優秀だ。

で、気になったので試しにシュートバレットとか言う圧縮魔力を

弾丸状に形成し、加速して打ち出す射撃魔法を非殺傷設定とか言うなんとも便利な設定で撃ってもらったのだが、“纏”であっさりガード出来てしまった。

まあ、それはミッドチルダ式という魔法形式の中で基本中の基本の射撃魔法なので威力はそれほどないが。

で、実験に失敗はつきものということでその人に一番威力の高い魔法を使ってもらったのだが、結局“纏”で衝撃を感じたくらいでガード出来てしまった。

非殺傷設定だけではなく、殺傷設定でもやってみたのだが、どうやら魔力<オーラのようで、対魔導師に関して言えば、俺は最強である。

まあ、一般人と普通の念能力者相手でも負ける気はないが。

で、オッサンの護衛の一番威力の高い射撃魔法、ファントムブレイザーというAランクの魔法だが、威力で言うならば念を習得したばかりの二流念能力者で、放出系の能力者が練習している段階。

やはり、オーラが生命エネルギーであることから、魔力よりも上なのだろう。

ちなみに、その青い宝石が地球に落ちていることはオッサンを通して時空管理局とやらの伝えてもらったのだが、未だ時空管理局とやらは現れていない

だからこそあの護衛の人も管理局を辞めたのかもしれないが。

まあ、所詮は管理外世界だからどうなっても良いということなのだろう。

でもって、今日はアリサ嬢がサッカーの応援とやらの行ってしまったのでだいぶ外れた所から見ているのだが、多分“絶”を使わなければ田中の父親に気付かれる。

だいぶ外れた所というのは橋の上である。

たそがれた少年を演じているのだ。

かなり優秀なオヤジである。

ちなみにサッカーのチームのコーチもしているらしく、アリサ嬢はその応援に来ているのだ。

サッカーのレベルも高い。

あれは本当に皆小学生なのだろうか。

でもって、田中父がやっている喫茶店に向かったので後を付けてまた近くから“絶”をして見ているのだが……美幼女三人に囲まれているフェレット、羨ましすぎである。

この後、アリサ嬢はオッサンとお買い物をするので俺はそこでお役御免である。

といっても護衛を止める訳ではなく“絶”を使うのをやめれる訳であるが。

ということでアリサ嬢は月すずと一緒に喫茶店を離れて行ったのだが、先に月すずのお迎えが来てからオッサンが来て、アリサ嬢は車に乗った。

車を追いかけるのはかなり疲れる。

かなりのスピードで追いかけるのだが、“怪奇、屋根を駆け回る小学生”みたいなことになっても困るので“絶”を使ったままである。

田中父が居ないから気付かれないと思っていたのにこの事を忘れていた。

“絶”って以外に神経すり減らすから疲れるんだよなあ。

「で、何あの木（笑）」

このーきなんのきふしぎなきー。

全部ひらがなだと何が何だかわからない。

というよりも、歌っている場合ではないので『瞬動』を使ってア

リサ嬢の乗っている車の前に出て、向かってきた枝を叩き落とす。

「オッサン、怪我不い？」

何でこういう時に限ってオッサンの護衛が付いていないのか。
まあ、俺が居るから何だろうけど。

「う、うむ。助かったよ」

というか、この枝一度折ったらそこから未だ伸び続けてるんですが。

それを“纏”の状態でひたすら折っているのだが……切りが無い。
というよりも問題はアリサ嬢に俺の姿を見られている事だろうか。
これで影から護衛ではなくなった。

で、田中には一刻も早くこれを封印してもらいたい所だ。

「え？ な、何よこれ！ っていうかあんたは！」

良い感じにアリサ嬢が混乱しているので、フォローはオッサンに
任せたい所だ。

あと、車を運転している鮫さんにも。
というか本当に切りがない。

もうあの宝石壊そうかなあ……あ、田中が何かやってる。

一応魔力もオーラに似ているエネルギーということで、“凝”を
使わずとも見ることは出来る。

“凝”は別に魔力で“隠”を使える訳ではないのでやる事もない
だろうが。

あ、っていうかアリサ嬢の前に出る前に兄貴の能力で姿を変えれば
良かったのか？

でもそんな暇なかったしなあ……ま、しょうがないか。

というかそれよりも、これで奇怪な現象が起きたとか何だとかで魔法の存在がばれるのではないだろうか。

あ、そこら辺はアフターサービスとかで流石に時空管理局が何とかしてくれるのか？

まあ、どちらにしても街に被害を及ぼしたのは時空管理局が来るのが遅かったからということでオッサンが文句を言いに行くかもしれないが。

というか田中が宝石を探している間に見つからないようにしつつ且つオッサン達に被害が及ばないようにするというのは結構難しい。何よりも普通に叩き落としてたればれるからジジイの能力で切っていたのだが……あ、終わった。

「じゃ、そう言うことで」

オッサンからアリサ嬢には説明してもらおうとしよう。

俺は面倒なことは嫌いだ。

まあ護衛だという事がばれても俺みたいな危険人物には近づかないだろうから今のままだろう。

あ、でもグループワークが……何とかなるか。

沖縄の方言だとなくなるないさー？

どうでも良いね、うん。

第十八話 オーラと魔力の関係（後書き）

主人公がバニングス家を何時まで経ってもバーニング家と言っているのはそれにアリサがいちいち反応してくれるから。

自分では気づいていないけどアリサに惹かれている……はずだと信じたい。

というかそうでないとアリサヒロインにならない。
ポンスさんが涙目。

ということでも無理にでもアリサをヒロインに仕立て上げようとしたのにそうならない今日この頃。

ちなみに今日も本気を出してこれから何話が更新する予定。

ハリポタを見ながら。

第十九話 連休の旅行は何か事件が起こるもの（前書き）

さあ、今日二度目の更新。

もう一話くらい更新してみようかな

第十九話 連休の旅行は何か事件が起こるもの

温泉……入りたかった。

これでは何を言いたいのか伝わらないか？
ならば状況説明をしてやろう。

事の始まりはアリサ嬢が田中の家族と、月すずの家族と一緒に温泉に向かった事。

ちなみに、俺はこの木何の木事件以降、アリサ嬢に構われることになった。

曰く、護衛なら傍で守ってるとか。

全くもって傲慢なお嬢様である。

ま、仕事だから仕方ないけど。

ちなみに、オッサンは娘に問い詰められて何もかもを全て正直に答えてしまったそうです。

俺が護衛の係だとか、隣に住んでいることだとか。

まあ、隣って言っても敷地面積から何から違うから正直お隣さんという感じはまったくしないが。

で、何の因果が働いたのかは分からないが、アリサ嬢との距離が縮まってしまったことで田中と月すずとの距離も縮まってしまい、温泉旅行とやらに御招待されてしまったのだ。

アリサ嬢は家族が忙しいから代わりに俺を連れて行こうと思ったらしい。

で、何を隠そうアリサ嬢は俺を連れていくことは連れて行ったものの、その鬼畜ぶりを発揮して放置プレイをかましてくれているのである。

曰く護衛なら温泉に入っている場合ではない、何時でも動けるよ

うに待機しておけとか。

そんなこんなで俺はアリサ嬢から物凄いイジメにあっているのである。

これは先生に相談した方が良いのだろうか……。

「って何変なこと書いてるのよ！ 大体鬼畜って何よ！ しかも何時私があんたを温泉に入れてやらなかったのよ！」

「そうなの！ それになのはは田中じゃなくて高町なの！」

とまあ、ご立腹な二人。

ちなみに温泉宿にはまだ到着していません。

今は車の中なのであしからず。

「月すずさん、どうかこの二人のお怒りを御静め下さい」

「私も月すずじゃなくて——ってこの場合はあだ名になるから良いのかな？」

「騙されちゃダメよすずか！ こいつ名前を覚えてないだけなんだから！」

失敬な。

いくら俺が人の名前を覚えるのが苦手だとしても、アリサ嬢の名前を忘れるはずがない。

「覚えてますよ。アリサ・バーニング嬢。俺も流石に護衛対象の名前を忘れたりはしませんから」

「バーニングスよー!!」

あ、間違えた。

というかこの際バーニングに改名しちゃえよ。
絶対バーニングスよりもバーニングの方が皆に覚えてもらえるって
多分グリードアイランドに居たあいつみたいに名前を変えたら運
勢も良くなるって。

とまあ、そんなことは置いて、俺は今現在運転をしている田
中父にめっちゃ警戒されています。

まあ、何で警戒されるのか最初は分からなかったけど、良く良く
思い返してみれば足音が暗殺者のそれだったんだねー。

いやー、染みついた癖だったから一般人のそれにするのを忘れて
いた。

というかこれだけ警戒されるとこっちも神経使うから面倒なん
です。

「それよりアリサちゃん、本当にミルキ君が護衛なの？」

「本当とは失礼な。それでも世界で一番強い自信はあるぞ？」

若干田中父へのアピールも兼ねて言ってみた。

良く良く考えたら田中父が裏の人間だったら、俺が何らかの恨み
を晴らす為に近づいてきたのかもしれないとか考えるかぁ。

まあオッサンに雇われている身としてはあんまり敵を作ること
はしたくないが。

解雇されたらまた仕事を探さなきゃいけないし。

「じゃあなのはお父さんよりも強い？」

「間違いなく」

というか、一国を相手にだってできる。

流石に放射能に対しては念でガード出来るか試したことはないが、まあその場合は上空に逃げれば済む……か？

「じゃ、ちよつとした芸を見せてやろう」

——“絶”

完全にオーラを經つて気配を遮断する。

まあ、視界に入っている場合には存在が希薄になるだけで完全に気付かれない訳ではないが。

「あ、あれ……？」

案の定、三人娘は戸惑っているようだ。

というか田中父の警戒レベルが上がったが、これ以上挑発まがいの事をしない方が良いのだろうか。

まあ、三人の幼女が戸惑っている姿はなんとも可愛らしいから止めないけど。

「どうだ？ 居なくなつたみたいだつたら？」

「あんた今のどうやってやったの？」

「普通に気配を消しただけだ」

普通には出来ないけど。

というか、前に座っていた田中姉も俺の気配が消えた事を察知して急に後ろに振り返つて来た。

多分この分だと後方の車に乗っている田中兄も俺の気配が消えた事を感じただろう。

何で普通の一家にこんな一般人とはかけ離れたような人間がいるのか不思議でたまらない。

まあ、家は剣術をやっているとか言っていたからその影響なのかもしれない。

「で、君は一体何者だい？」

うわーお。

物凄く警戒されています。

旅館山の宿という温泉旅館に到着して、三人娘はさっさと池に鯉を見に行き、俺は荷物を運ぼうと思っていたら田中父に呼びとめられた。

ちなみに俺の事を今現在警戒しているのは田中父、兄、姉、月すず姉、そのメイドの五人。

恐らくは今この場に居る中で戦闘能力の高いものを集合させたのだろう。

無駄だけど。

「アリサ嬢の護衛。それ以外の何者でもないよ。余計な詮索は命を落とすからやめるように」

「そう言われてもこちらに被害が及ぶようなら黙っていられないのね」

素晴らしいオーラだ。

よほど剣術で研磨を重ねたのだろう。

が、全くもって念能力者相手には威嚇にならない。

「疑うならアリサ嬢の父親に聞いてみれば良い。あと、俺を脅そうとしても無駄ですよ。……一步も動けないでしょ？」

と思ったが、どうやらメイドの方は動けるみたいだ。
これは何でなのか……間違っても念能力者ではない。
ということは人間ではないのか？

人間でなく、例えば機械だったら俺のオーラを浴びても動けるはずだ。

「そっちのお姉さんは普通じゃないね。まあ、関係ないけど」

その言葉と共にオーラでの威圧を解いて、田中父がオッサンに連絡を取って確認するのを待つ。

その間に田中兄、姉が俺の事をはさむように構えているのは流石だ。

もっ少し訓練を続けて、禅の修行をしたらもしかしたらこの二人

なら念の境地に辿り着けるかもしれない。

それにしても、あのメイドは人間でなかったら本当にロボットなのだろうか。

今のこの世界の技術でふつうにみた時に人間との見分けがつかないロボットを作ることなど出来ないと思うが。

でも“凝”で見てみたらオーラが籠っていたから間違いなくロボットだ。

もしかしたらロケットパンチとか出来るのだろうか。

「でさ、そっちのお姉さんはロボット？」

反応したのは全員。

ということはこのお姉さんの事情はこの場に居る者は全て知っているということか。

で、今の反応から見るとまず間違いなくロボットだろう。

オーラが籠っているというのはよほどの製作者が自身でも気がつかない内に念を込めていたのだろう。

それほどの製作者が以前、若しくは今も存在しているという事。

「どうして……分かったのかしら？」

「そこは企業秘密ってことで。で、もしかして月すずのお姉さんが作ったの？」

いや、そんな感じではない。

それならば俺のオーラでの威嚇にも対抗できたはずだ。

「言えないわね」

だろうな。

もしもそれが何か裏の事に繋がっているのだとしたら簡単には言えないだろう。

というか漸く田中父の警戒が解かれたと思ったら、どうやらアリサ父と連絡が取れたらしく、俺の素性に付いても裏が取れたようだ。まあ、これから先警戒が全くないということではないだろうが……あ、あれでもやっておくか。

「田中父、小太刀持つてるでしょ？ ちょっと貸して」

「田中じゃなくて高町何だけどね……」

少し渋りながらも貸してくれた。

まあ、渋るのは当たり前だが出してくれるとは思っていなかった。先ほどの一瞬で俺との実力差を把握したのだとしたら大したものだ。

この人数で当たれば何か起きても対処できると考えたのは、俺が念能力を除いたら近接戦闘ではかろうじて一流の部類に入る事が出来ると言った腕だから。

多分そのはずだ。

「で、その小太刀で俺の腕思いつきり切ってみ？」

腕の部分にオーラを集める。

小太刀を一旦手に取ってみたが、中々の業物だったので一応念の為に。

……ダジャレじゃないよ？

「いや、そんな事したら君の腕が」

「じゃ、自分でやるから貸して」

まあ普通の神経の持ち主だったらいくら得体のしれない相手だとしても無抵抗の子供相手に小太刀を振り下ろせる訳が無いか。

「……どう？ かすり傷一つ付かないでしょ？ 分かったらあまり余計な詮索はしないように。それからそのロボットのお姉さんには聞きたい事が一つ」

「……何でしょうか」

ふむ、随分と木のお姉さんには警戒されてしまったものだ。
俺としては色々なことを聞きたいから仲良くしておきたいのだが。

「ロケットパンチとかできる？」

「……は？」

「だからロケットパンチ」

あれはロマンだ。

誰か念能力で作ってくれる奴がいると思ってたけどそう言う能力者には出会わなかったから仕方ない。

「一応装備として持ち合わせておりますが」

「MAJIDE？ ちなみに作つたのは随分と昔の人？」

「私よ」

名乗り出てきたのは月すず姉。

あんだ良い仕事する。
ほめて使わす。

「素晴らし仕事だ。ちなみに両腕とも？」

「いいえ。片方はドリルよ」

「あなたとは色々語り合いたい。主にこのお姉さんの武壮兵器について」

がしつと握手を交わす。

何でか分からないけど、月すず姉、ロマンを持っている。
それは素晴らしいことだ。

夢を追いかけてロケットパンチとドリルの両方を実現させるとは
……恐れ入った。

そして宿に入るまでひたすらメイドのお姉さんの仕様に付いて聞かされた。

ロボット談義が出来る者は皆友達。

どうやら月すず姉には完全に話の合う人物として警戒を解かれたらしい。

「女神様とお呼びしてもよろしいだろうか？」

「構わないわ。私もこれから何かノエルの商品に関して加工が必要な時は貴方に任せることにするわ」

ふっ。

俺はどんな部品でも加工する事が出来るのだよ。

どんな堅い物質でも我が拳でだけぬものはない。

細かい作業が必要な時はナイフの先にオーラを集中させたり、爪

の先で“硬”をすればいいから念能力者は加工技術に関してはピカイチだ。

くっ、何ということだ！

小学三年生にして風呂上がりの浴衣がこれほどまでに色気を持っているとは。

上気した頼……後ろからちらほら見えるってそんな事を考えている場合ではないか。

「はい！ おちびちゃん達。君かね、うちの子をアレしてくれちゃってるのは」

田中に顔を近づける外人系の顔のお姉さん。

別に俺はお姉さん属性がある訳でもないのやってほしいとは思わないが。

「なのは、お知り合い？」

流石はアリサ嬢。

田中を庇うようにして一歩前に出た。

ただ俺としては得体のしれない人物に対して喧嘩を売るようなことはして欲しくない訳で。

「この子。貴方を知らないそうですが、どちら様ですか！？」
「うかミルキ、どうせそこらへんに居るんでしょ！？ 何とかしなさいよ！」

「と言われても……流石にここで殺したら廊下が汚れるしなあ」

俺もここを血で汚して掃除しなくてはいけないというのは嫌だから……ってハンターライセンスがあるからってここでは通用しないのか。

じゃ、殺しはダメか。

あ、でもオツサンの権力なら一人の後始末は何とかできるか。

「というかこれ何？ ファッション？」

このお姉さん、額に何か宝石みたいなのを付けてるんですが、ファッションなのだろうか。

あ、もしかしてここではこう言うのが流行ってるのか？

でもアリサ嬢も田中も月すずもそんなことしてないしなあ。

「ツハ、ツハ……」

あ、無意識のうちにこのお姉さんに対してオーラを飛ばしてた。
やばいやばい。

「で、アリサ嬢どうする？ 殺すのも気絶させるのも出来るけど」

「ちょっとあんた殺すって……」

「冗談だつて。一応軽く脅したからもう行くか？」

「あ、でも……」

何か田中が不満そうだが……というか自分が喧嘩を吹っ掛けられたのに相手に対して心配をかけるとか。

兄貴とかだったら笑い飛ばしてるな。

それよか俺も殺しがスタンダードだつて考えを改めた方が良いな。気がついたら目の前の相手が死んでましたとかじゃ話にならない。それこそ追われる身になる。

それにしても脅しすぎただろうか。

確か念能力者のオーラに対して一般人は極寒の中裸で居るようなものだったか？

俺は体験したことないから分からないけど。

第十九話 連休の旅行は何か事件が起こるもの（後書き）

ロケットパンチは男の夢。

第二十話 金髪幼女フェイト（前書き）

というところでこれが今日——あ、もう明日になってる——の最後の更新。

今日一日で頑張り過ぎた……

第二十話 金髪幼女フェイト

「いい加減にしなさいよ!!」

おうおう。

アリサ嬢がただいま田中にキレています。

どうやらアリサ嬢が彼女に話しかけてもボーっとしたままで反応を見せない事に御立腹な様子。

でもって言うだけ言って出て行きました。

こういう場合は俺はアリサ嬢に付いて行った方が良いのか、それとも残って田中を慰めてやるべきなのか。

どちらを選ぶにしても片方を選ぶということはもう片方を選ばないという事。

嫌でも慎重にならざるを得ない。

あ、でも俺の依頼人はアリサ嬢の父親だからアリサ嬢を追いかけなくちゃいけないのか。

それにそこまで親密という訳でもないしなあ。

「アリサちゃん」

「何よ」

「何で怒ってるのか何となくわかるけど、ダメだよあんまり怒っちゃ」

え、月すずはアリサ嬢がキレた理由が……ってさっきボーっとするなって言ってたか。

「だって悩んでるの見え見えじゃない！ 迷ってるの、困ってるの——」

あれ？

そう言う理由だったの？

ってことはぼーっとしてるからじゃなくて、その助けになれないから怒った？

良く分からんな。

というか俺がそんな事を理解するというのがそもそもおこがましいか。

どうせ人の気持ち何ていくら考えても分からないだし、この子たちは普通に育ったお嬢様方だ。

俺とは随分と悩むところも考える所も違うのだろう。

どちらにしても俺は仕事にだけ意識を向けてればいい。

与えられた事を完璧にこなすことしか俺には出来ないのだから。って屋上に行くの？

「あの子がいたからあたしは一人ぼっちじゃ無くなっただ」

「そうだね……私もだよ。なのはちゃんがいたから私たち、友達になれたんだよね」

あ、こう言う話して盗み聞きしても良い事何だろうか。

依頼主の——正確には違うけど——プライバシーを無闇に侵害するというのは……ま、俺はこの道のプロってわけでもないから良いか。

それに大体俺の本職は殺し屋だったの。

いくら護衛で雇われているとは言っても悩み相談なんか俺に出来るかってんだ。

別にその悩みがあいつむかつくからどうにかして殺してくれって

言うならいくらでも方法があるから出来るんだが。

ということで悩み相談は親友同士で何とかしてもらおうしよう。
それよりもこれから午後の授業が始まるのだが二人とも教室に戻らないのだろうか。

あ、でもあんな風に啖呵切って教室を飛び出たアリサ嬢としては
戻りづらいか。

「で、俺は保健委員とかじゃないんですが」

「あんた私の護衛でしょ？ 話し相手くらいになりなさいよ」

だからそれは護衛の仕事じゃないって。
そう言うのは執事とかメイドにやらせろ。
せっかく金持ちなんだから。

あ、ちなみに月すずは教室に戻って、アリサ嬢は仮病を使って保健室に籠っている。

俺はそれに付き合わされている訳だ。

「それより私あんたの事良く知らないんだけど」

あ、そう言えばあんまり話とかした事無いなあ。

果たしてどこまで話して良いものなのか。

オッサンには俺が異世界から来たってことは言っていないしなあ。それにあの人は俺の力の事を魔法の一種だと思っている節がある。アリサ嬢が父親の会社を継ぐのなら魔法にもいずれ関わることになるのだろうが……それまでは言うべきではないか。

「コスタリカから来た留学生でオッサンに雇われた護衛だよ」

「……あんた本当にコスタリカから来たの？ それならスペイン語も話せるわよね？」

ふっ、こんな事もあるうかとスペイン語の勉強は怠って無い。

「二ーハオ。ウォーシーリユージュエーション」

「……後半は分からないけど、それ中国語よね？」

「何！？ そんなはずはない！ ちゃんと図書館で調べて——」

「——調べて？ ということは違うんでしょ？」

あ、しまった。

というか今のつて中国語だったの？
図書館で調べたはずだったんだが……。

「まあ、そんなことは置いといて」

「誤魔化そうとしてるわね？　そうはいかないわよ」

クツ……アリサ・バーニングは化け物か！？

こんなに的確に推理してくるなんて……俺の言葉の節々から矛盾を見つけようとするとは……そんなことどこぞのバロク小学生でもやらないのに。

実はアリサ嬢も身体は子供、頭脳は大人を素でやってるんじゃないか？

だからしょっちゅう誘拐とかされたり、事件に出会うスキルがついてるんだろう。

そうに違いない。

「さあ、キリキリ吐きなさい」

こいつは……玩具を見つけた子供みたいな目だ。

どうにかしてこの話題から遠ざかる別の話題は……仕方ない。思いつかないから“絶”。

そして肢曲。

「あ、こら。また消えたわね！　姿を現しなさい！」

そんなこと言われても誰が好き好んで詰問されようとするか。

大体アリサ嬢に俺の事を見つけることは出来ないって。

一流の暗殺者なら“絶”を使わずとも気配を遮断できるんだから。闇にまぎれて気配を発ち、相手が油断した所で一撃で屠るのは常

套手段。

そして基本中の基本だ。

ただいまアリサ嬢と月すずはヴァイオリンのお稽古中です。
バイオリンではなくヴァイオリンなので間違えないように。
何だか高貴な感じがするが、まあ二人ともお嬢様だからそれくらの稽古はやってのけるのだ。

……自分で何言ってるのか分からん。

それよりも、先ほどからアリサ嬢がイライラしているのが目に見えて分かる。

原因の半分は田中のことを助けてやれない自分へのいら立ち。
そしてもう一つは結局学校が終わるまで俺の事を見つけれなかった事。

まあ、アリサ嬢に見つかってしまうようでは俺も暗殺者としてはダメダメなのでそれくらいで苛立ってもらいたくないものだが。

それにしても、アリサ嬢のいら立ちを抑える為に苦勞役をしている月すずには頭も上がらない。

大変だろうに……今度何か奢ってやろう。

俺はただの護衛だからアリサ嬢のいら立ちを静めてやる事など……

…あ、ぬこが居た。

そう言えば最近表に出してなかったなあ。

そろそろ癒しの権化の力を見せつける時か？

ぬこならば例え犬派のアリサ嬢と言えども陥落するはずだ。

「ということでのぬこどうでしょう？」

ヴァイオリンの稽古から帰ってきたアリサ嬢にぬこを渡してみた。

「……可愛い」

こうかはばつぐんだ！

と、どこぞのモンスターで戦うゲーム画面に表示されてしまうくらいにぬこの癒しは強力だ。

というかぬこ派の月すずが現れないが、未だ中で稽古が続けているのだろうか。

まあそれよりも流石は俺のぬこ。

一瞬でアリサ嬢を骨抜きにしまった。

つぶらな瞳でアリサ嬢を見つめることから初めて、頬を擦り寄せ、撫でられている頭に触っていた指を舐める。

その三段階で大抵の人間はぬこの可愛らしさにノックアウトされる。

「ごめんねアリサちゃん、お待た——かわいいー!!」

流石はぬこ派の月すず。

俺のぬこの可愛らしさが見た瞬間に感じ取れるか。

今なら二人とも稽古で疲れているだろうが、ぬこには疲労回復の効果もあるからずつと抱いて居たくなるだろう。

……それって以外に羨ましいな。

い、いや、どうした俺！

流石に小学生に手を出すほど精神が肉体に引つ張られていないはずだ。

気をしっかり保て。

お前は決して幼女に手を出すような人間ではない。

Yes ロリータ no タツチ。

どこぞの偉人も言っていたはずだ。

「この子何処の子かなあ……あ、もしかしてミルキ君の？」

「その通り」

いやはやここまで可愛がられるとは思ってなかったぞ。

アリサ嬢なんかさつきから黙ったままぬこの事を見つめて視線を外してないし。

「何て言うお名前？」

「ぬこ」

いつか喋れるようにならないだろうか。

吾輩はぬこである、名前はまだないって。

……このネタどこかで作ったような気が……気のせいかな。

「ぬこちゃんかあ。可愛い……よね？ あれ？もしかしてネコだからぬこちゃん？」

む、何か文句があるのだろうか。

俺的には凄く可愛い名前だと思うのだが。

「その通りだ」

「安直すぎない、かな？」

「そんなことはないだろう。それにぬこの可愛らしさはその身をもつてアリサ嬢が体现している」

というか未だ見てるんですけど。

ぬこ、どれだけの人間の心を虜にすれば気が済むのだろう。
最もそんな事を考えている訳ではないだろうが。

「……あら？ ちょっとやばいんじゃないの？ これ」

突然複数人の人間の反応がこの街から消えた。

俺が警戒態勢に入ると同時に、ぬこもアリサの腕の中から降り立って街の中心の方を向く。

——“円”

流石に全力で“円”を展開すると疲れるのでアメーバ状にして先を伸ばす。

でもってその形状でオーラが触れたものは何やら魔法関係のもの。オーラでも一応魔力を感じ取れることは出来る。

同じ人間の体から発せられるエネルギーだからなのだろうと俺は考えている。

そしてオーラの方が上の関係にあるのは、オーラが生命エネルギーで魔力が精神エネルギーだからなのではないかと考えている。まあ推察にすぎないが。

それはともかく、一瞬にして人の気配が多数消えるなど、何かあったとしか考えられない。

どうやらあの魔力は中と外を隔絶するタイプの物のようだ。

例えるならば外と中を識別する“円”を作ったようなもの。

魔力を持たない一般人では中に入る事が出来ないのだろう。

俺は多分入れるはずだ。

魔力よりもオーラの方が上の関係にあるのだから、念能力者は魔法に関係する事が出来るはずである。

とは言っても、ここで関係する事が吉と出るか凶と出るか……。

どちらにしても状況が何も分からないというのは得策ではない。ここは自ら死地に赴く気持ちで関わる方が良いのかもしれない。恐らくは田中が関係しているのだろうが、それでもこれから起こることに對して何か対策を練れる事もあるだろう。

「どうしたのよ？」

「ちよつと先に帰つてて。ぬこは連れて行つて良いから」

ぬこはアリサ嬢の護衛をやらせるとしよう。

一般人くらいにだったらいくらでも対抗できるし、“堅”が出来るから銃弾くらいは受け止める事が出来る。

それだけの時間があれば、何かあった時に俺が駆け付ける事も間に合う。

トンネルを抜けると、そこは雪国……ではなく色の違う世界でした。

どうやら中と外を隔絶するものという判断は間違っていなかったらしい。

エネルギーの感じ取れる中心に向かってみたが、そこに居たのは田中と、金髪の少女と、イタチと犬。

状況から判断するに、どうやら宝石をめぐって対立していた所で金髪の少女の方が怪我をしたようだ。

そしてこの遮断タイプの魔法の中に入った事がその場に居たものの警戒を引き出してしまったのか、俺は敵視の視線でもって犬に睨まれている。

あとイタチにも。

「ミルク君！？ どうしてこーい——」

田中が俺に驚いている間に金髪の少女が宝石の確保に動いた。
というかマジでやばい。

あのエネルギー、素手でつかんで良いものではない。

「止まれ、止まれ、止まれ！」

「チヨイ待ち。俺がやるから」

とりあえず驚いている少女の事は放っておいて、レーザーの弾並みの破壊力を持っていそうなこの宝石をどうするか考える……が、やはり方法は一つしかないだろう。

——『無限の剣製』

そこから破戒すべき全ての符を取り出して宝石を刺す。

こいつの効果はオリジナルと違って刺したものを問答無用に“絶”の状態にするもの。

魔力といえど、オーラといえど、恐らくは強制的に“絶”の状態にしてしまえば問題ない。

まあ問題があったら壊すだけだ。

……が、どうやら成功したらしい。

「いやー、良かった。で、手の怪我は？」

どうやら思った以上にこの金髪の少女にも警戒されているようで、手を見せてはくれない。

それどころか良く良く見てみたら、さっきの犬はどこぞの温泉宿で会ったお姉さんになわっている。

さすが魔法。

兄貴のように針を顔に刺さなくても変化する事が出来るらしい。

「ちょっと悪い。治療するぞ」

クラピカ的能力でもって彼女の手を治療する。

瞬間的にあのお姉さんが俺の事を邪魔しようとしたが、そこは威圧をかけて黙らせたので邪魔させなかった。

まあこの状況を見るにお姉さんはこの子の保護者か何か、或いは関係者なのだろう。

犬耳である所が非常に気にかかるが。

まあ、この二人が田中と敵対していたとしても俺には関係ない。

俺は可愛い子の味方なので。

そう、良く見ればこの子かなり可愛い。

まるで人形のようなのである。

後ろ姿や横顔はどことなくアリサ嬢に似ている気がするが、まあ似ているだけだろう。

オーラの流れが非常にきれいだが、この年で何か戦闘訓練でもやらされていたのだろうか。

まあ俺がこの子に関わるとしたらこの治療だけかもしれないからあまり深くは突っ込まないが。

「ふむ、終わったよ。まだどっか痛いところある？」

「え、あの、えっと無いです」

ならばよし。

俺はここで退散するでしょう。

これからぬこを引き取りに戻らなければならない。

「じゃ、お姉さん動いても良いよ」

威圧をかけていたオーラをひっこめて動ける状態にする。
それにしても面白いものだ。

普通に犬耳が生えている。

付いているという訳ではなく、犬から犬耳付きのお姉さんに変身した所を見るに、犬が素体の人間というところだろうか。

俺としては犬よりもぬこ耳——じゃなかったネコ耳の方が良いが。

「フエイトから離れな！」

随分と嫌われたものだ。

まあ、客観的に見たら俺はかなりの危険人物だから仕方ないだろうが。

「ということですか。俺は帰る」

第二十話 金髪幼女フェイト（後書き）

ふっ。

ハリポタを見てたら更新が遅れてしまったぜ。

ということ二十話目。

ようやく話がリリカルらしくなってきたのではないかと思ってきた。そしてアリサがヒロインのはずなのになぜか今の段階ではフェイトがヒロインしているという錯覚。

どうしてこうなってしまったのかは分からない。

念と魔法の関係についてはかなり適当。

だけど考えられる時間の中で考えてみた。

それから10万pvを達成していました。

ありがとうございます。

これからも精進するよ。

って毎回書いてるんだけどどうしてもこの辺りから吹き付ける風が強くなって続かないんだよねあ。

ということで作者は打たれ弱い人間なのでそこを考慮してやってください。

ちなみに明日はすずかヒロインの方を更新する予定。

興味のある人はそちらもどうぞ。

第二十一話 最近の小学生は怖い

さてさて、昨日の一件に介入したからでしょうか、授業中にも関わらず田中にガン見されています。

今は算数の授業で田中は得意だからやらなくても良いと言うのか。そんなでもって俺が田中の事を見てみたら、首を傾げられました。何か俺の顔にでも付いているのかと思って“絶”をしてから持っていた携帯の画面で確認してみたけど何も付いていませんでした。もしかしたら髪の毛か？ と思ったけどそれも違ったらしい。

詰問されるのも面倒だったので学校にはアリサ嬢に頼んで遅く到着してもらったのだが、このガン見は今日が終わるまで続くのだろうか？

例え“絶”の達人だとしても視界に入っている状態から見えなくするには歩法を使わなくてはならない。

そして何よりも面倒なことは、田中が見るからに強化系であるということだ

あれはゴンと同じで自分からは絶対に引かないだろう。

むしろ、自分が納得するまで、そして相手が折れるまで決してあきらめないタイプだ。

一度関わってしまうとその毒牙から逃れることは出来ない。まさに蛇に睨まれたカエルだ。

「高町さん、ちゃんと前を向いて下さいね」

「あ、す、すみません！」

ふっ、怒られてやんの。

何時までも俺の事を見てるからそう言うことになるんだ。

……もしかして俺の顔に何かついてるんじゃないかってフラグをいつの間にか立ててしまったか？

いや、あり得ないか。

田中に関して高感度を上げるようなイベントは……あ、まさかあの金髪幼女？

でもあいつと田中はどうやら敵対してたみたいだしなあ。

そんなことはないか。

むしろフラグはフラグでも死亡フラグだったりするか？

田中にいつまでも問い詰められて精神的に追い詰められるタイプの。

それはあり得るかもしれない。

だとしたらそれを回避するために必要なことは……いつも通りアリサ嬢の傍にいたることか？

「ゾルディック君、君も聞いてないのかな？」

アリサ嬢と田中は今のところプチ冷戦状態だ。

田中も俺がアリサ嬢の傍にいたら近寄りがたいはず。

例え強化系であってもその壁を突破することはないだろう。

……でも田中がもしもゴンよりも強化系だったら絶対にその精神ブロックは意味を為さないよなあ。

しかも見るからに主人公っぽいし。

それもヒーロー役の。

「ゾルディック君！」

「へぶっ！」

「すっげー！ チョーク投げ吾郎のチョークを避けた！」

何やら前方から物体が飛来してきたから無意識のうちに避けてしまった。

しかもそれはチヨークだったらしく、俺が避けたことで後ろの奴の額に直撃。

後ろの奴、ご愁傷さま。

あ、ていうか俺が避けなければ良かったのか？

でも殺し屋としていきなり飛来してきた物体は避けるように訓練されてるしなあ。

まさか掴む訳にもいかなかったし。

往々にしてナイフには毒が塗ってある事が多いから。

別に毒は効かないんだけどな？

でも練習の段階では未だ毒の効かないからだってわけではなかったのですよ。

「ふっ！ はあっ！」

未だチヨークが飛来してきているがこれはずっと避けているだけでいいのだろうか。

しかも授業をほっぽり出してゲームみたいになってるし。

ま、無意識で避けられるから考え事をするのにはちょうどいいんだけど。

ということこれからどうするかなあ……あの宝石俺が思ってたよりも危険な物体らしいし。

そんでもってオッサンの護衛——名前は……ジャック？——では封印とやらが出来ないらしいし、何よりも緊急事態とはいえ勝手に魔法を使ったら色々と面倒なことがあるのだとか。

本当、時空管理局とやらには早く来てもらいたいものだ。

まあ、いつまでたっても現れない役立たずの組織に何も期待する

ことはないが。

ということで可愛い女の子の味方である俺としてはあんな危険な物の処理を田中とあの金髪少女に任してはおけない訳なのです。

見るからにヤバめな物体だったし。

何よりもあそこで俺が壊したりでもしたら、内包されていたエネルギーで街一つ崩壊しかねなかった。

……うん、本当に選択をミスらなくて良かった。

で、結局どうしようか。

俺としてはアリサ嬢の護衛任務もある訳だからあまり離れたくはないのだが……俺とぬこで係を分担するか？

幸いにしてぬこが居れば数分はどんな状況でも持つだろうし。

それに相手がミサイルやバズーカくらいの威力の武器を持ち出してこない限りは盾に成れることは分かっている。

アリサ嬢もぬこの事を気にいったみたいだし。

いくらか喧嘩でぎすぎすしている雰囲気も朗らかになるかもしれない。

アレか、一岩二鳥というやつか。

……岩じゃなくて石だっけ？

「ということで」

「何が、ということなのよ」

「いや、俺もあのチョーク投げの最中に色々と考えてたんですけどね？」

「そう言えば全部避けてたわね……」

「まあ、あれくらい無意識で避けられないようじゃ何もできないから。それよりも今日から暫くの間、護衛はぬこに任せることにしたいと思います」

ちなみに今は学校の帰り。

この瞬間まで高町に詰問されることは一度しかなかった。

その一度も、俺が田中と呼んでいたのを高町に訂正させられるだけで満足して帰ってしまったから意外と鳥頭なのかもしれない。

そんなことはともかく、今は月すずと一緒にバーニング家のリムジンをこれ見よがしに学校の前まで来させてからその金持ちぶりを見せつけ、あんたらとは違うのよ、的な雰囲気を取りサ嬢が見せつけてから下校している訳だ。

流石金持ちのお嬢様。

そこに痺れも憧れもないが。

「どこに居るのよ」

「……」

どうせ学校に持って行く物など無いので、鞆の中に入っているのはぬこだけなのだ。

参ったか！

「あー！　ぬこちゃん！　かわいいー！」

アリサ嬢に渡す直前に俺の膝の上で月すがぬこの頭を撫で撫でし始めたのでしょうが無く膝の上に置いたまま。

というか美幼女二人に撫で撫でして貰えるって……羨ましくなれないぞ！

お、俺なんか二人に挟まれて座ってるもんね！

両手に花だぞコラ！

参ったか！

……やってて空しくなってきた。

「あ、鮫さんそこを右に」

いつもならその交差点を左に曲がるのだが、左に曲がった少し前から殺気が漏れているのですよ。

アリサ嬢、誘拐されるスキルでも持っているのだろうか。

いや、むしろ自分からわざと引き寄せているのではないだろうか。今日のはかなりのやり手だったぞ？

もしも左に曲がってたらビルの上で待機してた狙撃手に車のタイヤを撃ち抜かれて減速して停止するしかなく、鮫島さんがパンクを確認しに降りた所で強襲される予定だったのだろう。

「うわ、追いかけてきた」

「一応聞くけど……何が？」

「アリサ嬢を誘拐しようとしてる奴ら」

どうしようか。

この街中だとこの車は目立つからなあ……それにマークされてるのなら上手く横道にそれるってわけにもいかないだろうし。

といっても相手を全滅させるとしても街の真ん中でそんなことしたら流石のオツサンでも俺の事を庇いきれないだろうしなあ。

あ、相手みたいに車をパンクさせればいいのか。

「ぬこ持つて。ちよつと場所チェンジ」

アリサ嬢にぬこを抱かせて場所を変える。

流石に後ろのガラスを砕いてやる訳にはいかないから窓を開いて身を取り出す。

「ちよつとあんた！ 何でそんなに冷静にしてるのよ！」

慌ててら。

まあ仕方ないか。

自分の事を狙ってきてるのに、それに友達を巻き込んでしまつてさらには追いかけてきてるという始末。

よもや逃げられるなどと考えてはいないのだろう。

その判断は俺が居なかつたら正しいかもしれないが、もうすこし冷静さを欠くと思っていたが見なおした方が良いのかもしれない。

あ、ぬこを抱いてるから冷静なのか。

「えつと……ヤベえ」

「な、何が？」

「鉛筆くれない？」

鉛筆を投げようと思ったのに、そういえば何もいらなからつて鉛筆を持ってきたんじゃないんだった。

いやーカルトの能力をコピー済みだったから紙でも良いんだけど、生憎と紙も持ってないし、何よりも今日のチョーク投げで鉛筆を投げたい気分なんだよね。

「サンキュ。ピッチャー投げた！ ストライク！」

“周”で強化した鉛筆がタイヤに命中してパンクさせた。
ナイフ投げの練習をしていて良かった。

「お、終わったの？」

「もち。見てみ？ 道から逸れて脇に車を止めてる」

言われてからおずおずと背後を振り返る二人。

びくびくしながらというのがまたポイントが高い。

特に普段強気なアリサ嬢がオドオドしているというのは非常にポイントが高い。

萌えポイントを十点上げよう。

「つてあら？ あいつらが狙ってたのアリサ嬢じゃなくて月すずだっ
たみたい」

ここからだとな奴らの持っている写真がアリサ嬢のそれではなく、

月すずの写真だという事が分かる。

笑顔の写真だ。

撮った人はいい仕事をしてる。

「え……そ、そのごめんねアリサちゃん。私の事情に巻き込んで」

「大丈夫よ。どっちにしたってミルクが何とかするから」

「随分と人任せだな、おい」

「あんた私の護衛でしょ？ その位は確実にこなさないよ」

ま、月すずを狙っていたとしてもアリサ嬢に被害が及ぶなら俺の仕事の範囲だから———というか可愛い女の子に害を為すものは積極的に排除する。

アリサ嬢に言われなくても結局はやっていたことが。

それよりも鮫さんさつきから一言も発してねえ。

流石はバーニング家の執事だ。

ちなみに、鮫さんは本名は鮫島というらしいが、長いから俺が鮫さんに替えた。

シャークというのも候補に挙がっていたのだが、本人が嫌がるというよりも執事として公の場でプロレスラーの名前のごとく呼ばれるのはバーニング家の執事としてあり得ない問うことでアリサ嬢に却下されてしまった。

いい名前だと思うのに、シャーク。

ヒヤッハー！

良く分からないけど誘拐犯を撃退したら月すず姉——女神様に物凄く感謝された。

後、田中——じゃなくて高町兄にも、例よりも現物が欲しかったので簡易ロケットパンチシステムを貰った。

何でもメイドに取り付ける前に作った試作品らしく、処分するのにも困るから取っておいたのだとか。

流星は女神様。

試作品のロケットパンチだったが、一発しか撃てないものの十分にその威力を発揮するとの事。

早く撃つてみたいものだ。

が、どうやらそうもいかないらしい。

あの危険な宝石をめぐって旅をしていたのだが、高町と金髪幼女が同じ場所に向かっていたのでそこに行ってみたら木の化け物が居た。

この木何の木事件でも思ったが、この宝石は木で何かしたいのだからか。

しかもただ木が巨大化しただけではなく、顔まで付いているのだ。それでもって金髪少女の攻撃をバリアでガードした。素晴らしい性能である。

というよりも公園が木の化け物の攻撃で破壊されているのだが、これは元通りに誰が戻すのだろうか。

あ、でもこの間の街も破壊されてたけどなんともなかったからもしかしたらこの“円”みたいなやつは解除したら元に戻る性質でもあるのか？

で、“絶”をして観戦しているのだが、どうやら俺が思っていた以上に助力は必要なかったみたいだ。

二人とも物凄い威力の放出系の技で木の化け物を撃退してしまった。

デイベインバスター？とか言うのと、サンダースマッシャー？とか言うので撃退していた。

それにしても金髪少女はかっこよかった。

サンダースマッシャーとか言うのを放つ直前にこう……指で何か印を結ぶようにしていたのだ。

俺もやってみたい。

それよりも、アークセイバーという技はかなりの高等技術だろう。あれは変化系と放出系の複合技だ。

全くもって魔法というのは卑怯だ。

念能力で言うところのメモリを全てあのデバイスとやらが負担しているらしい。

しかも言語を解する能力を持っていることから、その性能はかなりのものだろう。

ジャック——オッサンの護衛——が持っていたものは会話とか出来なかったが、彼女らが持っているものは自分で判断しているみたいだ。

アレがあつたら勉強とかしなくても済むかもしれない。
あ、封印が終わった。

「譲れないから」

「私はフェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど……」

あ、何て言うかバトルの雰囲気臭っている。
いや、匂っている。

どう見ても高町は主人公だ。
そして強化系。

多分、主人公になる為には強化系でないといけないのだろう。
とすると相手となるべき金髪幼女は変化系なのだろうか。

「私が勝つたら、ただの甘ったれた子じゃないって分かってもらえたらお話、聞いてくれる？」

甘ったれた子、って何時そんな話があつたのだろうか。

まあ、俺が見に来る前かもしれないが。

というか話を聞いてもらう為にバトルするのか……強化系なら自分が攻撃されても立ち上がったって、「話を聞いて」とか言いそうだが、もしかして予想が外れたか？

……しかもそのまま戦闘に移行しちゃったし。

あの宝石そのままにしておいたら不味いんじゃないの？

そしてこれをどこかで監視している誰かさんは放っておいても良い訳？

なんかさつきから視線がウザいと思ってたら俺じゃなくて二人の事を監視してた。

まあ、二人とも可愛いから仕方ないかもしれないが。

それより魔法合戦じゃなくてデバイスとやらで殴り合いするの？
最近の小学生は怖いなあ、全く。

第二十一話 最近の小学生は怖い（後書き）

主人公はみんな強化系。

そして相棒は変化系。

でもどう考えてもフェイトの性格は気まぐれなウソつきではない。

そしてチョーク投げの吾郎は一応三人娘の担任。

苗字は考えてない。

あ、あと感想が少なくなっただけこの間の後書きに関連しているの
だろうか？

それともみんな感想を書く気がなくなったとか？

と、微妙に催促してみる。

第二十二話 K Y……じゃなくてKH登場（前書き）

クロノがカツコイイ二次創作なんてない

第二十二話　KY……じゃなくてKH登場

「ストップだ！」

何あれ。

いきなり変なのが飛び出てきたんだけど。

しかも僕は凄いとばかりに高町と金髪少女の杖を受け止めたし。

あれか？

アレが噂のKYか？

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聴かせてもらおうか」

違った。

KYじゃなくてKHだった。

空気読めないじゃなくて、空気破壊？

どちらにしてもイニシャルからして空気の読めない子であることは間違いない。

今のは流れるに高町と金髪少女がお互い気の済むまでやりあって仲直りみたいなイベントだったのに。

高町の主人公としてのイベントを潰された感じだな。

それにしても今更時空管理局とやらが出てくるのか。

ってことはさっきの監視の視線は時空管理局だったんだろう。

ん？

ということはあるの宝石の封印を少女二人にやらせるだけやって美味しいとこだけ持って行こうとしてたの？

それってマジあり得ないんじゃないのか？

少女に危険なことだけやらせて横からかすめ取るとか……組織と

しては正しいかもしれないが人間としては終わってるな。

殺し屋の俺が言える事じゃないが。

というか封印出来ずにあの宝石が暴走でもしたらどうするつもりだったんだろうか。

しかも来たのが子供って……確かにオーラの流れは金髪幼女よりもそこそこ出来るみたいだけど子供を前線に送りだすってどういうことだ。

あ、アレか。

管理外世界だからどうなっても知らないって奴か。

宝石さえ回収できれば後はどうなっても知らない、と。

後でオッサンを通して時空管理局とやらには文句を言ってもらおう。

「まずは二人とも武器を引くんだ。このまま戦闘行為を続けるなら

――」

あいつは何をかつこつけているんだろうか。

あ、あの犬耳お姉さんが小僧を攻撃しようとしてる。

良いぞ！ やれ！

俺は可愛い女の子の味方だが、男はどうなっても良い。

……って、流石に陽動が目的の攻撃だと潰せないか。

それにしてもあの犬耳のお姉さん——いや、今はそのまんま犬だけど——匂いとかで俺がいる事がバレたりしないのだろうか。

一応“絶”を使っているから気配ではれるということはないが、それにしても……。

「フェイト、撤退するよ！ 離れて！」

あ、地面に攻撃が激突した。

だからこれ誰が直すの？

あ、時空管理局とやらが出しゃばって来たから奴らが直してくれるのかな？

違うわ。

そう言えばこの“円”もどきは解除されると元に戻るんだった。だから気兼ねなく破壊できるのか。

「あ！」

「うわあー！！」

「フエイト！」

「フエイトちゃん！！」

これってアレだね、この餓鬼殺しても良いんだよね？

一応手は出さない予定だったけど可愛い女の子にいきなり攻撃して怪我させるとか、俺に殺してくれって言ってるようなものだよね？

まあ、治療が先か。

「ちよい動くなよ？ 『癒す親指の鎖』」

「あ、あんたは！」

ここで犬耳お姉さんに動かれると面倒だな。

あと、後で殺さないといけないあのクソ餓鬼にも。

「治療中だから動かないように」

犬耳お姉さんは一度俺が金髪幼女の怪我を治してやってるから信

用してくれるものとして、あつちはオーラで動けないようにしておけば良いか。

それよりも問題はあのクソ餓鬼の攻撃をまっ正面から喰らったことだよなあ。

目の下の部分が赤くなってるけど、魔法ってそういう効果もあるのか？

クラピカ的能力で応急処置をするよりもぬこを持って帰らせた方が良いんだろうけどぬこは今アリサ嬢と遊んでるしなあ。

「とりあえず応急処置は済んだ。俺は医者じゃないし魔法は知らないから良く分かんけど、明日には回復するはず。じゃ、犬耳お姉さん」

うん、物分かりのいい人は好きだ。

今度あの犬耳お姉さんにはドックフードを上げるとしよう。それもバーニング家で使ってる奴。

さて、残ってる問題はあのKHか。

「何でミルキ君がここに居るの!？」

「いや、だってあんな危険な物の処理を幼女二人に任せるとか出来ないでしょ。後詰として来てただけ」

まあ、高町と話している暇はないのです。

幼女暴行罪を犯したクソ餓鬼はどうやって制裁してやろうか。

最初に足の骨を折って、腱を切ってから立ち上がれないようにして、腕を折って抵抗できないようにしてから一枚ずつ爪をはがして、あばらの骨を一本ずつ抜くか。

いや、でも電気と毒の拷問の方が良いかな？

それが悪意を纏ったオーラを当て続けるとか。
ふむ、どれも捨てがたいな。

「寛大な俺はお前に選択肢を与えてやる。一、苦しみながら死ぬ。
二、苦しんでから死ぬ。さあ、どちらが良い？」

「あ、あの、ミルキ君？ 何を言ってるの？」

「何ってどうやってこいつを殺すかだろ？ 何だ、高町が選びたいのか？」

それなら選ばせてやらない事もない。

本当ならあの金髪幼女に選ばせてやりたい所だが、まあ今この場に居ないのだから仕方がない。

魔法が使えるんだからテレパシーとか使ってみたいよなあ。

それなら金髪幼女が無理でもあの犬耳お姉さんと苦しみ方について話しあえたのに。

「こ、殺すなんてダメ！」

「はあ？ だってこいつお前らにあの宝石の封印をやらせた挙句、あの女の子に怪我させたんだぞ？ しかも今この瞬間にもこいつの仲間が監視してるし。殺されたって文句は言えないだろ。幸いにしてこいつはこの世界の住人じゃないみたいだから法律的にも問題ないし。というか高町はむかつかないのか？ こいついきなりあの子の事を攻撃して怪我させてんだぞ？ あの犬耳お姉さんが受け止めてなかったら頭から落下してたから死んでたかもしれないぞ？ ということでこいつが俺に殺されることは決定なの。で、どうやって苦しめるかだけど、身体のある部分の骨を折るのと、電気と毒のコースと、精神的に殺すのとどれが良い？ 俺的には一番最初の

肉体的に苦しめてから、意識を失わない段階で拷問のコースに移行して、それから精神的にスタボロにしてから殺してくれてたのま
れるまでそれを続けてから最後に心臓を抜き取るのが一番いいと思
うけど」

「……ミルキ君？ 何を言ってるの？」

あ、そっか。

いくら高町父が裏の人間だって言っても高町がそう言うことにつ
いての体勢があるとは限らないか。

むしろ普通の小学生だったら吐き出すような内容か。
いかな。

普通を意識するのを忘れてた。

じゃ、俺が決めなきやいけないのか。

でもオーラの揺らぎがあるからまたこいつみたいに誰かが移動し
てくるのかなあ？ って考えてたら来た。

面倒だし、全員殺すか？

あれ？ 電話か？

はい？ アリサ嬢？ 電話なんかしてどうしたの？

というかこの中電話が繋がるんだ。

いや、違うか。

アリサ嬢がぬこを抱いているから俺に精神的なパスで繋がってい
るだけか？

それか多分携帯の電波をオーラが強化してるとかそういうことだ
ろっ。

早く帰ってきなさい！ すずかが誘拐されたのよ！

すずか、すずか…… ああ、月すずの事か。

でもこっちも今少し手が離せないんですが。あと五、いや、二分ももらえたらこいつら皆殺しにしてすぐに向かいますから

！
バカなこと言っていないですぐに戻ってきなさい！ これは命令よ

命令ですか、なら仕方ない。一分ほどで向かいます

依頼人を怒らせる訳にはいかない。

仕事を無くすのは手痛いからな。

まあ、こいつらを殺すのは今度に延期するでしょう。

っていうか敬語って面倒だな。

何回か使って無い事もあったし、今度から敬語を無理に使わなくても良いようにアリサ嬢に頼んでみようかな。

「ということでアリサ嬢から呼び出しがかかったから俺は行く。高町、こいつら殺すなよ？ 俺が今度やるから」

まずはこの“円”もどきを破壊しないといけないよなあ。

とりあえず破壊してから急いでバーニング家に向かってアリサ嬢を見つけるか。

“円”を使ったらすぐにでも見つけられるだろ。

「ただいま戻りましたー」

アリサ嬢の居場所を“円”で割り出してからそこに向かい、部屋の中に入ると中に居たのはアリサ嬢、高町兄、父、月すず姉、メイド二人、鮫さん。

そして疑問は一つ。

何で月すずが誘拐されたのに、作戦本部的な場所がアリサ嬢の家になっているのだろうか。

そもそも、月すず姉とメイド二人がこちらに来ている理由が分からない。

普通なら身代金とか何か要求があってそれを用意する為に奔走していると思うのだが。

「遅いわよ!」

と言われてもこれでもかなり早く戻ったつもりなんだが。

それに一分以内に戻るっている約束は違えてないし。

というか俺にすぐに戻って来いってことは強襲作戦でもかけるのか？

「あんたすずかがどこにいるか知らないの!？」

あ、なるほどそれを知りたかったわけね。

それで机の上に地図が広げているのか。

大方この間アリサ嬢の居場所を特定した事を鮫さんが覚えていたのだろう。

それはともかく、公園からこの家までの直線ルートで半径1キロほどの中にはいなかったはずだ。

誘拐されたからということでは“円”を展開しながら戻ったけどそれらしき人影は見当たらなかったし。

ということは搜索は反対の方向から始めればいいか。

「知らない、ということを探します。じゃ、地図を借りますよ」

『導く薬指の鎖』で地図の上をダウジングする。

それを慎重に見守る一同。

そして地図上を移動しながら月すが囚われていると思われる一点で鎖が揺れる。

「ここ、ですね。山の中だ」

海に続いて山か。

「そこならあの山小屋だろう。いつもランニングの時に通る道だ」

「とりあえず色々と説明してほしいんですが」

居場所を特定したのは良いけど、他に色々と情報が欲しい。

例えば相手は殺してしまっても良いのか、とか。

殺しても良いなら話は早いし、今の俺のいら立ちも解消できる。

で、皆が考えている間に鮫さんから教えてもらった経緯は、月す

ずが図書館に言っている所を誘拐されて、要求は月村家に対して色々とする事、月すず姉の婚約者である高町兄がそれを聞いて高町父と共に救出しようと思う、そこで高町父が俺の事を思いだして協力してもらおうとアリサ嬢に電話、鮫さんが事の次第を聞いて、俺なら居場所が特定できるかもしれないと思い至った。

という訳らしい。

まあ、このメンバーで強襲すれば救いだせることは救いだせるかもしれないが、かかる時間によつては月すずが殺されるかもしれない。

月村家には色々と事情があるらしいが、アリサ嬢から俺に下された命令は月すずを無事に連れ戻す事。

ならば俺一人でやった方が良いだろうか。

「とりあえず小屋に向かおう。状況を確認してから正面突破をするか、それとも忍びこむかを考えよう」

と、高町父。

その判断は間違つてはいないが、最善の手ではない。

この場には俺というチートが居るのだから。

「チョイ待ち。今探してるから」

方向からしてこつちなのだが、中々変形させた“円”に引っつかからない。

糸状にして振り回したらヒットするだろうか……ってこれか。

ヒットした方向にオーラを伸ばしてその範囲内の状況を特定する。遠距離でも、こう言う時は俺のバカオーラが役に立つ。

「正面突破……は確率的には半分って所だな。というか女神様は何を敵に回したの？ 彼らとんでもない物を持ってるんですが」

拳銃は勿論の事、暗視ゴーグル付きの狙撃銃に、ショットガン、対戦車ミサイルに、雷戦車地雷、対空砲に簡易式バズーカ。さらに月すずの周りにはC4もしかけてある。何で軍隊を相手にするような用意周到さなのだろうか。

「ミルキ君もしかしてここから向こうの状況が分かるの？」

「ま、そんなとこ。超能力の一種とでも考えてもらえれば。それよりも対戦車地雷とかしかけてあるんですが、あいつらはどこの軍隊を相手にするつもりなんですか？」

あ、でも良く考えたらメイドはロボットだからそういうのを相手にすると考えるのが普通なのか？

それにしても相手はこの二人がロボットだって言うことを知っているって言うことなんだよなあ。

ってことは家関係のいざこざかもしれないけどそれにしては物々しいしな。

「なるほど、こちらに御神流の使い手がいるという事も知られてしまっているのか……」

え、何？ 高町家はそんなに恐れられる存在なの？

というか流派の名前とかあるんだ。

いいなあ。

ってことは登場する時に「御神流 高町、参る！」とかやるんだろ？

俺は流派にしたらゾルディック流？

名前そのまんまだけどかっこいいからいいか。

「鮫さん、アリサ嬢をどこか別の部屋に。ちょっとえぐい話になる――」

「――私は残るわよ。親友が大変な時に除者にするなんてことはさせないわよ」

全く強情な。

「じゃ、女神様。相手は全員殺しても良いの？ それなら100%の確率で月すずを助けられるけど？」

「……殺さずにだったら？」

相手に情けをかけるのか？

お優しいことで。

全員殺せばいいのに。

ま、仕方ない。

殺さないとなると、相手を念能力に目覚めさせるわけにはいかな
いから、念での攻撃は出来ないか。

となると手段としては“絶”を使っただけで背後から首筋を打って
気絶させるか、若しくは上空から近づいて月すずだけを救出する
かのどちらか、かな？

オーラで威圧しながら進むとしても遠くから見られて報告でもさ
れたら月すずが危害に会うことはまず間違いないし。

痺れ薬……何て都合のいいものがすぐに作れる訳じゃないなあ。
それがあればポンズの能力で念蜂を作って一斉に痺れさせるん
だ
が。

まあ無い物ねだりをしては仕方がない。

「高町家とメイド二人はフルで武装した一個中隊相手に何分持つ？」

「そうだね……十分もあれば倒せると思うよ」

これはまた大きく出たな。

まあこんな所で実力を大きく言っても仕方ないから本当の事だろう。

となると、時間としては十分、か。

「じゃ、そのプランで俺が上空から月すずを救出するということで確率的には……物凄く鼻の効く犬みたいなのやつがいなければ9割居れば8割」

いないとは思いたい、状況は常に最悪を予想しておくものだ。犬耳お姉さんが居た以上、そう言う可能性が無い訳ではない。

「良いわ。それで行きましょう」

第二十二話 K Y……じゃなくてKH登場（後書き）

月すずの誘拐によつて九死に一生を得た管理局。
ミルキを怒らせてはいけない

第二十三話 月すず救出（前書き）

今にして思えば何で飛行の念能力を作らなかったのか……。後付け設定で『瞬動』で虚空瞬動もできるようにしようか

第二十三話 月すず救出

そついやさつきから思ってたんだが、俺は何であのクソ餓鬼にそんなにキレていたのだろうか。

いくら俺でも幼女がいきなり攻撃されたからといってあそこまでキレることはないはずだけど。

自分でも訳が分からないくらいに自制が効いてなかったしなあ。

いくら可愛い女の子が怪我をしたとはいえ、二回ほどあっただけの見ず知らずの子だし。

しかもあの子の名前を聞いた訳でもないし。

まあ、犬耳お姉さんがフェイト、って呼んでたからそれがあの子の名前なんだろうけど。

ふむ……自分を客観的に見つめるのって以外に難しいな。

考えても考えても何であの時殺すという選択肢しか頭に浮かばなかったのか分からない。

というか高町にどうやって殺すか質問していたあたり、かなり頭がぶっ飛んでたのだろう。

別に俺に近い人間という訳でもない……あ、アリサ嬢に似てたからか？

同じ金髪幼女だし、アリサ嬢なら俺が護衛する人間として一応近しい存在だと言えるし。

だから攻撃されて無意識のうちに重ねた？

でもそれでも説明がつかないよなあ……それだと今度はアリサ嬢を攻撃されてあそこまでキレる理由を探さなきゃいけないし。

うーん……もう何か考えるの面倒だからいつか。

「そろそろ作戦開始、か？」

ジジイの能力『龍頭戯画』で作ったオーラの背中に乗って上空から目標地点まで近づき、その背中で待機する事数分、作戦開始の時間になって漸くドンパチが始まったらしい。

十分持つというのは豪語でも何でもなく、高町父が客観的に判断してそうだという事がここからでもよくわかる。

一般人にしては恐ろしい戦闘能力だ。

一個中隊の完全武装兵相手に圧倒しているとか。

持っている小太刀の二刀流も流石だが、それ以上に飛針と呼ばれる飛び道具の的確さが半端ではない。

的確に相手の手に刺さり、武器を落とさせていく。

俺がやると突き抜けて致命傷になったり、無意識のうちにオーラを込めてしまうから出来ない芸当だ。

殺すのが駄目という堅気はつらい。

「行くか」

本当なら先にぬこを潜入させてここから『龍星群』で降下して、無差別に攻撃するのが早いのだが、殺してはダメという事だから“絶”で降りて気付かれないように月すずを救出。

それが今回の任務だ。

さて、許された時間はおよそ一分。

その間にここに居る奴らにはれないように月すずを救出かつ見つからないように退散しなければならない。

“円”で居場所が特定できているとは言っても、見張りが五人ほどついている。

それをかいくぐるとしたら……それは無理か。

やはりその五人を一秒以内に全員気絶させるというのがプランとしては最上。

小石を投げて音を立て、そちらに五人が反応した瞬間に首筋を手刀で撃つ。

この手の事は一応何度もやっているから問題はない。

全員片付けてから、月すずを縛ってある縄を肉体操作してナイフよりも鋭くなった爪で切り裂く。

さる轡も外して、自由にする。

「で、怪我はない？」

「う、うん。でもミルク君どうしてここに……？」

「アリサ嬢の依頼」

じゃなかったら今頃手を真つ赤に染めて十数人をこの世からあの世に送っている所だ。

「そう、なんだ。ありがとうね。でもどうやって——ミルク君危ない！！」

ぱんっ！

という乾いた銃声が響く。

どうやら意識を取り戻すのが早い奴が居たようだ。

たいした回復力である。

二時間ほどは気絶するくらいの強さで撃ちつけたというのに。

「月すず、怪我無い？」

「あ、あれ？ ミルク君撃たれて……」

どうやら怪我はなかったらしい。

寸での所で身体で射線上に割り込む事が出来たから何とかなつたが、俺が撃たれそうになつていゝと言つても動くのは止めてもらいたところだ。

万が一という事もある。

「くそっ！ 何なんだお前は！ どうして銃が効かない！？」

「俺を殺したかったら大陸間弾道ミサイルでも持つてこい。じゃ、お休み」

今度は手加減を間違えないように、奴の回復力も考慮に入れて常人のそれよりも若干強めに打つ。

一撃で奴は沈み、意識のある者はいない。

今度は間違いが起きないように“円”で確認したから間違いない。いつもなら全員殺しているから意識が残っている可能性があるという事を忘れていた。

今度からは気を付けるとしよう。

「帰るか」

「えっと、帰るってどうやって？」

来る時でさえ上空から飛び降りる事が出来たが、帰りは空を飛ぶという事は出来ないだろう。

流星に月すずの目の前で念能力を使う事は出来ない。

かといつて使う為に月すずに眠ってもらつたという事もあまりしたくはない。

ならどうするか、答えは一つに決まっている。

「ジャンプですよ。お姫様」

「へ、え？ あ、あの、ミルキ君？」

いやー良い感じに戸惑ってるけどそれを楽しんでる時間も無いので無視。

まあ、戸惑うのも仕方がない。

今は俺が月すずをお姫様抱っこ状態で抱きかかえているから。

そのままの状態で屋根の上にジャンプして、足にオーラを溜める。全てのオーラを足に回してからジャンプの瞬間にオーラを爆発させて上に飛び上がる。

俺の筋力と、オーラ量の多さで垂直跳びは100メートルという、ツエズゲラどころかゴン、キルアを超える。

そしてそこにあるのはこれまた遙か上空にあるへりから吊るされている縄。

それを掴んだ事を上に知らせてからそのまま飛び去ってもらう。

一応これで任務は果たした。

後は霍乱組が無事に生還すれば全て成功という事になる。

というか腕一本で縄を上るって意外にきつい。

「で、どうよお姫様。空の旅は」

へりはアリサ嬢がおっさんに頼んで緊急に出してもらった。

「えっと……凄いね。腕一本で上るなんて」

あ、そこですか。

空の旅とか色々があると思うんですけど。

というか怖くは……あんな体験をした後じゃ怖いものなんてないか。

「落ちないようにしっかりと掴まってるよ？ 流石に俺でもこの高さだと自分の事で手一杯になる」

「う、うん……」

あ、いや。

言い方を間違えたかもしれない。

しっかりと掴まっているというのは間違っではないのだけど、別に身体ごと押しつけるという訳ではない。

落ちないようにというだけだ。

……まあ、怖くないって言っても身体はこの高さを恐怖と感じているのかもしれない。

それで無意識のうちにしがみついているんだろう。

「そういう訳で高町さんはご家庭の事情で何日か学校をお休みするそうです」

まあ、高町にも色々あったのだろう。

あの宝石の事についてとか。

そう言えば俺があれだけの事をしたのに一向に接触がないのは危険人物だと認識されたからなのだろうか。

客観的に考えたら次に姿を見せたら殺される可能性がある訳だし、それに何よりも俺は得体のしれない力を使って、動けなくなるから対策の取りようも無いのだろう。

監視も無い事は流石に最初は不思議だったが、よくよく考えたらあの時点で見られていたことに気がついていたらわざわざ危険を犯して監視することも無いのだろう。

「高町さんがお休みの間、ノートとプリントは……」

「はい！ 私が」

「アリサさん、それじゃあよろしくね」

なんだかんだいって、アリサ嬢はものすごく高町の事を心配しているようだ。

いつもなら授業そっちのけでノートに落書きとかするのに、高町の為にノートを取ってやるとか。

あ、そう言えば月すず誘拐事件は俺が月すずを救出してからは月村家が残りの処分をやったそうです。

何でも警察沙汰には出来ないのだとか。

まあ、高町父が御神流が居ることを知られているのか、とか言っていた事を鑑みれば今回の事件が裏の事についての事件であることは容易に想像がつく。

と、アリサ嬢が言っていた。

俺にはそういう事を推理するような頭脳は無いので。

あ、垂直跳びでかなりの高さを飛んだ事とか、空から飛び降りて

平気だった事とか、銃で撃たれても傷一つ負わなかった事とか、色々を含めて俺の奇怪な事は全て超能力ということで結論を迎えました。流石に念能力の事を言えないし、魔法という訳でもないので黙っていたら詰問してきたアリサ嬢が折れました。

俺にももしかしたら強化形になるべき才能が眠っていたのかもしれない。

でもって、その力はどうでも良いからという事で高町父と兄に模擬戦を挑まれました。

まあ付き合ってやったが、正直加減が難しかった。

防御の瞬間にだけ“堅”を使い、攻撃の瞬間に“絶”を使う。

一応“纏”を解いてオーラを垂れ流しの状態にすれば相手が念能力に目覚めることはないのだが、まあ念には念を入れるという事で気付かれ無いからという意味でも“絶”を使っていた。

ちなみに念には念を入れるというのは念能力とかけたギャグでは無いのであしからず。

で、そんなことよりもどうにかしなければいけない問題が一つ。

どうやら吾輩、月すずにフラグを立ててしまったらしいです。

いや、可愛い女の子に好かれるのは良い事だよ？

でもポンズという前例があるから嫌でも慎重にならざるを得ない訳なのだ。

うーん……動転して口調がおかしいことになってる。

それもこれも全部月すずのせいだ。

いきなり俺にアプローチをかけてくるから。

大体小学三年生にして手作り弁当を「あーん」ってどういう事！？こんなことになるんだったら自分で弁当作ってくるか、来る途中で買っただった。

そうしておけば公開処刑という名の辱めを受けることも無く、ア

リサ嬢にニヤニヤとみられることも無かったのに……不覚。

ちなみにいつの間にホームルームからお昼休みに時間が移ったのかといわれても、俺が考え事をしている最中としか言いようがない。

それにしても誘拐事件の翌日から学校に登校するとかその精神には感服せざるを得ない。

普通の小学生だったら参ってしまつて学校になどとてもではないが行けないだろう。

というか、家から出るのもごめんな筈だ。

いくら学校に行く途中でバス停までスーパーロボットのメイドに送ってもらい、バスには俺が乗っているとはいえ、普通の神経なら安心どころか不安が勝る。

まあ、今こうやって笑顔でいられるからこそアリサ嬢の成熟した身体に釣り合わない精神年齢と釣り合っているのかもしれないが。

もしくは、俺を無意識的に守ってくれるものとして認識してしまっているのかもしれない。

だから多分俺にべつたりとくつついているのだ。

いわば生まれたての赤ん坊が母親に抱かれて安心するように。

というか俺の心情的にはまだまだ小さい子だから今頑張られても

恋愛対象ではないのだよ、月すず。

流石に俺もロリコンとはいえ、小学生は対象外です。

たえ俺の見た目が今小学生だとしても。

そして精神が肉体に引つ張られそうになっている今現在でも。

第二十三話 月すず救出（後書き）

アリサにフラグを……アリサに……え、すずか？
どうしてこうなったのか。

何というかハーレムエンドの可能性が見えてこなくもない。
どちらにしてもヒロインはアリサのはず。

そして知りたい。

A・S編が終わったら、残りの小学生時代と中学生時代はやる必要があるのか？

作者としては恋愛メインにするならせめて中学生、高校生にならないと何も書けないと思うのだが。
誰か教えて欲しい。

そして追伸としてずっと前に予告だけしてやらないことになったぜ
口魔の設定。

主人公は原作知識ありの少年。

憑依先はルイズ（男）。

そしてひたすら内政チートを目指しつつ、来るべき使い魔召喚では
セイバーを狙う。

というのを書いてみようと思っていたら、すずかヒロインとかアリ
サヒロインとかやっているうちに没に。

終わったら書いてみたいなあと思ってみたり。

第二十四話 名前を呼んで（前書き）

クロノの扱いが酷い件。

そして今回はさすが無双。

そして後書きまで読んでいる人はいるのだろうかと思つ今日この頃。
でも後書きは書く。

第二十四話 名前を呼んで

おっけー。

とりあえず言いたいことはたくさんあるがこれだけは言っておこう。

月すずを救出してから十日、アプローチが半端ないことは前にも言ったが、見くびっていた。

何をつて小学生が出来る事をだ。

たかが小学生と侮ることなかれ。

とてもとても口にする事さえはばかれるような事を月すずはやってのけた。

いや、こう言つと誤解があるかもしれないが、とにかく俺、たじたじである。

しかも月すずの実力を見誤っていたばかりか、問題はそれだけではないのである。

その月すずの一番の親友を自称しているアリサ嬢が彼女に協力しているのだ。

しかも新しいおもちゃを見つけた子供のようなとてもいい笑顔で。

「あの一、月すずさん？ 退いてもらいたいんですが……」

いや、思わずさん付けをしてしまうくらいに俺はしてやられています。

というか、俺が弁当を持ってきてない事に味をしめたのか、この娘毎日手作りのお弁当を持って現れるのです。

いや、俺としては嬉しいよ？

可愛い子が俺の為に尽くしてくれているというのは。

しかも作つて来る弁当も美味しい。

どうだ羨ましいだろ！

……まあ、これだけだったら羨ましいで事が済むかもしれないけど。

問題はこの娘が事あることに俺に接触しようとして来て、なおかつ今現在でも俺の膝の上に座っている事なのです。

「すずか、って呼んで？」

一応何でフラグが立ってしまったのか流石の俺でも理解できている。

恐らく月すずの頭の中ではあの時助けに来た俺は白馬に乗った王子様なのだろう。

正確には龍に乗った殺し屋だった訳だが……。

まあそんなことは置いて、流石にこの状態は些か異常過ぎやしないだろうかと思ったのでそのところを女神様にお尋ねしたら言葉を濁されて「あの子もそういう時期なのよ」と返された。

何がそういう時期なのか全く理解できない。

というか、高町兄と女神様は原因に心当たりがあるらしいが、アリサ嬢はこんな風になる月すずは初めて見るという。

しかも、女神様に至ってはこのままくっつけと思っている節がある。

あんたも姉ならこんなろくでもない殺し屋なんか妹が引つかからないようにしっかり見守っておけ。

とてもそう言いたい。

大体、俺みたいなのと一般人がどう考えても釣り合はずがない。仕事に殺し屋だったような奴だ。

深窓の御令嬢を外見だけでなく内面でも体現している月すずに惚れられる要素などあの一件以来は何もないのだ。

まあ、熱に浮かされた恋だろうからすぐに醒めるだろう。
初恋は実らないものだ。

「ではすずかさん、退いていただけないでしょうか？」

「やー」

……その仕草が可愛いから困る。

これが可愛く無い子なら普通に押しのけられるんだが月すずは可愛いから手に負えない。

というかロリコンだと自分でも認識している俺としては骨抜きにされてしまう訳なのですよ。

まあ、ロリコンだといつても同年代だから問題ないけど。
それにしても可愛いなちくしょう。

「あれ？ 雨……」

ここで雨というのは非常にマズイ気がする。

ちなみに今は休みの日だからということでも木の化け物が居た公園に来ております。

前回俺が異常にもキレていた理由がここに来たら分かるかもしれないと思っていたのだが、結局月すずの相手をするだけで何も収穫は得られなかった。

今この場で雨宿りが出来るような場所は大きな木の下で葉を影にするだけ。

でもってそこに移動したのだが、雨がやむまで待つか或いは鮫さんに迎えに来てもらうしかないだろう。

せっかく三人で鯛焼を食べていたのに何で急に雨が降って来たのか……そんな兆候は全くなかったと思うが。

雨雲は……海の方か。

雷の音と波が荒れてる音の二つが聞こえる。

後は……音が消えた？

どうして……ってもしかしてまたあの宝石がらみか？

何で最近こうして事件に巻き込まれる事が多いのか。

しかも俺が解決しようとする周囲の奴らが殺しはダメって言うからなあ。

殺した方が楽なのに。

ま、そんな事より問題はあの嵐だろう。

いきなり消えたということは例の“円”もどきで内部と外部を隔てて嵐をあの中に閉じ込めたのかもしれない。

アレの威力は身をもって体験している。

いくら時空管理局とやらが来ているとしても樂觀視は出来ない。

むしろ、ここまで来るのが遅れた組織に全て任せるという方が不安でしかない。

そう考えると自分で中に飛び込んで積極的に介入した方が良いのか、それとも静観する方が良いのか。

いずれにしても高町が関わってくることは間違いない。

……俺って以外に損な性分してるかもしれないな。

殺し屋としては繋がりを持つことはやってはいけないことだが、まあ今の俺は殺し屋ではなく護衛として雇われているし、可愛い子が怪我をするかもしれないというのを放っておけない。

「ありゃヤバいって……」

何があつたかは知らないが、どうやら“円”もどきが崩壊したらしい。

中の嵐がここからでも目視できる。

ここから見える限りではあの嵐をどうにかしようとしているのは金髪少女のフェイトと犬になってるあの犬耳お姉さん。

いや、もしかしたらあの二人が宝石を手に入れようとして不可抗力であの嵐を起こしたのかもしれないが。

どちらにしてもアレはヤバイ。

目視できるだけでも威力がどんどん増している。

“凝”で見る限りでは周囲のエネルギーを取り込んで自分のものになっている。

オーラと魔力の違いはそう言う所にあるのかもしれない。

まあ、分析している場合ではないが。

「えと、すずかさん？ 出来れば離していただきたいのですが」

とりあえず最初は頼む事から始めよう。

何事においてもいきなり力を使うのはマズイ。

誰か知らないがどこぞの偉人も言っていたはずだ。

まずコミュニケーションは会話から始まると。

「……どこか行くの？」

グボハッ！

か、可愛い。

何でそんな小動物みたいに俺の事を見るんだ……。

「アリサ嬢、何とかして」

「あら、すずかじゃ不満なの？」

「いや、不満とか何とかよりもあの嵐何とかしないと此処にいたら

死にますよ?」

ま、そんな確率は殆どないと思うが。

「……ここから逃げればいいんじゃないの?」

「ま、確実に追いつかれますけどね。あれも超能力の一種だと考えた方が無難ですよ」

いや、間違いなく魔法が関係しているだろうけど。

超能力なんかではなく。

というか月すずを俺に焚きつけるの止めて下さい。

そしてあの嵐がアリサ嬢にも見える距離にあるということとはつまりはここもアレを何とかしなければ危険な場所であるという事。

……迷ってる時間はないか。

「ま、先に謝っとくよ」

手刀を一閃。

月すずの首筋に打ち込んで気絶させる。

そのまま上足底で回転してアリサ嬢の首筋にも同じように手刀を打ちつける。

二人が地面に倒れ込む前に受け止めて、傍にあったベンチの上に寝かせる。

「あ、あれ……何で……」

どうやらまた手加減のほどをミスってしまったらしい。

月すずが未だ意識があるようだ。

だがそれでは困る。

ここから先は魔法或いは念の世界なのだから一般人は入って来るべきではない。

もう一度、今度はミスらないように先ほどよりも力を入れて手を翻させる。

その一撃で月すずはくらっとなり、アリサ嬢と同じように倒れこむ。

それにしても加減をミスするなど俺らしくもない。

いくら近接戦闘が苦手だといっても、二度も続けて加減をミスする事などあるのだろうか。

まあ、今のところはそれが事実なのだが。

「さて、ホントにヤバいな」

あれの威力、ここから見る限りでは一つ一つの竜巻がゴンの“硬”の威力ほどある。

そんなものがここに辿り着くまでに威力を増して街に当たってしまったでは離しにならない。

というか時空管理局とやらは何をしているのか……まさか高町に全てを任せたなんてことは……あり得そうだから怖いな。

——『龍頭戯画』

ジジイの能力を最近は空を飛ぶことにしか使っていないような気もするが、まあそう言う能力なのだから仕方ないだろう。

と、それよりも嵐との距離を詰めた所で魔法使い——あ、いや、魔導師？ とか言うのが十人ほど登場した。

どうやら重い腰を上げて漸く事態の鎮静化に乗り出したらしい。

「高町、久しぶりだな」

「え、あれ？ ミルキ君！」

どうしてここに、と言わんばかりに驚いているがそれも仕方ない。さっきまで“絶”を使っていたし、何よりも魔導師にはオーラが見えない。

つまり俺は対魔導師戦においては最強どころか無双出来る。いや、そんなことは今はどうでも良い。

「このままだとアリサ嬢と月すが死ぬので手伝いに来た」

これは本当の事。

俺がここでこの嵐を食い止めなければ後に控えている二人は確実に死ぬ。

オーラの流れから見ても、この十数人を従えているあの時のクソ餓鬼はともかく、他は全く役に立たない。

これだったら同じ人数だけ高町が居た方がマシだ。かと言ってあのクソ餓鬼が使える訳でもない。

オーラの流れだけで言えば高町よりも金髪幼女よりも綺麗だが、ただそれだけ。

この嵐を食い止めるにはそれ以上のオーラ量が必要だからこのクソ餓鬼では話しにならない。

「高町、俺が空中に立つ方法はあるか？」

「えっと……今私が立ってる所の横に立てば大丈夫だと思うよ？」

一瞬の間に傍に居た金髪の男に確認したのだろう。

彼が頭を縦に振ってから高町が俺に答えた。

言われたとおりにそこに立ってみたら、どうやら空中に立つ事が出来た。

こんなことが出来るなど、魔法というのは意外に応用力が高いのかもしれない。

「高町、それから金髪幼女、封印とやらは出来るのか？」

「私は後一回くらいしかできないの」

「……私も」

それは困った。

この二人が頼みの綱だったのだが……でも一回だというのならある程度威力を抑えれば二人いっぺんに封印とやらをしたら意外にいけるか？

俺は封印とやらは出来ないけど、この嵐をどうにかすることは、つまりはエネルギーを霧散させてやることは出来るはずだ。

オーラも魔力も同系統のエネルギーならより強いエネルギーを別方向からあらぬ方向へぶつけることで流れをシャットアウトできるはず。

「なら俺がアレをどうにかするから二人で同時に何とかしてくれ」

この際そこらへんでぎゃあぎゃあ言っているクソ餓鬼は無視。

どうせ頭が固いだろうから何を言っても無駄だ。

今は一分一秒と惜しい時なのに何で少しでも高町と金髪幼女の負担を減らそうと動かないのか理解に苦しむ。

……ああ、そうか。

オッサンの言っていた通りに管理外世界だからどうでもいいのか。一瞬俺と同じように殺し屋の思考でも持っているのかと思ったが絶対にそう言う訳ではないから管理外世界を蔑視するということでは間違いない。

「行くぞ……『龍星群』」

無数の小さなオーラの龍を上空から雨のように降らせて広範囲に無差別の攻撃。

一つ一つがコンクリートの建物を突き抜けるような威力を持っているから、その効果のほどは言うまでもない。

ましてや込められたオーラは俺のオーラ量に物を言わせた物量作戦。

それが竜巻によって回転していた魔力を上空から下方に霧散させることで、一つ一つの竜巻の威力が収まる。

やがて無風になり、その瞬間に待ちかまえていた高町と金髪少女が同時に封印をする。

結果だけ見れば成功。

だが、俺が手を貸してやったのことで封印を終えたことからすれば、全くのミス。

もしも俺がこの場に居なかったら間違いなく海鳴という地名が地図上から姿を消していただろう。

いや、もしかしたら街の方から感じる監視の視線の主が手伝ってくれるのかもしれないが。

それにしてもこちらもかなりの使い手だ。

“絶”を使っている訳ではないだろうが、一般人にしては気配を完璧に遮断している。

まるで野性の動物のようだ。

が、いまはそれに構っている場合でもない。

ベンチに寝かせているとはいえ、アリサ嬢と月すずを置いてきたのだ。

一刻も早く二人の所に戻って家に帰り、まずは温まらなければ。

「あ！ 待て！ 何処へ——」

「——うるさいぞクソ餓鬼。去れ。でなければ今ここで死ぬか？
……言葉も発せないか」

役に立たない癖に口だけは立派なことだ。

まあ俺のオーラに当てられたのだから口を開けなくても当然かもしれないが、それでも礼儀というものがあるだろう。

俺が言うことでもないが。

まあ、こんなクソ餓鬼に構っている時間も惜しい。
帰るとしよう。

第二十四話 名前を呼んで（後書き）

すずかがすぐヒロインしている点が気にかかる。

というかアリサはどこに行ったのだろうか。

そろそろヒロインとしての片鱗を見せてくれないと困る。

で、夏休みの間にA's編まで終わらせることができたのでここにご報告。

ちなみに34話でA's編は終わり。

その先は中学三年にして、ようやく恋愛がらみ。

どうにかしてアリサをヒロインにしようとしているのに、フラグを立てられない。

誘拐イベントはもう消費してしまったし。

ということでは小学生ではいくらなんでもまずいから中学生になってもらいました。

こうご期待。

それから、一話ごとの感想が最近では5を超えるようになってきました。

毎日書いてくれる方々、恐縮の限りです。

そろそろ総合評価が四ケタに届きそう。

目指せ2000越え。

そして意味もなく質問してみたり。

あなたはリリカルなのは声優の中で誰が一番好きですか？

作者は……奈々さんかな。

ちなみに一番好きだった時代はメモオフのほたるをやっていた時。

奈々さんが好きな人はニコニコに“ほたるのおしゃべり3D”とい

うものがあるのでぜひ探して欲しい。

ちなみに聞く時は周りに人がいないことを確認してから。
ニヤニヤしてしまうから。

第二十五話 監視とゆすり（前書き）

前回の結界が決壊したことにツツコミを入れられたのでここで解説。
あれは完全なるオリ展開です。

理由があるわけでもなく。

というか書いているうちにそついう展開があっても良いんじゃない
かと思って。

言い訳でした。

第二十五話 監視とゆすり

竜巻事件とこの後呼ばれる俺の無双タイム——ではなく、あの嵐をどうにかして月すずとアリサを家に連れて帰って、雨で多少は服が濡れてしまっていたので二人を風呂に入れた。

あ、ちなみに俺が入れた訳ではなくそこはメイドさんをお願いしたので勘違いしないように。

まあ、俺が入れてやっても良かった……嘘です。

とりあえず二人が俺に気絶させられた事を覚えてなかったことは良かった。

一応覚えていた時の為に言い訳その他は考えておいたのだが、無駄になって良かった。

でもって、二人が目を覚ましてから月すずをアリサ嬢が送りに行くということでそれについて行きました。

まあその時に色々とあったんだけど……いや、無かった。

うん、月すずに泣きつかれたとか小学生にあるまじき行動は一つもなかった。

まあ、後二三日もしたらこの症状が治まるという女神様の言なので明日か若しくは明後日あたりになったら月すずも正気に戻るだろう。

そう信じたい。

「送信、と」

「アリサ嬢、何か良い事でもあったのか？」

「別に、普通のメールよ」

その割にはメールを送信する時にかなり嬉しそうだったけどな。鯨さんもバックミラーをのぞき込んで顔を微笑ませているし。流石にバーニング家に長年使えているだけはある。

アリサ嬢の表情を見ただけで何があったのかを把握したのだろう。

「あ！ 鯨島、ちょっと止めて！」

車が停止してから、アリサ嬢が自分で後部座席の左側の扉、自分に近いほうの扉を開けると山道に入ってしまった。

一応何も気配は感じないから車に乗っている時では警戒していなかったが、何かを見つけたのかもしれない。

そう思って“円”をして見れば、アリサ嬢が向かった先にはあの犬耳お姉さんが犬形態になって地面に伏せていた。

オーラからして、かなりの大けがをしている。

「やっぱり大型犬」

「腹のあたりに怪我をしてるな」

傷口からして、何か細いもので撃ち抜かれたのか？

いや、背中側まで傷が無い所を見ると貫通している訳ではないのだろう。

となると、衝撃が内部で止まったのだろう。

「まだ生きてる。鯨島」

「心得ております」

口から吐血している所を見ると、内臓の一部にも傷があるのだろう。

犬耳お姉さんを鮫さんが車まで運んで、助手席をギリギリまで倒してそこに寝かせる。

起き上がって嘔みつくという事もないだろうが一応念の為とは、鮫さんの配慮。

急きょ進路を変更して家から動物病院へ。

その間、ぬこを犬耳お姉さんの傍に置いておく。

アリサ嬢は危ないと言ったが、バーニング家の大型犬にも順応していたぬこを思い出して大丈夫だと判断したのだろう。

ぬこの事を撫でながらも心配そうに犬耳お姉さんの事を見ていた。

吐血しているといっても呼吸が出来ている所を見るに、器官に血が入り込んでいる訳ではないらしい。

多分、内臓のケガといっても消化器官の方だ。

まあ呼吸が出来るのなら死ぬ心配はないし、あばらの付近の骨も折れていないのだろう。

人間で言うところの二の腕の付近も怪我をしてるがこちらは外傷だけだ。

医学の詳しい知識はないが、一応人間を殺す仕事をしていたのだから身体の事に関してはそれなりに詳しいつもりだ。

壊し方でも人間限定だけだ。

まあ、この犬耳お姉さんは人間形態にも慣れるみたいだからその知識も役に立つだろう。

あ、今日は高町が久しぶりに学校に来ていました。
ということは宝石集めは終わったのだろうか。

高町はアリサ嬢に心配をかけた事を誤っていました。

そしてそれを素直に喜ばずにそっぽを向いて嬉しそうにしている
アリサ嬢。

可愛いよ。

ま、それはともかく今現在、俺は高町に詰問されています。

最初はこちらの方を見て何やらやっていたみたいんだけど、首
を傾げてからこっちに歩いてきて話しかけてきました。

こんなことが前にもあったような気がする。

具体的には高町が学校を休む前に。

「ミルキ君！ 話を聞いてなの！」

そう言えば高町は語尾になのを付けるのがデフォルトなの？

……俺がやつても気持ち悪いだけだな。

「はいはい。聴いてるって」

もう嫌ってほどに耳に入ってる。

しかも聞いているどころか聴いてるって。

「何でミルキ君魔法が使えるのに念話にんえてくれないの!？」

「ダウト。魔法？　んなもの使えないから。それに念話？　交信の事か？」

何がダウトなのか分からないが。

それよりもいくら俺が空を飛んであの嵐をどうにかしたからって安易に魔法という言葉を使うのは良く無いと思います。

まあ俺が知っていたから良かったものの、もしも俺が一般人だったりしたらどうするつもりだったのだろうか？

「え？　あれ？　でもミルキ君空を飛んで……ジュエルシードも……ふええ？」

いやー、良い感じに混乱しているうえにふええとか可愛い。

やはり高町もアリサ嬢や月すずと同じように将来有望だ。

魔法という特殊技能もあるのだから出会いもたくさんあるだろうし、これは一番最初に男を作るのは高町か？

あ、でもあの父親と兄貴が居るのか。

「ちよつとこつち来い」

いずれにしてもこんな人気の多い場所で話す内容ではない。魔法なんて単語を誰かに聞かれたらどうするつもりなのか。やはり高町は強化系だったか。

「あんな所で魔法とか大声で言うな。で、何の用だ？」

「えと、魔法の事は知ってるんだよね？」

「ああ、MPを消費して使う奴だろ？」

「ち、違うの！ ミルキ君が空を飛ぶ時に使ってたもののな」

「ありや魔法じゃなくて、超能力の一種だと考えた方が良い」

まあ超能力と魔法の区別なぞつかないかもしれないが。

確かに俺は空を飛んでいたがその時に乗っていた龍の事は見えなかったのだろうか？

魔法で空を飛ぶ時は魔力を身体に纏わせるとい話しを聞いていたから、俺が龍の背中に乗っていたといことは空を飛んでいたのではなく運んでもらっていたという事がわかりそうなものだが。

でもこのタイミングで高町一人が俺に話を振ってくるということとは聞きたいことは俺が魔法を使うかということではなく、あの金髪幼女との関係なんだろうなあ。

時空管理局とやらに協力している節が高町にはあったから多分あの金髪幼女と戦っていた高町にしてみれば、俺は今のところ犯罪者なのか？

「えっと、フェイトちゃんとは友達なの？」

「フェイトってのはあの金髪幼女の事か？」

「そ、そうなの」

「友達でも何でも無いな。第一初めて会ったのはお前らがあの宝石を取り合って不味い事になってた時だし」

やはりこの話題を聞いてきたか。

一応周りに注意は払っているのだが、どうやら監視されている様子はないようだ。

ということは高町に搦め手を要求したのだろうか。

時空管理局にしてみれば俺は犯罪者に手を貸し、さらにはあのクソ餓鬼を殺そうとした危険人物でなおかつ得体のしれない力を使うときた。

それなら俺と知り合いの高町が何かを聞きだす役に選ばれたとしても不思議ではない。

それは俺の主観としてだが。

客観的に見れば、無差別殺人者かもしれない奴の所に年端もいない幼女を送り出すというのは頭がいかれているとしか思えない。

例えあの瞬間に金髪幼女を救っていたとしても。

「えっと、怒らないで聞いて欲しいんだけどね？」

あ、監視されてる。

方向は……高町の後ろの方。

つまりは俺を真正面から捉えられる位置か。

だけど誰か人間が俺の事を監視している訳ではないようだ。

このへんな感じは、カメラとかそういう類の物。

魔法があるのだから、監視用の魔法があったり、あるいは進んでいる技術で秘匿性の高いカメラがあったとしても不思議ではないかでも今の今まで気が付かなかったということは、それまでは何もする気ではなかったけど、高町が俺に話そうとしている内容によつては彼女が危険な目にあうかもしれないということか？

「私がお手伝いしてる人達の話聞いて欲しいの」

「時空管理局か？」

「そ、そうなの！」

「あり得ないな。第一俺は今は冷静だけど、もう一度あのクソ餓鬼とあつたら殺すかもしれない。それに奴らが本当に時空管理局という組織であるかどうかはわからないし、何よりも本当にその組織であつたとして、この間はこの街が危険にさらされていた。俺が介入しなければ海鳴という街が地図から消えていた。分かるか高町？ お前の家族も、アリサ嬢も、月すずも、皆死んでたかもしれないんだ。そんな組織の話しを聞く必要がどこにある？ 俺にしてみれば一刻も早くあの危険な宝石を自分の手に集めようとしてる金髪幼女の方がまだ好感が持てる」

「それは……そうだけど」

饒舌になつて喋りすぎたか。

それに何で俺は自分で言っておきながら自分でキレてるんだ？

アリサ嬢と月すずが死ぬかもしれない一歩手前まで行つたから？

それとも高町が危険な目にあわされているから？

はたまた金髪幼女がいきなり攻撃されたあの事に怒っているのか？

これじゃあただのロリコンじゃなくてこいつらの中の誰かを俺が好きみたいじゃないか。

そんな事があり得るのか？

……くそつ、考えても分からないな。

「分かつたら諦めることだな。授業が始まるから遅れない方が良さぞ」

とりあえず高町が諦めて、放課後になってからアリサ嬢が高町を家に招いてお茶をすることになった。

ぬこは相変わらずアリサ嬢の家で彼女のお世話になっていて、月すずとアリサ嬢に可愛がられている。

そしてアリサ嬢が高町と月すずに昨日助けた犬耳お姉さんを紹介してから、イタチが何故か月すずの腕から抜け出して犬耳お姉さんの事をじっと見つめていた。

で、高町の話しによれば心配はいらないとの事。

俺はずっと少しだけ後方から三人娘を見守っておくことにしている。

ちなみに月すずは女神様の言ったとおり正常に戻った。

で、今まで自分がやっていた事を思い出して顔を赤くしていたりした。

でも、あれは彼女の気持ちが増幅された形であるらしく、積極的なアプローチが消極的なものに変わっただけになった。

俺としてはどちらも可愛かったから捨てがたいが。

「ミルキ、何でピリピリしてるのよ」

「分かりますか？」

俺の問いにアリサ嬢と月すずが頷く。

どうやら短い付き合いの間でも俺の仕草を正確に把握するぐらいに観察眼は高いようだ。

「ま、気にしないでゲームを続けて下さい」

高町と犬耳お姉さんがあってから、この家——というよりはあの犬耳お姉さんが監視されているのだ。

そしてこれ幸いとはかりに、俺にも監視の目が向けられている。嫌でもピリピリせざるをえない。

もしもこの家に害を為すならさっそく除外する準備もある。

オッサンには悪いが、俺に下された依頼はアリサ嬢の護衛。

もしも俺のせいで被害が及ぶのなら少し離れた所から護衛を続ければ良いのだが、あの犬耳お姉さんが監視されていて、アリサ嬢が大型犬を保護するといっている間はこの家を離れるわけにはいかない。

ならば、監視の目を向けている人物を殺してしまうのが一番手っ取り早い。

考えていても仕方ないか。

「アリサ嬢、少し出かけてきます。五分ほどで戻らと思うので」

犬耳お姉さんの方をどうにかしよう。

それをどうにかしたら監視の目はなくなるはず。

アリサ嬢が犬耳お姉さんの怪我が治るまではこの家で保護するといっていたから、この家からあの犬をどけることは出来ない。

まあ、傷を治してやればいいのかもれないが。

「さて、そこなイタチ少し退いてろ」

こいつのオーラの流れ、誰かに似ているような気がするのだが……
まあ所詮記憶に残らないような人物のものだろう。

「犬耳お姉さん、少しお話がある。実はあなたが監視されていて、それで俺も監視されていてその視線がウザいんだが、それをどうにかする手立てを思いつかないものだろうか。というか、高町の話しによれば魔法では念話とか言う事が出来るらしいのでそのあたり、監視している奴らに向けて何とか言って欲しい」

大型犬が当たりを見回して、監視の視線があるかどうかを確かめている。

そしてそのまま口を開いた。

「それは無理な話だね……済まない。私は罪を犯してるんだよ」

犬が言葉を話すというのは見ていて不思議なものだが、そんなことは今はどうでも良い。

「なら仕方ない。監視している奴らを皆殺しにしよう。アリサ嬢に害を為すなら排除しておかなければ」

「ま、待つてくれないかい！」

「何？」

「それは困るんだ。今管理局が居なくなるとフェイトが……」

「じゃあ監視を解いて」

あの金髪幼女の事も心配なことは心配だが、今の俺にとって第一は護衛対象のアリサ嬢だ。

例えば俺のせいだとしても被害が及ぶような要因は原因になる前に排除しなければならない。

が、やはり監視されている対象が監視している奴らに監視しないように頼むというのは些かムリな話だったか。

まあ、ここに来る前から分かっていたことだ。

そんな分かりきった事を試す為にここに来た訳ではない。

ジャック？ え？ ジェイク？ まあ、名前なんてどうでも良いだろ

電話を繋げた相手はオッサンの護衛を担当しているジャック改めジェイク。

監視されているのなら俺の言葉も時空管理局には聞こえている筈だ。

それが元々の狙い。

それより頼みたい事があるんだ。時空管理局ってあっただろ？

あそこに今この家が監視されてて……そう。……いや、アリサ嬢が助けた犬が監視対象で俺もついでに監視されてるの

全く失礼な奴だ。

俺がその組織相手に喧嘩をうったからだと思うとか。

まあ、半分ほどその理由が含まれてるんだろっけど。

で、オッサンに頼んで揺すりをかけてもらって。幾らでも証拠はあるから

これで姿を現さないか。

予想が外れたな。

まあ、姿を現さないのなら姿を現さないで、こちらから時空管理局に圧力をかけるだけだ。

いくら管理外世界とは言っても、オッサンはこの世界の代表のようなもの。

いざとなったら武力行使に訴えても良い。

というか監視の目が解かれないのは予想外だ。

俺としてはここでどちらへの監視も解けると思っていたのだが。

まあ、こちらに証拠が無いとも思っているのだろう。

第二十五話 監視とゆすり（後書き）

管理局はミルキの言葉くらいでは屈したりもしない。

そしてリンディはミルキ——というかバニングス家が管理局相手に取引をしていることを知っていない。

という設定。

つまり、管理外世界を取り仕切っている会社の社長さんの名前なんて覚えて無いよということ。

リンディもクロノも例にもれず、管理局は管理外世界を見下すということにこの小説は設定されています。

ということと分かりにくいので、そして原作を知らない人もいるので人物紹介とかやってみようかと。

もしかしたら今日明日に乗せるかもしれません。

第二十六話 時空管理局（前書き）

いろいろと矛盾していたり、設定がおかしくなっています。が突っ込まないでやってください。

第二十六話 時空管理局

とりあえず、次元震とか言う事が起こって地球では理解不能な地震が起きて、意外にそう言うことが怖いしかったアリサ嬢がぬこを抱きかかえて布団で丸まっている間、俺はというと予測不能な事態に対応するためにずっとオーラを研磨していた。

自信の原因が次元震とかいうものだということを知ったのはジャックに教えてもらってから。

その時まではエネルギーの何か不安定さが地震を引き起こしていたから念で対抗しようと思っていたのだ。

ま、そんな事はともかく今はアリサ嬢の母親と一緒にミッドチルダとか言う時空管理局の地上本部がある所に居る。

ま、ここに辿り着くまでには時空が安定していないからとか言うことで数カ月かったのだが、今は本局とやらに行くのを待っているだけだ。

ちなみにアリサ嬢の母親は日本人で、理彩という名前らしい。

だから娘の名前を付ける時に母親の文字をなぞってアリサにしたのだとか。

まあ、今はそんなことはどうでも良いか。

ちなみにアリサ嬢の護衛はぬこに任せてある。

一応高町の姉には勝てるくらいの实力があると判断されたので、オッサンも安心してくれた。

それよか、アリサ母は次元世界を飛び回っていて、仕事はデザイナーをしているらしい。

ここミッドチルダでも人気のデザイナーなのだとか。

「で、本当に気にしないんですか？ 娘の護衛の係が元殺し屋だったのに」

「いいのですよ。あの人が決めた事なら私は信用しているし、何よりも貴方の目を見た時に信用できる方だと思いましたから」

この人ええ人だ。

オッサンはこんな人をゲットできて本当に幸せ者だ。

この間会った時はしばかれてたけど。

まあ、オッサンが何かやったのだろう。

「それよりも貴方にはアリサちゃんを貰って欲しいですね」

「……あの、言いましたよね？ あの事」

そう、アリサ母、とてつもなく鋭いお方なのである。

ということでおッサンにも話していなかったのに、俺が見た目よりもずっと年を食っているということがばれてしまったのだ。

何でこの人にばれたのか、今でも分からない。

まあ、ニュータイプっぽい人だから直感で気付かれたのかもしれないが。

「年の事ですか？ それでも関係ないでしょう。お互いがお互いを思う気持ちさえあれば」

「いやいや。関係あるでしょ。大体親として元殺し屋に娘を、ってのもおかしいと思いますけど」

それに間違ってもアリサ嬢が俺に好意を持つことなどあり得ない。あれは普通の人間だ。

普通の感性からしたら、皆殺しにして何もかもを解決しようとする俺の事など怖がっても好きになることはあり得ない。

「それにアリサ嬢が俺を好きになることはあり得ないし、俺も彼女のことは護衛対象以外の目では見ないと思いますよ」

ポンズが良い例だ。

結局のところ、俺は多分ゾルディック家の教育によって人間を男女で識別するのではなく、殺す相手が殺さない相手かで識別しているにすぎない。

可愛いとは思うものの、それが好意から愛に発展することはない。得ない。

「そうかしら。でもアリサちゃんも貴方の事を随分と気にいつてるみたいですよ？」

「それは俺の力のせいでしょ。それから玩具として見てるだけ。第一それを言ったら月すずの事があるから益々アリサ嬢が俺の事を好きになる可能性はないと思いますよ」

そんな事になったら幼馴染で親友のドロドロ三角関係？
うわー、いやだねー。

「あら、それならここに三人で住んだら？ 重婚も認められているみたいですよ」

あんたも親なら止める。
本当にそう言いたい。

そして俺が人を好きになる可能性が皆無な以上、そういう関係に発展する事もないと思いますって。

「俺が彼女らを好きにならないなら可能性が無いでしょう」

「なら賭けをしませんか？」

「賭け、ですか？」

アリサ母、無駄に若いからどっちかというとアリサ嬢よりも貴方の方に気持ちが傾く可能性の方が俺は高いと思います。

まあそれもないことだけど。

「そうです。私は貴方とアリサちゃんが高校生になる前にお付き合いする方に。貴方はそうならない方に」

「良いでしょう。で、勝った方は？」

「何でも相手の言うことを一つ聞くというのはどうでしょう」

「ま、俺は文句ないですけど。……ちなみに自分が勝つという根拠は？」

「勘です」

だろうね。

ニュータイプの疑いが俺の中ではあるから。

というか勘御ときに頼ってそんな賭けをしても良いのだろうか。

やはり侮りがたし、バーニング家。

時間と場所は移って数日後の時空管理局本局へ。

思っていたよりも早く本局に文句を言いに来る事が出来たのは、アリサ母を通じて、地上本部とやらのお偉いさん、レジ……レ……顔のいかついおっさんと知り合いになれたからだ。

何でも本局と地上本部は仲が悪く、俺が本局に文句を言いに行くと言ったら、すぐにいけるようにしてくれて、しかも一緒に対策まで練ってもらえた。

顔はいかついけど、意外とやさしい所もあるのかもしれない。

まあ、地上本部の為になるという利害関係の上で成り立っているのだろう。

ということで案内された先で俺の事を待っていたのは時空管理局の理事官数名と統幕議長、そして今回の件に関連しているハラオウン親子。

とは言っても、理事官というのは名前ばかりで、いくらあのいかつい親父の協力があつたとは言っても所詮は管理外世界の住人が文句を言いに来たとしか捉えられていないらしく、ていの良い厄介払いだろう。

それは目の前に居るのが全員引退間近のような爺婆であることが示している。

ま、俺の話を聞かないようなら皆殺しにしてしまえば話を聞くよ

うになるだろう。

……うーん、その思考は不味いか？

今日はアリサ母もついてきてる事だし、迷惑をかける事になるかなあ。

まあ、武力に訴えて脅しをかけるくらいだったら大丈夫か。

「お久しぶりです、クローベル統幕議長」

口調から読み取るに、どうやらアリサ母はこの婆さんと面識があるらしい。

まあそれ自体はこちらにとってプラスにもマイナスにも働かない。重要なのはこの人が伝説とまで呼ばれている人物である事、そして役職自体としては重要なポジションに付いている事。

だから、他の理事官は放っておいてもこの人にだけ今回の事件の非が時空管理局にある事を認めさせればいい。

「さっそくで申し訳ないのですが、今日話しがあるのは私ではなくてこちらのミルク・ゾルディック君です」

「ミルク・ゾルディックです。お会いできて光荣とか、堅苦しい事をやりに来たのではないので早速本題に入らせていただきます。簡単に言えば今回は先に第97管理外世界で起きた事件について、必要性のない不当な捜査が行われ、且つそれが一般人に迷惑をかける行為でしたので謝罪及びその他慰謝料の請求にやって参りました。当方が要求する金額は日本円で100兆」

なっ、という息を呑む声が聞こえる。

まあ要求した額が額だから仕方ないだろう。

日本円では分からないだろうから、あらかじめ概要自体はデータ

にして空間ディスプレイとやらに表示してある。

勿論このまま通るとは思っていないが、やるなら徹底的にということ、アリサ母に頼んで考えうる限りの最大限の額を提示した。日本の国家予算すら越えている。

つまりは、時空管理局にしてみれば対価値の計算で言えば、管理局を運営するほぼ一年分の金額を支払えと言われているようなもの。

「何故、それほどの額に昇るのか説明してもらえんだろうね」

「まあ微々たるところから説明すれば、私とその他数名に対する精神的苦痛への慰謝料。これは先ほども言ったとおり、不当な捜査、つまるところ監視と意味もない脅迫」

これは確実に搾り取れる事項。

というよりも、全てにおいて、いかつい親父と協議を重ねて搾り取れる事項しか考えてきていない。

まあ、あの親父の話しによれば今回の事件を担当していたハラウンというのは管理局でもグレーム一派に所属しているらしく、その影響力は高い。

そして、何よりも問題にしているクロノ・ハラウン執務官は時空管理局でも次世代を担うトップとして育てられているのだとか。

つまりは時空管理局が非を認めることは次代のトップを潰す事なのでかなり低い可能性だろうと。

まあ俺には関係ない。

「脅迫、というのは？ 監視については執務官と提督が認めていましたが、脅迫については否定していますか」

「その執務官が率いる武装隊十数名が私を意味もなく拘束しようと取り囲んだ事です。これが脅迫でないなら何が脅迫だと？」

「統幕議長、発言してもよろしいでしょうか？」

「どうぞ、ハラオウン提督」

「私が記憶している限りではあなたが執務官に対して脅迫をしたからやむを得ずに取った行動であるのですが。映像を流しても？」

俺がキレている時の映像が流される。

が、それは命取りだ。

いくら俺が殺すとか、心臓を抜き取るとか、そう言う類の事を言っているとしても。

「この通りに、執務官は脅迫を受けています。であれば危険人物に対して武装隊で包囲するのもやむを得ないと思われます」

「なるほど、つまり管理局としてはデバイスを持っておらず、バリアジャケットも展開していない9歳の少年に殺すという言葉を使われたから危険を覚えたと？」

そう、俺は相手を全員オーラで動けないようにしているだけだし、何よりも攻撃を加えていない。

それなのに身の危険を覚えたというだけで無抵抗な人間に対して、しかも現地住民に対して武装隊が出撃したというのは明らかに非ではない。

「しかしこの映像から分かる通り執務官は動けなくなつて——」

「動けなかったら危険なのですか？ 無抵抗な年下の現地住民に対して執務官が恐怖を覚えたというだけで武装隊を出撃？ 笑わせる

な」

いかな。

段々キレてきた。

俺もこの沸点が低い癪を直した方が良いな。

「……その点に関してこちらに非があったことは認めましょう」

「統幕議長！」

「ハラオウン執務官、仕方ないですよ。貴方は言葉で脅されて身動きが取れなかったただけだ。……ゾルディックさん、他になにか？」

「では続いて本事件に協力した高町なのはが危険な目に会わされていたことに関して」

「それは！」「執務官、発言は控えるように」くっ！ 申し訳ありません」

まあ、奴らにしてみれば高町が自主的に協力したのだから非はないと思うだろう。

しかし、事は地球で起きていたのだ。

「そしてそれに関連して、まず最初に管理局のロストログア、ジュエルシードの確保に対しての行動の遅さ。これは言うまでもない。デビット・バニングス氏が再三の警告をしたにも拘らず聞き入れることなく、スクライア一族からの報告で漸く動き出したという事」

これに関しては疑うべくもない。

実際に記録としてオッサンが警告をしたことは残っているのだから

ら。

「そして高町なのはがロストロギアの封印を行っていたという事実。ユーノ・スクライアの協力があったとは言え、本来なら仕事として封印を担当するはずの武装隊が出撃したのは私を包囲する時。何のために武装隊が居るのか」

「統幕議長！ 異議があります！」

「執務官、どうぞ」

「高町なのはは自身の意思で協力の意を示しました！ ですから例え危険な目に会っていたとしても本人の意思を尊重すべきであり、我々に何ら非はありません！！」

こいつは筋金入りの阿呆だな。

頭が固いばかりで柔軟な思考を取れていない。

「高町なのはの言によれば、そこに居る提督が高町なのは自ら協力をするように誘導したようですが。何なら彼女のデバイスに記録されているやりとりをお見せしましょうか？」

そこで提督が執務官の口を黙らせて自分で発言の許可をもらう。

まああの餓鬼に任せていたら全てが崩壊してしまうだろう。

良い経験になると思ってこの場に出したのかもしれないが、それは逆に命取りだ。

「確かにそうなるように誘導しました。ですが高町なのはさんは自らの意思で協力すると。ですからこちらとしてはそれを拒むようなことは致しませんでした」

なるほど、あの映像を流されると困る発言があるというのは自分でも理解しているのか。

先に非を認めてしまえばこの話はここで終わり。

ふむ……やられたな。

先に映像から流すべきだった。

まあ、当然のごとく非を認めたら話しはここで終わりになってしまった訳だが、未だ俺のターンは終わってない。

……ネタに走るの止めよう。

それはともかく、未だ一番大きな問題が残っている。

第二十六話 時空管理局（後書き）

感想にて最初のころと今の主人公がだいぶ変わってしまっているとの指摘を受けました。

他にもそう思われる方がいたら、意識して書いてみようと思いますので一報ください。

普通の感想もお待ちしています。

第二十七話 暴走（前書き）

かなり適當。

突っ込まれることを前提に書いている。
そして後書きにてお知らせ。

第二十七話 暴走

次の話題が今回の事件に関連して一番重要なポイントであるということで一時休憩が挟まれた。

そしてこの場に出席していた者たちはあわただしく動いている。ここまですり込められるとは思っていなかったのだろう。

しかも先ほどから発言しているのはアリサ母ではなく、一番年の若い俺だ。

アリサ母が隣でニコニコしているというだけで、未だ何かあるのではないかという疑心を浮かび上がらせる。

「ふむ、随分と手玉にしているようだな」

「やあオヤジ。おかげで一時休憩とかになったよ」

「オヤジ……もうわしもそんな年か」

一人たそがれているこのオヤジは今回の件では随分と世話になっている地上本部のお偉いさん。

何でもどうなっているか様子を見に来たらしい。

地上本部に居なくても良いのかと聞いたところ、海が良いようにやられているのを見に来たということだった。

まあ、本人にしてみれば海の失態ということで人氣が無くなり、陸に良い人材が残る事を期待しているのだろう。

ちなみに海というのは本局の事で、陸というのはミッドチルダを担当としている陸士部隊の事だ。

そう言う風に呼ばれるのが管理局の中では常だそう。

「まだ残っておるのだろうか？」

「まあでもあれはどっちに転ぶか正直分からんしな。そこは俺の腕の見せ所ということぞ」

「期待しておるぞ。おっと、管理局に勤務しているわしがそんな事を言っではいかな」

ガッハツハと高笑いするオヤジ。

どこからどう見ても悪役にしか見えない。

しかもそのまま消えていった。

まあ、そろそろ休憩時間も終わりだから俺も戻るとしよう。

「では再開したいと思います。なお、重要な案件だということですから関係者を集めて行いたいと思います」

「うっわー、状況が不味いからって数を揃えて威圧かよ。大人のやる事じゃないよなあ」

と、ばやいてみる。

まあ聞こえるように独り言を言ったからほぼ全員の耳に入っているだろう。

ここで俺がこいつらはどんな関係者だとか言っても、言葉を濁されるだけのだろう。

それにしても数十人ほど増えたのだが、そこまで俺は暴れたらどうか。

正直ここまでおおごとになるとは思ってなかったが……まあ、これで海にある派閥とやらの影響が出るとでも思っているのかもしれない。

俺には関係ないけど。

「ゾルディックさん、続きをどうぞ」

「では第97管理外世界が滅亡の危機に瀕したことについて。まずはロストロギア、ジュエルシード9つがプレシア・テストロッサに奪われ、それを持って彼女が次元震を発生させて、運よく、辛くも高町なのは等の命を擲った行動が危機を回避するに至ったことについて。これは文字通り、九死に一生を得た訳で地球が滅んでいたかもしれないという事」

「ですが結果としてその危機を回避するに提督と執務官が活躍し、何の損害も拝見できませんが」

「私は結果だけを論議の対象にしているのではない。が、そちらがまずは結果について着目するというのならそうしよう。結果としての損害で言うならば、バニングス家が受けた被害だけで50億。これは今後得られる予定だったものも含んでいます。その内訳としては、次元震による地震ということでパニックになる前にバニング

ス家が各国政府を抑える為に使った費用、地震によって各工場での損害が発生し生産に支障をきたした事、そして関係者に対して怪我をした者への保障。これだけでざっと50億」

地球出身の魔導師が管理局で働いているとはいえ、地球単位で考えた時に魔法関係でパニックにならないように対応するのはバニングス家の役割だ。

その影響で失ってしまった分は補充してもらうのは当然の権利だ。この額は水増しもサバ読みもしていない。

オッサンがきちんと額を俺に提示してきたから間違いない。

「実害として50億だったほかに、世界の危機を救った高町なのは対しての謝礼が略式の表彰という不条理、さらにはその家族に対し、命の危険もあつたのにごまかしを重ねて高町なのはの意思を尊重という、現地常識を無視した行動。ここを考えれば彼女の家族に対して慰謝料が何億か会っても不思議ではない」

「高町なのは氏の事は別にしても結局は管理局が事件を解決しているのですから我々に非はないと思います」

「というかあんた誰だ？」

「さっきまでいなかったと思うが。」

「その件に関して言えば、提督が高町なのはとフェイト・テストロッサの一騎打ちを認め、彼女をおとりとしてプレシア・テストロッサの居場所を把握しようとしたために世界が危機に瀕した。そんな手段を取らずともフェイト・テストロッサを捕縛し、ジュエルシードを確保していれば次元震が起きる事もなかったのでは？」

「というかこの件に関しては高町に聞いたことだが、正直あり得な

い。

フェイトが殺傷設定を使うことはなかっただろうが万が一という事もある。

「何よりも高町なのはが一騎打ちに負けていた場合、ジュエルシード21個がプレシア・テストロッサの手に渡り、確実に次元断層が起きていた。つまり事は第97管理外世界の崩壊だけでなく、近隣世界の崩壊にもつながっていたという事。プレシア・テストロッサの逮捕ということに囚われなければ次元震など起きなかったはずだ。もしや管理局は管理外世界なら犯罪者を逮捕する為には滅んでも良いという思考なので？」

その一言で場がガヤガヤとなり、何人かがひそひそと相談を始めた。

そう、事は地球の事だけではない。

次元断層というものがどういうものかは知らないが、それが起こった場合には時限的に近い世界がいくつも滅ぶ危険があるというのはあのオヤジが言っていたから間違いない。

ここで非を認めなければ、管理外世界だけでなく、滅ぶ危険にあった管理世界からも管理局に対して非難が飛ぶ。

まあ、俺がここで発言しただけで影響は与えていると思うが。

まさか他の世界の者にしてみれば、自分の世界が崩壊の危機にひんしていたとは思わないだろう。

今回次元震の影響が出たのは地球だけだったが、次元断層ならばそうはいかない。

高町が負けていただけでそうになっていた可能性は十分にあるのだ。俺からしてみればそんなギャンブルをするなど、あり得ない事である。

「申し訳ない。その件に関して提督、ひいては管理局に非がありま

した。ではこれで終了にして細かい数値の調整については今後も意見を交わすという――」

「――おい、ふざけるな。未だ終わってない」

それだけならばオッサンに全てを任せれば良かった。

わざわざ俺がアリサ嬢の護衛を放り出してまで来る必要はない。

俺が今回の事でキレているのは世界が崩壊しそうになったからじゃない。

そんなことは俺の預かり知らない所で起きていたのだから。

それよりも、アリサ嬢と月すがあの公園に居た瞬間の嵐、あれで俺はキレているのだ。

「沖合で起きていたジュエルシードの暴走、その話が未だ終わってない」

イライラしていてもキレてはダメだと思いつつも、自分の怒りを抑えていられない。

冷静になる訓練はしているが、別に今冷静にならずとも全ての非を管理局に認めさせているから問題はない。

これ自体は俺個人の問題だ。

「その件に関しては提督から貴方の協力で事が解決したということ
で褒章を用意する準備が――」

「――舐めてんのか？ 俺が言ってるのはあの場に俺が居なかったらアリサ嬢や月すが、高町の家族が死んでいたということだ。高町の家族が死んでいたら高町は使えない状態になってジュエルシードの確保が出来なかった。そしてもしも俺があの場合に居なかったら確実に海鳴という街が地図から消え、俺がその執務官他数十名を殺

してジュエルシールドがプレシア・テストロッサの手に渡り、これまた地球は滅んでいただろう。分かるか？ 全て糸の上を歩くかのようにギリギリの綱渡りをしているんだ。高町なのはのデバイス、レイジングハートに記録されている会話ではその執務官がフェイト・テストロッサが自滅するのを待てばいい発言をし、提督がそれを肯定する選択をしている。その際に提督は私達という言葉を用いている。つまり管理局の代表である提督は犯罪者の人権を無視し、死んでもかまわないという思想の上、さらには管理外世界だからジュエルシールドが暴走した所で被害は少ないと考え、それが最善の選択だと考えた。……例え現地住民が死ぬことになっても管理局にとつては最善の選択をした訳だ。そして管理局というのはそういう組織なのだろう。違うか!!」

いかな。な。

このままだと俺が暴走しかねない。

「挙句その選択を取った上にジュエルシールドの暴走を止められず、被害は拡大。最初から封印に全力を挙げればよかったのに現地住民の安全ではなく犯罪者の逮捕に重きを置いた。提督がこれでは管理局というのも全てその思想の元に成り立っているのだろう。……私が要求するのは一つ。その執務官と提督の身柄の引き渡しだ」

何人もが息を呑み、椅子から立ち上がり、提督と執務官の前に立ちはだかる。

どうやら彼らは管理局内では可愛がられているようだ。

「……その要求だけは呑む事ができません。幾ら選択にミスがあったとしても彼らが罪を犯した訳ではない。厳罰に処分致しますのでそれでご勘弁願いたい」

「厳罰に処分？ それはつまり現地住民の命とその二人の命は同価値ではないということか？ 片方は命を無視され、もう片方は厳罰に処分だと？ 私が認めるのはその二人を死刑に処する事だけだ。さもなければ私自ら武力行為に訴える用意もある」

「……お受けできません」

なるほど、まあいいか。

こちらのというよりはバニングス家としての要求は通ったから一応オッサンへの義理は返した。

ならここから先は俺個人の行動だ。

「では致し方ない。バニングス家からは損害に見合うだけの要求を通せばいいと言われたが、これでは私の気が収まらないのでその二人は連れて帰らせてもらおうでしょう」

俺のその言葉を待っていたかのように、誰かが武装隊突入という声を上げた。

恐らく魔導師である者は全員バリアジャケットなるものに身を包んでいるのだろう。

提督と執務官の二人はどこかへ連れ去られた。

恐らくは俺から遠ざけようとしているのだろうが、まあ良い。時間をかけて追い詰めれば済む話だ。

「そこで停止して下さい。さもなければ我々はあなたを逮捕しなければならぬ」

「出来るものならやってみろ」

「……。撃て」

“堅”などこいつらには過ぎた防御。

“纏”で十分ガードし切れる。

数十の魔法弾が俺に命中するも、全てオーラに阻まれて致命傷はおろか、かすり傷も汚れもつかない。

「それが精いっぱいか、カス共」

どう見ても俺が悪者にしか見えないが仕方ない。

それでも結構我慢しているのだ。

依頼以外で人を殺したことはそう言えば無かったが、まあ誰を殺そうと邪魔をするならこいつらを除外しても問題ないだろう。

最近は殺すなって言われて誰もやってないから良い準備運動くらいにはなるだろう。

「十秒やる。その間に武装を解除しない者は敵対の意思ありとみなして一人残らず殺す」

その十秒の間に誰も武装を解除しないどころか、俺に対して少しでもダメージを与えようと攻撃してくる。

が、全てオーラに阻まれる。

正確に測っていないけど、そろそろ十秒は経ったはずだ。

「ではここに残っているもの全員が自殺願望者ということで「ミルキ君」……何ですか？」

肉体操作して右腕を刃と化した所でアリサ母から声をかけられた。何でこの場に残っているのかと思っていたが、俺と一緒に来たのだからここから逃げたとしても管理局は構ってくれない、或いは人質として使うか。

「アリサちゃんから電話よ」

そう言つて携帯をこちらに向ける。

画面には確かにアリサという文字が見える。

が、俺としてはここで縁を切るつもりだったのだが。

バニングス家と繋がりを持ったままでは迷惑をかけることになるし。

まあ、ごちゃごちゃ考えている間にアリサ母から携帯を投げられてしまったから仕方ない。

電話には出るとしよう。

何か用ですか？ こっちは今忙しいんですが

あんた今何処で何してんのよ！ ぬこが居ないのよ！？ 早く戻つて来なさいよ！

ぬこ……？ あ、あれには自律行動のプログラムも組んであるからどこかで昼寝でもしてるんだろう。

あ、時差があるから普通に寝てるのか？

どちらにしても消えたわけじゃないし、護衛の任務もちゃんとやってる見たいだが。

ぬこならどこかに居ると思いますよ。それからデビット氏には今日あたりで護衛の任を解いてもらうように言つてありますが

パパに？ そんなの聞いてないし許さないわよ！ 第一あんたは私の護衛でしょ！ いいから早く帰つて来い！！

……了解

全く我儘なお姫様だ。

それにアリサ嬢と話してるうちに興もそがれた。

急いで帰って来いとの主の命令だし、帰るとするか。

……それにしても俺も丸くなつたのかな。

「アリサちゃん、何て？」

「早く帰って来いとの事でした。……護衛は今日限りのはずでは？」

「あら？ そんな事言つてたかしら？」

なるほど、全てこの人が仕組んだことか。

あのタイミングでアリサ嬢からの電話がかかってきたというよりもこの人がアリサ嬢にかけてここに俺が居る事を言つたのか。

喰えない人だ。

電話一本で俺の事を興ざめさせてこいつらを殺すのを止めるとか。

「それで、どうするの？ アリサちゃんの所に帰る？」

「そう答えてしまいましたからね。……最初からこのつもりでしたか？」

俺が暴走するかもしれないことは伝えてあつたはずだ。

後で何か言われても無関係を装える様に契約打ち切りの紙にも署名をしたはず。

「さあ？ 私はアリサちゃんから電話がかかって来たからミルキ君に伝えただけ」

第二十七話 暴走（後書き）

中学生編、何をすればいいのか思いつきません。

というか、当初の予定では暇つぶしでやっていたことなのでこんなにも更新がはかどることは予定外でした。

作者的には詰まったところで更新停止にする予定だったので、この作品が予想以上に低評価ということもあり、後は一応打たれ弱く、感想でボコボコに叩かれてしまったのでA'sで終わりにしたいと思います。

これで作者の更新停止は二作目。

読者の皆様には大変なご迷惑をおかけします。

すずかヒロインの方は何があっても完結させますので、見捨てないでください。

それから、今までやっていたのは主人公をどういう風にするのと、後は口調、文章体の評価のされ方だったので、今までののは全部試し投稿だと思ってもらって構わないです。

もともと練習のためにやっていることなので。

で、練習も次回で最後。

次も多分途中で更新をストップすると思いますが、なにぶん練習ということなので大目に見てくれると助かります。

次回作はいつかの後書きに書いていたゼ口魔。

内政ものを予定しています。

それが終わったら一通り試してみたいことは終わったので本格的に何か書いてみようかと。

この作品の更新は35話まで、次回作の投稿は何時になるか分かりません。

また途中でやめるけど、それでもいいという人だけ読んでください。
本当にゴメンナサイ。

人物紹介的な何かを急いで書き上げてみた（前書き）

人物紹介。

ネタバレを含むのでそういうのが嫌な人は見ないことをお勧めします。

随時更新するかどうかは分からない。

衝動的にやったので。

人物紹介的な何かを急いで書き上げてみた

ミルキ・ゾルディック

我らが主人公。前世では多分漫画やアニメにはまっていた男の子だったはず。でも声優には興味がないのかもしれない。ミルキ・ゾルディックに転生してその人生を謳歌する。暗殺者としての訓練は受けるものの、近接格闘の才能は一流に至れるか否かという所。念の才能はぶつちぎりでネテロ会長も実はびっくり。実の祖父にはバカオーラと評される。念を使った戦闘なら負け知らず。というか中二病の能力がそれを助長している。

現在保有の能力は言わずと知れた『写輪眼』と『瞬動』。リリなの世界に来たことでG Iに使用していたメモリの分が余っているが、本人はそんな事を知らない。これも自分のステータスを把握する能力を作らなかったから。

死亡率高め of 例の世界ではポンズを自分の恋人とするも、自ら愛していないと気付くという作者もびっくりの理由で振る。ちなみに童貞ではない。リリなの世界では少しの活動後、バニングス家にアリサの護衛として雇われる。当初は仕事を無くさないために護衛だからアリサの事を第一に考えている。

リリなの世界では未だ人を殺してはいない。作者もびっくり。そろそろいらぬモブキャラを殺してイベントを進めようかと思つていたり。

容姿は銀髪でオヤジ——シルバの若い頃に似ている。つまりテライケメン。帰国子女の上に、転生者だから当然のごとく勉強が出来てスポーツは言わずもがな。つまりモテル。イケメンは世界の敵。

作者もびっくりの超人。最初の設定のバカというのは何処に行ったのか……。アリサに早い所フラグを立てて回収して欲しい。

アリサ・バニングス

我らがメインヒロイン。でも今のところ主人公にフラグを立てられた様子は無い。むしろ何でもできる護衛としか見ていない様子。自分を守ってくれているから、ミルキに対する好感度は低く無いと思いたい。ちなみに、彼女は誘拐された際に助けてくれたのがミルキであるとは気付いていない。

金髪緑眼のくぎゅ。ロングの髪だが、両脇で髪留めを使って縛っているのは何か意味があるのだろうか。

典型的な委員長タイプ。何でもできて、周りがだらしないと自分がしつかりしようとする。その頭脳は驚異の一言に尽きる。そろそろ中学生の問題も解けるのではないかと思われるほど。ちなみに本編には出てこない。

念能力者としては多分放出系か特質系になるのだと思う。念を習得するかは別にして。リンカーコアは勿論ないから、彼女が戦闘能力を得るのなら念ということになりそう。

親友のすずかがミルキに恋心を抱いているのを応援している。でも作者としては早くヒロインして欲しい。主人公からの呼ばれ方はアリサ嬢。彼女が成長したらどうなるのだろうか。

月村すずか

人物紹介において原作の主人公であるはずの白い悪魔を差し置いて三番手に付けるというヒロイン。主人公に助けられてからは発情期だった事もあって主人公に恋を抱いた。発情期が過ぎてからはどうなるのだろうか。

ちなみに夜の一族だが、それを知っているのは忍の婚約者である恭也と士郎のみ。友達にはいつ明かすのか決めていない。

読書好きで、運動もできる、完璧なお嬢様。唯一の欠点は夜の一族であるということ。ミルキに対して積極的になれない所か。多分それがなかったらすぐにでもミルキと付き合うことに。

最近ではミルキがアリサにフラグを立てず、すずかに立てていることから感想でハーレム展開に持つて行く事も上がっている。ちなみに作者が書いているもう一つの小説のヒロインでもある。そこらでは思いつきヒロインしている。

こちらでは唯一主人公に恋心を抱いているから最も関係が発展しそうな人。咲くさh的にはアリサ嬢に頑張つてほしいから邪魔でしかない。何で夜の一族なのか、最近では恨めしく思う。

夜の一族という事もあって、ミルキが彼女と付き合うことになるのならヤンデレになるのではないかと推測される。ちなみに作者的に一番彼女にしたいのはこの人が、ナカジマさんの所のギンガ。主人公からの呼ばれ方は月すず。一人だけ名前をあだ名という形で覚えてもらったと思っていて、結構気に入っている。

高町なのは

原作ヒロイン……いや、ヒーローか。どちらにしる、かの有名な白い悪魔。将来はきつと部下の事を「少し、頭冷やそうか」といいながら撃墜するはず。主人公に対しては名前を覚えてくれないいじわるな人という認識だったが、次元震発生のイベントを経て、フェイトを救つてからは彼の事が気にかかっている。

イタチの念話を受けて魔法に関わることになったが、その才能は流石原作主人公としか言わざるを得ない。

特技は「お話しよう?」といいながら言葉ではなく魔砲を放つ事。肉体言語で語り合つて仲直りして、名前を呼んだら友達だと

勘違いしているかわいそうな子。肉体的なスペックは戦闘民族の末娘だから計り知れない。念能力者としては強化系に属すると思われる。

ちなみに作者が書いている小説の一つでは物凄いヒロインしているけど、この小説で彼女が女の子であるのかどうかは分からない。むしろしたく無い。

原作での嫁はフェイト。娘はヴィヴィオ。愛人はユーノ。多分家族構成としてはそんな感じ。この小説では果たしてフェイトとユーノ、どちらが彼女のハートを射止める事が出来るのか。

最近主人公にやつと名前を覚えてもらった。

フェイト・テストロッサ

言わずと知れた金髪幼女。そして中の人は我らが奈々さん。ミルキは可愛い子の味方なので、彼女がピンチに陥った際に助け、フラグを立ててしまったかもしれない。金髪だから、ということではアリサに似ていて無意識のうちに助けようとしている事を主人公は知らない。

海鳴の街から宝石を集めて持つて行こうとしている。だから、事情を知らない主人公にしてみたら、なのはが持つて行ってもフェイトが持つて行ってもどちらでも良い。むしろ管理局よりもフェイトがとつと別の世界に持つて行ってくれないかと思っている。

バリアジャケットは早さ重視ということだが、どう見ても痴女。というか、バリアジャケットで空を飛ぶのに女性魔導師がスカートにする意味が分からない。フェイトの人物紹介で書くことじゃないけど。

念能力者だったら操作系だろうと思われる。天然だし。

ちなみに、作者的に声が一番好きなのはこの子。というのもメモオフの白河ほたるが好きだったから。気になる人は某文字が流

れる動画サイトにておしゃべり3Dというのがるので聞いて欲しい。奈々さん好きにはお勧め。

八神はやて

まだ出てきてない。

イタチ

本名ユーノ・スクライア。イタチではなくフェレットだが、そこらへんの区別はミルキにとってどうでも良い。美少女三人に撫でられているのを羨んでいる。

犬耳お姉さん

アルフ。主人公が名前を覚える気がないと名前を聞いていないからこれで固定してしまった。宝石を額にはめている事を不思議に思う。温泉ではアリサ嬢に対してちょっかいを出していたら確実に殺されていた、危ない綱渡りをした人。じゃなくて使い魔。

オッサン

アリサの父。ひょんなことから主人公と知り合い、雇う。ちなみに彼の会社は次元世界に進出している。名前はデビット。イメージは錬金術師の所の豪腕。

アリサ母

まだ出てきていないような気がする。原作でも名前が開かされていない。ちなみにこの小説では結構なおちゃめ人物の設定。お楽しみに。

高町父

高町の父。御神流の使い手で、主人公の認識としてはかなりの実力者。天空闘技場だったらずに200階までいけるのではないだろうかと思われる。ただし200階までは武器が禁止だが。

高町母

高町の母。シュークリームを創るのが上手らしい。作るではなく、創る。

高町兄、姉

妹。
どうでも良いから一くりにされてしまったかわいそうな兄

月村忍

月すずの姉。主人公には女神様と呼ばれる。かのロケットパンチを製作した超凄い人。もしかしたら主人公の中での優先順位はなのはよりも高いかもしれない。

鮫島

バニングス家で執事と運転手を務めるおじ様。ここで登場したのは作者に忘れられていたから。ちなみに重要なことはしないと思われる。でも、スペック的にはめちゃくちゃ高い人。執事界ではバニングス家にこの人ありと言われる凄い人。ここでは説明しきれない。

クロノ・ハラオウン

正直書くのを忘れ去られていた。だからこの後の人物紹介は母親だろう。ちなみに、作者はこの子が嫌いという訳ではない。叩くのにはピッタリな位置に居るから自然と風当たりが強くなる。インシャルがKHだから、KYではなく、この小説では空気破壊という不名誉な称号を与えられている。フェイトにいきなり攻撃したから主人公には嫌われている。多分フェイトがアリサに似ていなかったらそこまで嫌われなかったと思われる。

リンディ・ハラオウン

先に紹介した奴の母親。正直どうでも良い。日本文化を間違っ覚えてるあたり、管理外世界には興味がないと思われる。というか

そう言う設定。

その他アースラのスタッフ

そうやって纏められる。

チヨーク投げ吾郎

聖祥の算数の先生。未だかつてチヨークを避けられたのは主人公だけ。

担任の先生

名無し。

翠屋JFCのゴールキーパーとマネージャー

一番小学生ではない二人。リア充は爆死するべき。

ノエル、ファリン

み。
ここに来て忘れていた二人。説明はロケットパンチとドリルの

他に誰かいたらごめんなさい

人物紹介的な何かを急いで書き上げてみた（後書き）

書くと言言したのが前話を投稿した23時。
そして投稿するのが今。
かかったのは一時間半。

第二十八話 A's 編の始まり（前書き）

どうやらこんな駄作の更新を楽しみにしている人もいるみたいだったので一応書いてあるものはすべて更新しておこうかと。

でも、やはり感想で色々と叩かれているので続けることは無いと思います。

打たれ弱い作者ですみません

第二十八話 A's 編の始まり

一応あの後のことはアリサ母に任せて、俺は独り地球に戻り、再びアリサ嬢の護衛に付くことになった。

一方的な交渉の結果、バニングス家はかなりの大金を手に入れることになり、アリサ母はほとぼりが冷めるまでは暫く地球でアリサ嬢と一緒に暮らすらしい。

ここ数年はアリサ嬢に構ってやる事が出来なかったからその分を補うように、とはアリサ母のお言葉だ。

ちなみにアリサ嬢も久々の親子での暮らしにずっと頬が緩みっぱなしだ。

ま、可愛いですよ。

で、良く分からないけど俺の暴走を間近で見え俺の危険度を認識したはずのアリサ母は俺をアリサ嬢から引き離そうとしない。

俺としては普通の親だったら危険人物を子供の傍には置いておこうとしないと思っていたのだが、どうやら認識が甘かったらしい。

それどころか意味のわからない笑みとかで返される。

まあ、普段の生活は居たって普通だ。

正常に戻った月ですが俺に対して自分でも顔を赤くさせながら近寄ってきたりして、それでその事をアリサ嬢がからかいつつ、高町はお子様なのでそう言うことに疎い。

月すずのそれを適当にあしらいつつ、アリサ嬢のからかいを無視しては怒られ、高町に戦闘のイロハを叩き込んでいる。

月すずに関してはそろそろお熱が収まるのではないかと考えている。

まあ、所詮は一時の恋なのではないだろうか。

俺があの時助けに来た白馬の王子様改め黒塗りに乗ってきた殺し

屋であつたというだけなので、フラグとしては弱いものだと思つて
いる。

まあ、思春期を迎えたら異性を見る目も違ってくるだろう。
今は仲のいい男友達が俺しかいないから眼中に俺しか入っていないの
だろう。

……何だかその一文だけだと随分と自分に自信のある男みたいだ。
高町の戦闘訓練に関しては高町父に習えばいいのではと言つたところ、
魔法があるから聞けないとか。

俺としては無意識にフラグを立ててしまうことを防ぐためにも断
りたかつたのだが、まあ可愛い女の子の頼みですから仕方ない。
空中戦はどうすればいいのか分からないけど、魔法の訓練に関し
てはジャックにアドバイスをもらっているから問題ない。

最初は筋トレからと思つたのだが、良く考えたら肉弾戦がある訳
でもないでこの世界で生き残れるだけの戦闘術を身につけること
を目的にしている。

主にガードの練習と、攻撃された時に目を瞑らないように、そして
動体視力の強化。
動体視力については戦闘一家の血を引いているらしく、かなりの
物を持っている。

まあ、野性児ほどではないが。

でもって最後にアリサ嬢については持ちつ持たれつの関係といつ
たところ。

時折アリサ母の良く分からない言動とかが俺を惑わせているが、
まあそれに対処できないものではないし、無視しておけばいいレベ
ル。

何でか知らないけど、俺を見るたびに笑いをこぼしているのはど
うしてか。

それよりも、ここ最近はある人はアリサ嬢を弄って遊んでいるら

しい。

主に俺の事をネタにして。

というのは、例の俺が管理局で暴走した事件の日、さびしくなつてアリサが俺の事を呼び戻したらしい。

まあそれも仕方のない事だろうが。

アリサ嬢は小さい頃から家に居たのが両親でもなく、メイドと執事ということで鮫さんが話し相手だったらしいが、ここ数年では俺とぬこが居たから寂しく無かったらしいが、急に居なくなるからという話して呼び戻したらしい。

聞いてなかったというあの日のあの言葉はどうも嘘だったらしい。そのことだからかわれるのがここ数日の定番。

そんでもって恥ずかしがってるアリサ嬢、可愛いよ。

寝る時になつてそのことでアリサ母にからかわれて枕に顔を埋めるアリサ嬢の可愛らしさときたら……ごちそうさまです。

自分の娘の事なのにアリサ母も悶えながら撫で撫でしました。

ま、二人とも可愛いから許す。

重大ニュースの発表。

何と、我が念能力の『写輪眼』で魔法をコピーする事が出来ました。

試しにやってみただけど、意外とやれてしまった。

今のところ試したのはバインド、デイバインシューター他、高町のデバイスが持っている術式。

どれも一度で成功してしまい、高町を落ち込ませたのは記憶に新しい。

ま、そんなことはともかく夏を迎えて秋を通り越して季節は冬にちなみに夏には海に行きましたが、水着は月すずと高町がワンピースでアリサ嬢がへそ出しでした。

三人とも可愛かったです。

目の保養になりました。

ま、それはともかく海では“硬”の拳でモーセのごとく海をたたき割って遊んでいたのだが、意外と好評でした。

まああの場に居たのが三人娘の関係者だけだったからできた真似だが。

バニングス家、パナイです。

普通に自家用ジェットとプライベートビーチがありました。

まあいずれまた行くことになっているから海での細かいことはその時にでも。

秋には何もすることがなかった……というかイベントというイベントが何もなかったので色々観光名所を巡ったりだとか、その他食欲の秋ということで美味しいものを食べていたりしただけ。

あ、金髪幼女あてにビデオレターを送っていたりもしました。

まあ俺は一言もしゃべってなかったけど。

だって恥ずかしいものだぜ？

ビデオに向かって話しかけるとか。

しかもそれをアリサ嬢が見ていて、俺らしく無いとか笑い、月すずは苦笑いしてるだけで高町が何故か一人物淒くやる気になっていて。

一人でビデオに向かうのは勘弁してほしいです。

で、その金髪少女は何でかは知らないけどジュエルシードの事件では罪に問われる事もなく、今週中くらいにはこっちに来られるそう。

罪に問われないというのは俺としては予想外だった。

俺が暴れた事もあってあの金髪少女に悪い印象があるのではないかと思っていたが。

で、アリサ嬢は今月すずとお話しています。

携帯で。

ちなみに今日からアリサ母がまた次元世界に旅立っているのはアリサ嬢が寝るまで傍に居る役目を仰せつかることになりました。しかもアリサ母の指名で。

今まではアリサ嬢も一人で寝ていたのだが、話し相手が居ないというのは寂しいとか何とか理由を付けられてその役目をアリサ母から言われました。

ぬこだけで十分だと思っていたけど。

それよりも大変なことは、何だか知らないけどここ最近、特に十月ごろになってから時折この家というよりも俺の事を観察している視線。

しかもその視線は敵意の籠っているものでもなく、監視という視線でもなく、警戒している感じ。

何かあつたら困る、見たいな。

で、俺がその視線の方向に目を向けると観察している視線が無くなる。

俺に気付かれた事を気付くあたり、かなりのやり手だろう。

殺気があれば居場所をそれだけで特定できるが、殺気が漏れる事もないし、銀いろの髪ということで珍しく思っているだけなのかもしれない。

まあ、取り越し苦労に越したことはないのだが、一応気にかけるだけはしている。

一度“円”を使ってこちらを監視しようとしてる視線を見つけようとしたのだが、その方向には人影もなかった。

魔法の事もあるし、機械的な何かで飛ばしているのかとも思ったが、それも見つけれない。

でもって、魔法なら隠せるかもしれないと思って“凝”で見たのだがどうやら“隠”を使っている感じもなかった。

恐らくはそれなりに訓練を積んでいるかたまたま見ていただけか。まあ後者ということは少なくとも無いだろう。

たまたまにしては時間が長い。

が、それなりに訓練を積んでいるにしても俺に尻尾を捕まえさせないあたり、監視をすることに関してはかなりの達人だろう。

というか、“絶”を使っているとは思えない。

この世界に念能力者は自分がそうだと気付いている者はいないが、少しばかりなら気付かず作品に念を込めている者はいる。

だから“絶”の出来る人間が居ても不思議ではない。

或いは、野生の動物なら“絶”が出来るから、ぬこの飼主である俺に興味を持った野性動物が居たのかもしれない。

どちらにしても何か行動に移すつもりがないということはつき

りとしているが。

そんなことは置いといて、というくらいに重大な問題も今現在発生している。

人の気配が多数消えたのだ。

しかも気配が四つ、こちらを明確に目指して近づいてきている。

アリサ嬢が目の前から急に消えた時は驚いたものだが、これを体験したことはある。

恐らくはあの時と同じく、魔導師による“円”もどき。

ちなみにこれは結果というらしい。

多分魔力を持たない人間と持つ人間とで区別しているのだろう。

俺は魔力を持っていないのにもかかわらず、この“円”もどきに残された理由としては、多分能力で魔法をコピーした事と、念能力者であることが関係しているのだろう。

どちらにしてもここで戦闘する訳にはいかない。

「招かれざるお客が四人……いや、三人と一匹か」

一人は桃髪の剣士、一人はハンマーを持っていて、一人は指輪をはめて何かの本をその手に、そして一匹は犬耳お姉さんの犬形態に似ている。

一番年上っぽいお姉さんが持っている本は多分魔法的な何か。

“凝”で見てみた感じでは、旅団の団長の能力の本に似ていた。多分能力としてもそんな感じだろう。

そして困るのは桃髪の剣士とハンマーを持っている幼女、かなりの使い手である。

具体的には魔法を使える御神流みたいな。

「ヴィータ、ベルカの騎士としては一対一でやりたい所だがこいつは強い。全員でかかるぞ」

「わーってるよシグナム」

一瞬で力量を見抜くということはそれなりの猛者。

オラの流れは高町父と比べてもそんな色ない。

そして俺にとっては厄介な相手である。

犬はともかく、お姉さん二人と幼女一人は怪我をさせるのは忍びない。

俺は可愛い子の味方なので。

「出来れば何もせずに帰ってほしいねえ。あんまり傷めつけたり殺したくはないから」

出来る事ならそう言った類は使わないようにとアリサ母に言われている。

最初は言葉で、ダメなら実力を見せつけて、殺すのは最後の手段にと。

「こちらにも引けぬ理由がある。恨みはないが貴様のリンカーコア、もらいうける！」

そう言いながら桃髪の剣士が剣に炎を纏わせて攻撃してくる。それを紙一重で避けつつ、続いて攻撃してきた幼女のハンマーも避ける。

それを何度か繰り返している内に、犬も参戦してきて三対一に。でもって緑のお姉さんは何かを狙っているみたいなのでそれには一応警戒をしている。

ところでリンカーコアというのはどこかで聞いた記憶があるのだが、何処で聞いたんだろうか。

まあ思い出せないということは俺にとってはあまり重要なことではないのだろうか。

でも今はそれ関連で襲われているということはやはり重要なものだったのだろうか。

いずれにしても避けるだけというのも疲れるものだ。

「なあ、分かったろ？ あんたらじゃ俺に攻撃を当てる事も出来ないの。力の差を理解したらとつとつ——あぶね」

急に緑のお姉さんの腕が飛び出してきた。

恐らくは放出系の能力者。

グリードアイランドに居たボクシングを担当している奴と同じような能力なのだろう。

念には念を入れて“円”と“凝”を使いながら戦闘していなかったら危なかった。

「外した!？」

驚くのも無理はない。

予備動作が少なかったから初見で避けられたことはなかったのだろつ。

攻撃としては実にいい攻撃だった。

が、“凝”をしていてわかったのだが、こいつらどうも人間ではないらしい。

操作系か、或いは具現化系か。

どちらにしても魔力で構成されている人型。

ただし自分の意思で行動しているみたいだが。

「あんたら人間じゃないんだろ？　なら、引いてくれないなら俺も実力行使に訴えるよ？　心臓のあたりを見てみ？　さっきの一瞬で全員に印を付けたんだけど、次はそこにナイフを打ち込むからね？」

ナイフというよりは肉体操作した自分の腕だが。

「貴様の力は理解している。だが我々として主の為に引けぬ理由があるのだ！」

なら仕方ない。

死んでもらうとしよう。

あ、でもアリサ母になるべく殺さないようにって言われてるしなあ。

「はいストップ。何だっけ、リンカーコア？　それが欲しいんだっけ？　それ何なの？」

「魔力の源だ。……まさか知らないのか？」

「いや、俺魔法使えないし。で、それを取るとどうなるの？」

「……魔力を奪うだけだ。じきに回復する。しかし本当に魔法が使えないのか？　ならば何故結界内に残っている」

なんだ、そう言うことなら最初から説明しとけよ。

いきなりリンカーコアをもらいうけるとか言われても反撃するしかないじゃないか。

でも結界内に残ってる理由とか魔法をコピーした事くらいしかこいつらで理解できることは思いつかないよなあ。

「ま、そのリンカーコア？　とか言うのが俺の中にあるんだったら持つて行っても良いぞ？　どうせ魔力なんてないから」

魔法が使えても、魔力がないのは高町と念話が出来なかったことで確認済みだ。

「……シャマル」

「まさか……本当にないわ」

「じゃ、もう用はないな？　これ以上何かあるんだったら流石の俺もキレルからな？　最近殺しはダメだって言われてるから我慢し続けてるんだよ。ちょっとした拍子でも爆発するぞ？　というかあんたらなら殺しても生き返るんじゃない？　魔力とやらで構成されてるんだし」

「皆、引くぞ。……迷惑をかけた。我々はこれで失礼する」

「おい、無視ですかー？ えー、それ酷く無い？ やるだけやって俺にフラストレーションを溜めさせて逃げるって。おい、ホントに逃げるのかよ。……がたがた言っでないで先に殺せばよかった」

あ、でも殺したら話が出来ないのか。

全く殺さないというのは意外に難しい。

アリサ母、俺にはその選択肢を取るのは未だ早かったみたいです。

第二十九話 体育の授業

どうも、ミルキです。

ここ最近、特にあの三人と一匹に出会ってから監視の視線が強くなってるみたいです。

尻尾を掴ませない当たりは流石、どうもこの街には“絶”の達人が複数いるみたい。

今度本気で探そうかとも思っているくらいです。

まあずつと監視されてる訳じゃなくて時折というのも常なんだけど。

だから別に俺が被害を受けてる訳じゃないし本気で、という気にはならないのが本音という所。

でもあの三人と一匹になってから監視の視線が強くなったということは、魔法がらみであることは間違いない。

今度管理局だったらヤツチャオウカト。

ま、アリサ嬢並びにバニングス家に迷惑がかかるのでその時になったらお伺いを立てるか或いはなるべく考えるようにするが。

それよりも問題はさつきからアリサ嬢に言われて高町を探しているのだが、見当たらない事。

先ほどの魔法関連、つまりは結界が張られたことに関係があるのかも知れない。

あの瞬間に高町が狙われたのだろう。

というか、結界は解けたからそれから探していたのだが、どうやらこの世界には居ないらしい。

俺の“円”を全力で展開してみても引つかからなかったし、何よりもダウジングが全く反応しない。

だから携帯で掛けてもらおうとしたのだが、携帯で繋がらなかったから俺が探しているのだと思ったのは世界地図で探していた時。

そして世界地図でさえ反応しないとなると、どうやらこの世界には居ないらしい。

つまりは次元空間とやら、或いは他の世界に居るのだろう。

しかしアリサ嬢にこの世界には居ないようですという訳にもいかず、今日はどうやら調子が悪いようですと言っしかなく怒られました。

しかも役に立たないとか言いたい放題。

ちよつとむかついたから頭を殴っておきました。

本当はアリサ母とオッサンが先にアリサ嬢に魔法の事に付いて言う方針なら迷わずに言えるのだが、まあアリサ嬢が会社を継ぐ時になつてというのが二人の方針だから仕方ない。

で、どうやら高町が居ない事に付いて大騒ぎになる前に高町から家に電話があつたそうで、俺が調子が悪かつただけだということで落ち着きました。

……まあ、相変わらずアリサ嬢が変な目で見てたから殴つていたけど。

その後殴り返そうとアリサ嬢が躍起になつてたけど“絶”と肢曲を使う俺を見つける事も出来ず、悔しがっていました。

それもかなり可愛かつたです。

出てきなさいよー！ とか言いながら屋敷の中を駆け巡つてゐる時の顔とか。

ビデオに撮つてあるのでそれはアリサ母とオッサンあてに送っておきました。

将来アリサ嬢が成長したら見せてあげるつもりです。

多分恥ずかしがると思うから。

で、翌日、どうやら金髪幼女がこの世界に来たらしいのでアリサ嬢と月すが挨拶に行きました。

そしてそれに付いてきているのが例のアーススタッフというところで俺は面倒を起こさないように傍での護衛はぬこに任せて、100メートルほど離れた所に居ます。

俺がこの世界に居るのに良くこいつらが来たものだ。

一応報告だけはアリサ母にしておいたけど、殺さないようにと厳命されました。

何でも俺が手を出さないように手綱を握る代わりに、ミッドチルダにあるバニングス家の敷地内では治外法権を認めさせたのだとか。まあ、魔法が効かない相手ということでかなりの危険人物に認定されているのだろう。

ここ最近で思うことは、バニングス家と管理局の関係は江戸幕府時代の日本とアメリカのような関係。

勿論バニングス家がアメリカ。

治外法権だけでなく、関税自主権までも認めさせ、他にもいくつか特権を認めさせたというのは本当にその関係しか思い浮かばない。

まあ、それだけのことを認めさせるくらいに俺が管理局に危険視されているということなのだが。

明日から金髪幼女が学校に行くらしいです。

この間会った時とは違って、頬を赤くして恥ずかしがっている姿には100点を上げよう。

そして萌えポイントは10点を。

というか今更に気付いたけど、金髪幼女と高町ってリボンを交換してたんですね。

いつの間に高町のリボンが黒に変わったのかと思っていたけど。

それはともかく、翌日の学校。

あ、昨日からは既に一日経っているのです。そこを忘れてなきよう。

ということで、学校。

金髪幼女が俺の時と同じように外人の転校生ということで囲まれて質問攻めに会っています。

で、恥ずかしがっている姿にはいつも通り萌えポイントを上げよう。

溜まったら特典があるということではないが。

それはともかく、グループは我々の所に入ることになりました。

高町や月すず、アリサ嬢と知り合いだからということ。

両手に花どころかハーレムです。

どうだ羨ましいだろ。

ま、どーせ俺に好意を持ってきているのは月すずだけなんだけど。

どうやら俺が管理局相手に暴れたのは金髪幼女にも知られていらしく、かなり怯えられています。

ミルキ君少しショック。

可愛い女の子相手には度が過ぎないとお仕置きしたりしないのに。

この間の三人が良い例だ。

あれは女の子という年齢ではなかったけど、いきなり襲いかかれても、そして人間ではなく人型でも耐えた。

あの後熱い思いを静める為にずっと“点”をしていたが。

それはともかく、担任だと思っていたチヨーク投げ吾郎は担任ではなく体育の担当教師だったらしい。

担任は確か……田中？ いや、佐藤？ うーん、鈴木だっけ？

まあ、多分その中のどれか。

確率的には近いはず。

ちなみに女性です。

そして体育の時間、俺の目の前で超人ドッジボールが行われていきます。

まあ、超人ドッジボールといってもグリードアイランドであったような死人が出るほどのものではない。

金髪幼女と月すがスーパープレイを繰り返しているだけ。

そして俺は手加減が難しいから体育は常に見学。

チヨーク投げ吾郎には、俺の弾の威力を見せ付けて死人が出るからということで特別に許可をもらっています。

そして今日はそれに疑問を持った男子が多数。

というのはつまり男子対女子のドッジボールが小学校ならある訳で、女子の側に当然金髪幼女と月すが居るから男子が勝てる可能性は万に一つもないのです。

「おいミルキー。お前もやれよー」

だから俺がやると死人が出るから。

それよか俺の名前を伸ばして呼ぶのやめい。

どっかのママの味がするキャンディーにしか聞こえないから。

「あ、あのね、ミルキ君。私もやって欲しいかなあなんて……」

可愛い女の子の頼みとあっては仕方ない。

月すずの可愛らしさに免じて参加してやるだけ参加してやろう。

決して彼女の上目使いに屈した訳では無いのでそこを間違えないように。

おいこらそこの金髪娘、何をニヤニヤしている。

「べつつにー？ 私はただ男子が頼んでもダメなのにすすかなら良
いんだなんて思ってないわよ？」

それは思ってる奴しか言わないんだよ。

よし、決めた。

まず最初に何があってもアリサ嬢にボールを当てる。

ボールに念を込めなければ死なないはず。

ビスケが投げたボールも誰か受け止めてた気がするし。

ということでジャンプボール。

転入生同士のボールの取り合いということで金髪幼女対俺。

「ふっ、金髪幼女、俺に勝てるつもりか」

「き、金髪幼女じゃなくてフェイトだよ。君には前にも言ったはず

………というか君と同じ年何だから幼女じゃないよね」

甘いな。

この年齢なら例え同年代からでも幼女と呼ぶのは不思議ではない
のだ。

「それに私だつて負けないよ」

何だかやる気になつてゐる金髪幼女。

物凄く可愛いので萌えポイントを上げよう。

これで今のところ萌えレースは一位がいつも一緒に居るアリサ嬢、二位が月すず、三位が金髪幼女になつた。

高町は逆転されて四位に。

五位以下は誰がランクインしているのか知らないけど。

「女神様に頼んで改造してもらつた我がロケットパンチ、その威力をとくにご覧あれ。金髪幼女、的の貯蔵は十分か？」

「え？ ロケットパンチ？ そ、そんなの聞いてないよ」

ヤベえ。

こいつ天然だ。

今で萌えポイントが二位の月すずに迫る勢い。

かーいーです。

「チヨーク投げ吾郎、一つ頼みがある」

「ゾルディック、僕は吾郎先生じゃない。吾郎先生は算数の先生だ」

あ、そうなの？

てつきりこの人がチヨーク投げ吾郎かと。

あ、でも良く考えたら体育教師がチヨークを投げることなんてないか。

「まあ、些細なことは気にするな。それよりもジャンプボールは全力で投げてくれ」

全力で投げてもらわないと俺のジャンプ力が活かせない。

というか見る限りでは全力で投げないと金髪少女が自分の運動神経を活かせないだろう。

俺は彼女の全力を正面から打ち破ってやるのですよ。

フェアプレイ精神だ。

そして良く分らないが体育教師の怒りをいつの間にか買っていたらしく、力の入れ具合を見るに全力で投げしてくれるようす。

まあ、ジャンプボールが取れないということはないだろう。

彼が投げるのを見計らって同時に俺も全力でジャンプ。

「ってしまったー！ ボールよりジャンプしたら意味ねー！！」

くそつ、あの教師俺を謀ったか？

やられたぜ。

まさか全力で上に投げると見せかけて俺のジャンプよりも低い所にボールを投げるとか。

しかも金髪少女はそれを見極めたらしく、普通にジャンプしてボールを取っていた。

「流石だ金髪少女。ボールの高さを見極めて俺に勝つとは。負けたよ」

「ええと、ありがとうで良いのかな？」

「流石にアリサ嬢と同じく金髪なだけはある」

後で頭を撫で撫でしてやろう。

「今よすずか！ 当てなさい！」

何と……俺が金髪少女と話している間に月すずに任せて俺をアウトにしようとかくらむとは。

流石にあの人の娘だけはある。

しかも月すずも俺に良い所を見せようとしているのか分からないけど彼女、全力でボールを投げてきました。

あのボール、普通に一般の男子が受け止めたら気絶するくらいの威力はあるよ？

月すずはそれを俺に当てようとしてるの？

あ、でもあのジャンプとか月すずを救出してる所を見たら何をするかわからないから全力を出すのは当然か。

で、ここで俺がよけたら後ろの奴に当たって後ろの名もなき男子が気絶すると。

まあ、受け止めるしかないし、何よりもアリサ嬢を最初にアウトにする予定だったからちょうどいい。

構えて、ボールを打つ！

「はっ！ 見たかアリサ嬢！ これでアウトに——」

「あんたがアウト」

「な、何！？ ドッジボール何だから打ち返せばアウトに」

「ならないわよクッション制じゃないんだから」

何と……グリードアイランドのルールが世界共通じゃないのか。知らなかった。

まあ、まだバックの宣言は残しておけるからこうなったら終了間際に当てるということで良ししよう。

と思っていたのが数十分前。

バックの宣言は認められないらしいです。

何でも外野の選手は内野の選手に当てないと中に戻れないとか。でもって内野に残っているのが月すずと金髪幼女だけだから俺に当てることは不可能。

これは確実に負けたと思った瞬間に翠屋JFCのゴールキーパーが当てられて試合終了になりました。

「くそ……ドッジボール、侮りがたし」

まさかドッジボールにも多種多様の能力があるとは。

ジャンプボールに始まってクッション制が無いとは……。

結局最初の目的だったアリサ嬢をアウトにすることは田中、佐藤、鈴木の誰かにしてやられたし。

しかも超人二人のせいで男子側は負けたし。

「あんたって以外にバカよね」

「あ、アリサちゃんストレートすぎるよ」

「そうだぞアリサ嬢。月すずの言う通りだ。それにドッジボールって以外に手加減が難しいんだぞ?」

「……手加減って何よ」

「相手に当たっても死なないくらいの威力を保って且つアウトにすること」

「し、死ぬって……大げさなの」

いや、普通に死ぬって。

普通に投げてでも死ぬし、ゴンみたくパンチしたらまず間違いなく木っ端みじんになる。

「じゃ、やってみつか。どっかに壊しても良いものは……あ、あの壁で良いか」

“練”でオーラを増幅させてそれをボールに纏わせて。

肉体操作して筋力を一時的に上げてボールに全て力を伝えて放る。

それが壁に当たって砕けて……あ、プールが。

「……ちなみにボールを殴ると更なる威力が」

「誤魔化そうとするな！　っていうかあんたこれどうするつもりよ！」

「まあ、バニングス家から弁償して——」

「あり得ないわね。あんたの給料から引くわ」

第三十話

あ、そう言えば俺がプールを壊してから、その修理は管理局から分捕った金でやってもらいました。

アリサ母には感謝してもしきれない。

まあ、借りは返してもらうとかそういう系の笑みを浮かべてたけど。

でもって、高町が何故か身体の調子が悪そうだったのでぬこを抱かせて暫くそのままにさせておきました。

まあそれで随分と調子は良くなってたみたい。

流石は癒しの権化、ぬこ。

調子が悪かったのは魔法関係みたいだったみたいだけどぬこにとってはそんなことは関係なし。

高町は自分で何で良くなっているのか理解できてなかったみたいだけど。

まあ、魔法関係の事を大方管理局に治療してもらって数日かかるとか言われていたのをぬこのおかげで一日で治ったんだから仕方ないが。

そんなことは彼女の事情だからどうでも良いんだが、どうしてか、俺は厄介事に巻き込まれるスキルでも持っているみたいです。

それも多分ランク的に行ったらAくらいの。

というのも、今は結界の中。

例の三人と一匹組が何かこっちに向かってきてるなあと思っていたら通り過ぎて、かと思っいたらいきなり結界の中。

でもって奴らがまたリンカーコアとやらを欲しがってるのかと思ったら俺が狙いではなく、奴らが狙われていたらしい。

結界の中全てを“円”の範囲に入れてみたら、中に居たのは魔導

師が十人ほど、そしてあのクソ餓鬼。

まあ、管理局が出しゃばってきているということはあの三人と一匹組は犯罪者とかその類何だろうけど、俺にしてみればクソ餓鬼と敵対していることは喜ばしい事なので……。

というか俺がこの世界に居ると分かっていてなおかつ強硬策に出てくるとか。

しかも例の監視の視線もあるんですが。

こちらは両方に気取られないようにしてるみたいだけど。

あ、高町と金髪少女が現れた。

それにこの感じは……何時だったかの金髪の男と犬耳お姉さん、それに桃髪の剣士も来たか。

そっぴやあの金髪のオーラ、どこかで見た事があると思ってたらあのイタチにそっくりだ。

……犬耳お姉さんの例もあるし、もしかして同一人物？
だとしたらあいつ温泉に行ってた時にアリサ嬢達の裸を覗いたのか？

後でとつちめるか。

それよりもどっちに味方するかだよなあ。

金髪少女と戦ってるのは桃髪のお姉さんだし、高町と戦ってるのはハンマー少女だし。

どっちに味方するかって言うて困る所だ。

まあ、アリサ嬢に聞いたら間違いなく高町と金髪少女って答えるだろうけど。

その二人は危なくなったら助けてやるとして、クソ餓鬼はやられるように相手を助けてやるだろ。

犬耳お姉さんとあの……あれ？

犬じゃなくて人間になってる。

犬耳兄貴？

って言うかクソ餓鬼が居ねえ……外か。
俺も外に出るとしよう。

——“円”

居た。

それに緑のお姉さんも。

そして俺を見張ってた視線もそちらに向いている。

あーあ、あのクソ餓鬼おとなしくしてれば俺が手を出す事もなかったのに。

「搜索指定ロストログアの所持、使用の疑いで貴方を逮捕します」

「たわけそんな事させるか」

“絶”で背後から近づいたまま腹を殴る。

高町の話しによればバリアジャケットなるものを魔導師は付けているからかなりの耐物理防御を誇るそれをきていれば死ぬことはない。

最も死んでもかまわないからオーラなしの全力で殴ったが。
そしてそいつがそのままフェンスに激突する。

「ん、未だ意識があるのか。バリアジャケット、聞いてたよりも中々の性能だな」

「あ、貴方は……」

「や、お姉さん。久しぶり。まだあのリンカーコアとか言うの集めてるの？」

む……こつちに向かっていた奴の気配が消えた。

このお姉さんを助けるつもりだったのか。

それは悪い事をしたなあ。

「もしかしてまだ仲間が居た？　ここに向かってきてる奴が居ただけだ」

「い、居ないわ。守護騎士は四人だもの」

正直に答えてくれるか。

まあこの間実力のほどを認識してるだろうし、あのクソ餓鬼を発見したことでオーラに悪意があるから仕方ないと言えは仕方ないが、余波で俺に恐れを感じているのだろう。

でも仲間じゃないってことはあの視線の主は誰なんだ？

かなりの使い手であることは間違いないが。

「それよりリンカーコアとやらが欲しいならあのクソ餓鬼から奪いなよ。その間だけは待っててあげるから。んでもって中に居る二人の幼女、俺の護衛対象の友達なんだよねえ。殺されるのも不味いからこの結界とやら破壊するよ」

「き、貴様は……こんなことをしてタダで済むと思っているのか！　軽犯罪では済まない行為だぞ！」

回復が早いな。

バリアジャケットとやら、思っているよりも全力で殴っても大丈夫みたいだ。

「えっと、『ディバインバスター』」

おお！

これ中々の威力じゃないか。

流石は戦闘民族高町の末娘。

えぐい魔法を考えるものだ。

普通にあのクソ餓鬼に直撃して意識を刈り取った。

バリアジャケットとやらもボロボロになってるし……死ななかったか。

それなら一番威力のある奴を撃てば良かったかなあ。

「じゃ、お姉さん早くするように。後十秒で撃つから。『スターライトブレイカー』」

確か高町はこれが自分の持つてゐる魔法の中で一番威力が高いつて言つてたしなあ。

俺も受けてみたけど流石にあれば“堅”じゃないと受け切れなかったし。

まさかレイザー並みの威力があるとは俺も思つてなかったし。

ただ、溜めの動作が必要だし直線でしか斜線がないから使いどころが少ないが。

そして溜めの動作が終了して威力が必要な所まで集まったのでそれを結界めがけて撃つ。

ちなみにお姉さんの方は何だか蒐集とか言うことを終えたらしい。

やはり旅団の団長の能力、『盗賊の極意』と同系統のはず。

制約は相手を痛めつけてリンカーコアとやらを奪うことで、能力としては奪った相手の魔法を使えるとか？

特質系の能力だな。

「んと、高町と金髪幼女は……と」

気絶してるらしいクソ餓鬼は放っておいて、“円”を展開して高町と金髪幼女を探す。

そしてまず見つけたのは、この間から今の今まで俺の事を監視していた主。

どうも男のようだ。

俺としてはどうせ監視されるなら可愛い女の子にされたかったが、まあそんなことで文句を言ってもしょうがないか。

「そこに居る俺を監視してる奴。出てこい。三秒以内に姿を見せない場合は殺す」

「……」

うわー……仮面してるよ。

恥ずかしく無いのかな。

というかこいつで決まりだな。

そしてこいつは以後変態仮面と呼ぶ事にしよう。

オーラの流れが非常にきれいだ。

やはりこいつも高町父と同レベルの戦闘能力を有している筈。

「で、あんた誰」

「……貴様には関係ない」

人を監視しておいて姿をあらわして何者が聞いたらそれか。

「あんまり調子こいてると殺すよ？」

一応アリサ母に禁止されてるけど。

まあ、アリサ母も俺が精神的苦痛を感じているとか、監視されて

たとか知ったら納得してくれるはず。

精神的苦痛なんていかほども感じてないしむしろ監視されてる状況を楽しんでた節があるけど。

「ついでに、今度から監視してたら迷わずとつちめに行くから。分かったら行って良し」

オーラは覚えた。

俺の『写輪眼』はオーラを色で見分ける。

……サーセン、言ってみたかっただけです。
でも色で見分ける事が出来るのは本当の事。

アリサ嬢と月すがテストロッサ、高町とのお茶会に向かっている。

ちなみに金髪幼女と呼んでいたならそれを訂正させられたのでテスト

タロツサと呼んでいる。

良く考えたらアリサ嬢も金髪幼女なのだし。

それはともかく、こちらを監視している視線がいくつかある。

もちろん中にはこの四人娘が可愛くて目立つからつい見えてしまつというものもあるが、複数の視線の中でも多くを占めているのが俺を注視しているもの。

恐らくは管理局。

高町とテストタロツサの心音がおかしいことから、この二人が一枚かんでいるのだろう。

ならばアリサ嬢と月すずに被害は及ばないと思いたいが、万が一という事もある。

いつもなら少し離れた所で護衛の任に付いているが、今日限りは何があっても対処できるようにすぐ隣にいる。

勿論、一番好ましいのは何も起こらないことだ。

だが、高町とテストタロツサの様子を見るにどうもそれは望めない。何も起こらないように手を打つという事も考えないのではないのでチェックはしかけた。

それも一人ひとりにとってはチェックメイトのチェック。ぬこが前を歩くことで警戒もしている。

「あんた、また様子がおかしいわよ」

「気にしないで。複数の監視の視線があるだけなので警戒している」

「え、監視ってまさか」

「いや、アリサ嬢と月すずが狙いではない。むしろ俺」

やはり、それに間違いはない。

高町とテストロツサが反応したことはそう言うことだ。

翠屋まで十数メートル。

中に入ってしまったえば高町父がいるだろうから、アリサ嬢の事を任せてこちらの対処をする事も出来る。

「あんたならそれくらいどうにか出来るでしょ」

「だがアリサ母から殺しは禁止されてるからこちらから仕掛ける訳にはいかない。むしろこのまま進んで翠屋まで行ってしまうえば高町父が居るから——失礼」

背後からの殺気を感じ、オーラを背中に集中させて『瞬動』の能力を発動。

アリサ嬢と月すずの二人を抱きかかえて翠屋までコンマ二秒で辿り着く。

そして今の一瞬で感づいたらしい高町父がカウンターを飛び越えて、小太刀を二本持つて俺と入れ替わるように外へ。

既に抜身の状態の小太刀は人の目を引くが、そうも言っていられない。

現に彼が反応するほどの殺気があり、高町父としては敵がいるので自分の事についても警戒しているのだから。

さっきまでの監視だけならこれだけの事をする意味はないが、殺気を感じたのだ。

大げさなことではない。

一流が相手ならともかく、俺に対しての攻撃がそれたら二人に当たるという可能性も捨てきれない。

「高町母、申し訳ない。お騒がせする」

「今士郎さんが飛び出ていったけど何かあったの？」

「敵が複数、監視だった視線に殺気が籠った。故に高町父も反応したのだろう」

店の奥で皿洗いをしていたらしい高町兄とその婚約者も姿を現す。高町兄も隠し持っていたらしい飛針を手に行っている。騒ぎを耳で聞きつけたのだろう。

「高町兄はこの二人をお願いする。俺は――」

一瞬で距離を詰める。

手刀を一闪、崩れ落ちる直前の男の襟を掴んで引きずる。

「――こいつを使って外を片づけるので」

中にも居たみたいだ。

今の騒ぎで呆然とするどころかオーラの揺らぎが何かを企んでいたものであることを示していた。

外にそのままこいつを引きずって出てみれば、高町父が自分の娘とその友達を庇うようにして立っている。

その二人は茫然としていて、事態の進行に付いていけていないらしい。

そうになると、殺気を放っていた者は高町とテストロッサが企んでいた事には関係のないものなのだろうか。

だがもれた殺気はアリサ嬢でも、月すずでも、高町でもなく俺の居た方向に向いていた。

ならばこの一連の流れに沿っていたと考えるべき。

――“円”

周囲の状況を知るためにオーラを広げる。

殺気を飛ばした主の事を高町父が発見できていないということは、それなりの使い手か。

そしてオーラの揺らぎが不安定な者を発見し、“絶”。

気配を断つて、距離を詰めてから膝の裏を蹴って膝を地面に付かせる。

頭が垂直に落ちてきた所で襟を掴んで肉体的操作した指先を首に食い込ませて耳元で言う。

「五秒やる。こちらの質問に答える。何者だ。誰を狙った」

「や、雇われたただけだ！ バニングス家の令嬢を攫えば報酬を出すと言われた！」

なるほど、それなりの使い手であり、しかもこちらを監視しているというあからさまな視線があったから気配を隠して潜んでいる者がいるとは思わなんだ。

そしてあの一瞬、殺気が俺の方向を向いたのは明らかにアリサ嬢を護衛している奴がいるからその排除を先に、と思ったのだろう。

どちらにしてもここから先は表でやることではない。

裏まで引つ張って行って、拷問を混ぜながら楽しく情報を聞きだすべき。

どちらにしてもアリサ嬢達に見せても良いような内容ではない。

あ、鮫さん？ 車出して。アリサ嬢を狙った奴を捉えたから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2779n/>

暗殺者とお嬢様

2010年10月15日00時03分発行